



日韓の過去・現在を見つめ
未来を考える

2010年度

第7回日韓大学生国際交流セミナー報告書

主催 お茶の水女子大学グローバル教育センター
お茶の水女子大学グローバル文化学環
同徳女子大学校外国語学部日本語学科



民族衣装を着て記念撮影（同徳女子大学校）



国会議員にインタビュー（国会議事堂）



グループ討論（ソラク山合宿所）



研究発表会（ソラク山合宿所）



38度線を越えて北朝鮮を見る（統一展望台）

目次

第7回日韓大学生国際交流セミナー概要	1
森山新（お茶の水女子大学）	
開会の挨拶	6
森山新（お茶の水女子大学）	
記念講演	
ホスピタリティ日本語のコミュニケーション ーその概念と日本語教育への提案ー	7
李徳奉（同徳女子大学）	
グローバル時代と日韓関係	17
森山新（お茶の水女子大学）	
グループ別研究発表	
日韓における女性の社会進出	19
慰安婦 ー過去の傷を癒し、平和なる未来へー	29
日韓の家屋の比較から考えるこれからの家屋の在り方について	39
日韓の若者文化 ー自己表現とコミュニケーションの観点からー	47
日韓両国の教育問題についてー大学受験と高校生活ー	53
個別レポート	
セミナーを終えて	62
セミナー分析	
第7回日韓大学生国際交流セミナーの意義と今後の方向性 ー参加者のアンケートを通してー	96
西岡麻衣子（同徳女子大学非常勤講師）	
第7回日韓大学生交際交流セミナーを振り返って	105
鄭在喜（お茶の水女子大学大学院生）	
総評	
第7回日韓大学生国際交流セミナーを振り返って	107
金榮敏（同徳女子大学）	
グローバルな人材育成のための実践の場として	109
森山新（お茶の水女子大学）	

第7回日韓大学生国際交流セミナー概要

森山新（お茶の水女子大学）

日時 2010年8月17日～24日

場所 韓国・同徳女子大学校（ソウル特別市城北区）、雪嶽山合宿所（江原道襄陽郡）

主催 お茶の水女子大学グローバル教育センター・グローバル文化学環
同徳女子大学校日本語科

参加者 お茶の水女子大学24名、同徳女子大学校30名

指導 お茶の水女子大学 森山新、鄭在喜
同徳女子大学校 金榮敏、西岡麻衣子

日程

8月17日 訪韓、歓迎式（仁寺洞）	
8:00	成田国際空港集合
10:00	出国
12:35	仁川国際空港到着
15:00	仁寺洞チリ山新館にて歓迎会
17:00	ホームステイ先へ
8月18日 開会式、文化体験教室（同徳女子大学校）	
10:00	開会式 開会の挨拶（金榮敏、森山新） 出席の先生方の祝辞（尹福姫先生、澤田信子先生、石井直美先生） 記念品贈呈 オリエンテーション
10:40	記念講演①「ホスピタリティ・コミュニケーションを求めて」 李徳奉（同徳女子大学校）
11:10	記念講演②「グローバル時代と日韓関係」 森山新（お茶の水女子大学）
11:45	同徳女子大女性学センター博物館見学
13:30	文化体験教室① テコンドー
14:30	文化体験教室② 農楽
15:30	文化体験教室③ 日韓伝統衣装体験
16:30	グループ別実習打ち合わせ
17:30	解散

8月19日 グループ別野外実習（ソウル市内）	
	5つのグループがそれぞれのテーマに基づき、野外実習を行った。
8月20日 合宿1日目（洛山寺、発表準備）	
8:00	大学集合、バスで雪嶽山合宿所へ
13:00	雪嶽山合宿所到着
15:30	洛山寺
19:00	グループ別討論
8月21日 合宿2日目（グループ別発表会、韓国料理体験）	
9:30	グループ別発表準備
14:00	グループ別発表会 若者文化（若者文化グループ） 女性の社会進出（女性グループ） 日韓の家はこれからも輝くよん（都市・ITグループ） 「慰安婦」過去の傷を癒し平和なる未来へ（歴史・平和グループ） 教育問題のこれから（教育グループ）
19:00	韓国料理体験（チジミ、トッポッキ、韓国のりまき、チャプチェ、お好み焼き）
8月22日 合宿3日目（雪嶽山・統一展望台観光、送別会）	
9:00	雪嶽山観光
13:00	統一展望台、6.25戦争展示館見学
20:00	送別会
8月23日 合宿出発、ソウルへ	
9:00	合宿所出発
14:00	ソウルガーデンホテル着
14:00	自由時間
8月24日 自由時間、帰国の途へ	
14:00	集合空港へ出発
17:30	仁川国際空港発、帰国の途へ
20:00	成田国際空港着、解散

日本側参加者（24名）

グループ	名前	学籍番号	所属	学年
女性	中里光徳	0910142	人文科学（グロ文）	2年
女性	中村紗織	0510259	言語文化（グロ文）	4年
女性	白井綾乃	0910235	言語文化（グロ文）	2年
女性	本多由衣子	0910267	言語文化（グロ文）	2年
歴史・平和	鈴木智子	0910132	人文科学（歴史）	2年
歴史・平和	出分日向子	0910419	人間社会（グロ文）	2年
歴史・平和	五十嵐美季	0910206	言語文化（グロ文）	2年
歴史・平和	岡戸美希	0910217	言語文化（グロ文）	2年
都市・IT	李由衣	0910158	人文科学（歴史）	2年
都市・IT	安念美智子	0910205	言語文化（グロ文）	2年
都市・IT	相澤紀衣	0910101	人文科学（グロ文）	2年
都市・IT	安藤瞳	0910103	人文科学（グロ文）	2年
都市・IT	八波理奈	0712404	人間社会（グロ文）	2年
都市・IT	南坂葵	0910437	人間社会（グロ文）	2年
若者文化	友田棕子	0910245	言語文化（グロ文）	2年
若者文化	内藤有咲	0910141	人文科学（グロ文）	2年
若者文化	中島紗織	0910143	人文科学（グロ文）	2年
若者文化	七枝智美	0910252	言語文化（グロ文）	2年
若者文化	孫桑桑	0810289	言語文化（グロ文）	3年
教育	山本佳南子	0810283	言語文化（グロ文）	3年
教育	富沢友里	0910140	人文科学（グロ文）	2年
教育	小松映里佳	0812207	言語文化（グロ文）	3年
教育	大石絵里佳	0810111	人文科学（グロ文）	3年
教育	田端はるな	0810142	人文科学（グロ文）	3年
	崔恩智	0810290	言語文化（グロ文）	3年
	薛知英	0812403	人間社会（グロ文）	3年

韓国側参加者（30名）

グループ	氏名		所属	学年
女性	김지혜	キム・チヘ	日本語科	4年
女性	이수현	イ・スヒョン	経営学科	3年
女性	김나래	キム・ナレ	絵画科	2年
女性	김두라	キム・トゥラ	日本語科	3年

女性	정혜원	チョン・ヘウオン	日本語科	3年
歴史・平和	구유경	ク・ユギョン	日本語科	4年
歴史・平和	양인희	ヤン・インヒ	日本語科	3年
歴史・平和	김가영	キム・カヨン	日本語科	2年
歴史・平和	진윤희	チン・ユンヒ	日本語科	2年
都市・IT	박현정	パク・ヒョンジョン	日本語科	4年
都市・IT	이수민	イ・スミン	日本語科	3年
都市・IT	정인화	チョン・インファ	日本語科	3年
都市・IT	장혜진	チャン・ヘジン	薬学科	3年
都市・IT	김소라	キム・ソラ	日本語科	2年
都市・IT	하혜미	ハ・ヘミ	日本語科	2年
都市・IT	허세진	ホ・セジン	日本語科	2年
若者文化	박계형	パク・ケヒョン	放送芸能科	4年
若者文化	권하나	クオン・ハナ	応用化学科	4年
若者文化	박현은	パク・ヒョンウン	コンピュータ科	3年
若者文化	소유라	ソ・ユラ	日本語科	3年
教育	박혜인	パク・ヘイン	日本語科	2年
教育	이영주	イ・ヨンジュ	日本語科	2年
教育	이수진	イ・スジン	日本語科	2年
教育	김지현	キム・チヒョン	日本語科	3年
教育	원진희	ウォン・チンヒ	日本語科	2年
ホームステイ	지주연	チ・チュヨン	日本語科	3年
ホームステイ	조혜진	チョ・ヘジン	日本語科	1年
ホームステイ	송유진	ソン・ユジン	日本語科	3年
ホームステイ	최혜림	チェ・ヘリム	薬学科	3年
ホームステイ	박현지	パク・ヒョンジ	文献情報学科	3年

スタッフ

氏名	所属	役職
森山新	お茶の水女子大学大学院准教授	教育指導
鄭在喜 (チョン・チェヒ)	お茶の水女子大学大学院博士後期	TA
金榮敏 (キム・ヨンミン)	同徳女子大学校日本語科助教授	教育指導
西岡麻衣子	同徳女子大学校非常勤講師	教育指導



統一展望台にて（歴史・平和グループ／後ろは北朝鮮）

日韓大学生国際交流セミナー開催とその意義

森山新（お茶の水女子大学）

日韓大学生国際交流セミナーは韓国の協定校、同徳女子大学との間で毎年夏に実施されている。2004年に開始して以来、2010年で第7回目となるが、数年前より新たに事前の遠隔交流を取り入れ、大きな成果を上げている。具体的には8月のセミナー開催にさきかけ、4月から映像を用いたメッセージャーや文字チャット、メーリングリストなどを用いてグループごとの交流を開始する。その結果、交流セミナーはそれまで、8月の1週間の交流がすべてであったが、遠隔交流を加えることで4月から8月まで、半年近くに及ぶ交流セミナーとして、長期化させることに成功し、8月の1週間のセミナーをより実りあるものとすることを可能にした。このことは遠隔交流を用いることで、「表面的なふれあい」という交流の限界を克服し、「日常化」をめざす一つの方策となったということで評価できるであろう。またセミナーの後半に合宿を行うことでより深い交流を可能にしている。

このセミナーでは日韓合同のグループが生まれ、テーマを決めて調査、研究が行われる。事前学習では映像チャットやメーリングリストなどを使って合同での打ち合わせ、討論を行ったり、それぞれのテーマに関し、日韓双方で事前調査を行ったりする。8月に集まり、さらに合同で調査を行い、その成果を用いて2、3泊の合宿に入る。学生たちは長い時間を使って討論を行い、パワーポイントにまとめ、その成果を発表会で報告し、セミナー後、報告書の原稿を執筆する。このプロセスを通じて、母語や外国語でのディスカッション能力やプレゼンテーション能力、コミュニケーション能力を養うことができる。

さらにテーマの中には日韓の間で話し合いが持たれにくかった、軍隊と平和、歴史（従軍慰安婦など）もあえて取り上げられ、積極的に話し合いが行われている。置かれた立場、受けてきた教育の違いなどを乗り越えながら、討論や発表を行う中で、高度な言語能力と相手の立場や文化を理解する能力を身につけていく。

本セミナーは言語や文化を越えて、学び、討論し、生活する中で、グローバル時代に求められる様々なスキルを育もうとする「総合的外国語教育」の試みである。具体的には自他の文化を正しく理解する多文化リテラシー、言語、文化、立場の異なる相手と複数の言語を用いてディスカッション、コミュニケーションを行う多言語スキル、様々な立場の学生が一つのゴールをめざして協働していく中で身につける社会性などである。

このセミナーを通して、日韓両国の学生が交流を通してこれらスキルを身につけ、グローバル時代に活躍するみなさんになってくださることを祈りたい。

ホスピタリティ日本語のコミュニケーション

—その概念と日本語教育への提案*—

李 徳奉（同徳女子大学）

1. はじめに

日本語教師を目指している予備教師は、何のために日本語が教えたのかについて自分なりの理念を考えてほしい。自国の文化を海外へ広めるためなのか、多文化を理解し地域ないし国際的平和や共生を目指すためなのか、単なる生きるための手段に過ぎないのかなど多様な目的が考えられる。

日本における多くの日本語教室の教育目的は、能力試験の受験対策や日常生活におけるコミュニケーション能力に重点が置かれている。しかし、日本以外の地域における学習者のニーズは、教養、受験、ビジネス関連の多様なニーズがあり、中でもビジネス関連のニーズは最も強力である。即ち、日常生活よりはビジネス日本語のニーズが高いわけであるが、実際の教育現場ではこの種の教育は疎かになっている。国際交流を伴うビジネス現場での日本語の主な機能は、情報交換、交流、交渉、取引、お持て成しなど多様である。中でもお持て成し、即ち、ホスピタリティの機能は、既に時代的キーワードになっており、その適用領域も広い。ホスピタリティ機能が重んじられる職場は、病院や老人ホームなどでの介護、観光産業やホテル、企業などでの接待など、その適用範囲は広まりつつある。この種の職場においては、主にサービス産業的性格により、客に向けての一方通行式サービスが求められていた。しかし、ホスピタリティ的考え方は、相手に合わせた相互性が重んじられ、互いに思いやりを感じさせる自然なもてなしが求められる。今後は、学習者のニーズに応えられる実用性の高い日本語教育にするために、ホスピタリティ日本語教育に力を入れるべきであろう。取り分け日本語には、ホスピタリティ的特長が目立つので、その特徴を活かした教育が求められる。

本稿では、ホスピタリティの概念をまとめるとともに、ホスピタリティ日本語・コミュニケーション教育の可能性について触れてみたい。

2. ホスピタリティの概念

英語の“hospitable”は、「心の優しさ」や「おもてなし」と訳されているようであるが、漠然としていて、まだ一定した概念は根付いていないようである。しかし、

*この文章は、お茶の水女子大学と同徳女子大学の合同セミナー(2010年8月18日)にて行われた講義資料のまとめである。

今後は、広い意味でのホスピタリティという理念が主流を成すと思われる。

ホスピタリティの辞書的意味は、接待、歓待、おもてなしなどで、主に心を込めて客をもてなすことを意味する。ホスピタリティに関する従来の主な定義は次の通りである。

2.1 狭義のホスピタリティの定義

<定義1>

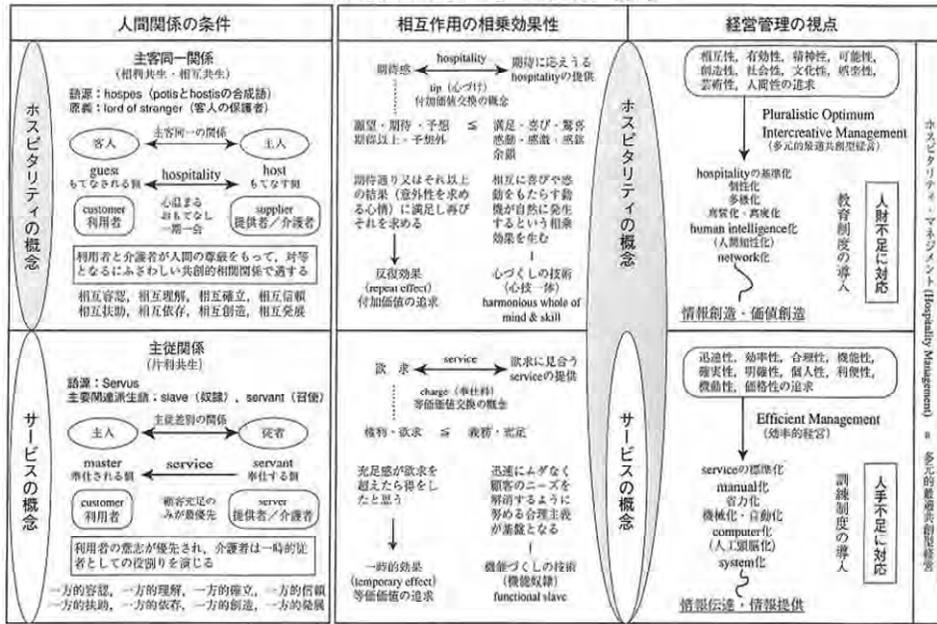
Hospitality is the relationship between a guest and a host, or the act or practice of being hospitable. That is, the reception and entertainment of guests, visitors, or strangers, with liberality and goodwill. Hospitality frequently refers to the hospitality industry, which includes hotels, restaurants, casinos, catering, resorts, membership clubs, conventions, attractions, special events, and other services for travelers and tourists. "Hospitality" can also mean generously providing care and kindness to whoever is in need.

<定義2>

「ホストとゲストが対等となるにふさわしい相関関係を築くための人倫」

ここで「対等となるにふさわしい」の意味は、「双方の間に優劣・高下がなく、その場の相互間に生じる各種の影響が穏やかで、物事のそうあるべき道筋に当てはまっていることを指す。また、やり方、もののいいぶり、身のこなし方などに、自分に比べて相手の立場や気持ちを理解しようとする心が、注意深く行き届くようにすること」とある。すなわち、もっぱらサービス一辺倒ではなく、相手に合わせて真心の伝わる自然なやりとりを目指す。

ホスピタリティとサービスの概念比較 (介談)



出典: 澤田洋子・中島健一・石川治江 編著, 朝日新聞 (2003) 『サービスとホスピタリティ』(介護の根本的再考) 『福祉キーワードシリーズ 介護』中央法規, p171に加筆修正。

図1 ホスピタリティとサービスの概念比較

この図1からも分かるように、サービスとは違って、ホスピタリティは、主客同等で両方の相互的満足が得られるところに重点が置かれている。ゲストとホストの両方のウェルビーイングが得られるわけである。

2.2 広義のホスピタリティの定義

「人類が生命の尊厳を前提とした、個々の共同体もしくは国家の枠を超えた広い社会における、相互性の原理と多元的共創の原理からなる社会倫理」。言い換えれば、2つの原理の定義をいれて表現すると、「人類が生命の尊厳を前提とした、個々の共同体もしくは国家の枠を超えた広い社会における、相互容認、相互理解、相互確立、相互信頼、相互扶助、相互依存、相互創造、相互発展」の8つの相互性に基づく原理と、多くの異質な要素が複雑に関係する中で、多元的相関関係を築き相互作用・相互補完・相互連携することで最適な環境を創出し、人間が人間である故の価値観を高めるために、人間同士の関係によるシナジー効果によって生まれる価値により、調和しながら互いに進化しあうこと、またその持続した進化するための原理からなる社会倫理」となる。

広義のホスピタリティの定義は、相互性と調和に基づいたホスピタリティを社会体制の根底を成すものとして捉えている。早い時期からホスピタリティを取り入れたサービス分野の場合、王様同様のお客にいたせりつくせりのサービスを提供するという

理念として用いられていた。しかし、今後のホスピタリティは、上下関係ではなく同等の関係として互いに満足のできる相互性が強調される。

2.3 ホスピタリティ主義の定義

「場にかかわる全ての関係者のウェルビーイング（安寧・健康・幸福・繁栄etc.）な状態と満足を創出するための理念に、広義のホスピタリティを軸とした学説＝多元的最適共創主義」

これら全ての定義をあてはめてみると「場にかかわる全ての関係者のウェルビーイング（安寧・健康・幸福・繁栄etc.）な状態と満足を創出するための理念に、人類が生命の尊厳を前提とした、個々の共同体もしくは国家の枠を超えた広い社会における、相互容認、相互理解、相互確立、相互信頼、相互扶助、相互依存、相互創造、相互発展の8つの相互性に基づく原理と、多くの異質な要素が複雑に関係する中で、多元的相関関係を築き相互作用・相互補完・相互連携することで最適な環境を創出し、人間が人間である故の価値観を高めるために人間の相関関係、多元的相関関係によるシナジー効果によって生まれる価値により、調和しながら互いに進化しあうこと、またその持続した進化するための原理からなる社会倫理を軸とした学説＝多元的最適共創主義」となる。

2.4 ホスピタリティ・マネジメントの定義

- 1) 顧客をクリーク（販売員）が、クリークを管理職が、管理職を役員が支える逆ピラミッドの考えによる機構・組織を徹底して実現している。つまり、在るべきホスピタリティの実現に向けて「基本的な動作」と「業務指針」と「制度」が『基本コンセプト』に基づいて整備され、機能するようコントロールするシステムが出来上がっている。このコントロール・システムをホスピタリティ・マネジメントと呼ぶ。
- 2) 独創的なアイデアを正しく評価し標準化する基準を持ち合わせる事がホスピタリティ・マネジメントのノウハウである。
- 3) 企業での典型では、経営理念・企業哲学を集約し一体化し凝縮し視覚化したものがコーポレート・アイデンティティーであるが、あらゆる情報を視覚化し、瞬時にして理解可能な形にして提供する仕組み、これもホスピタリティ・マネジメントである。
- 4) 経営理念を明確にし、手を尽くして顧客から理解され、受け入れられ、共感を得るように、ビジネス全体に、「活力」と「誠意」と「革新性」を注入する事がホスピタリティ・マネジメントである。

以上のようにホスピタリティの定義は、福祉、サービス、介護など分野ごとにふさわしい定義になりがちである。これら諸定義に基づき、ホスピタリティ日本語のことについてまとめてみると次の通りである。

ホスピタリティ日本語とは、福祉分野、サービス業、医療・介護分野、マネジメント分野などにおいて、話し手と聞き手がリスペクトの念に基づき、お互いを活気付け、お互いに対等となるに相応しい相関関係を築くために互いに思いやりを感じさせるコミュニケーションの手段である。挨拶機能をはじめ、慰めや癒し、ケアリング、お気遣い、話しかけ、あいづち、勇気付けの機能、思いやりのある言葉遣い、お笑いの機能、インタビュー機能、交渉機能などが主なホスピタリティ機能として挙げられる。

3. 文化遺伝子としてのホスピタリティ

生物学者であるリチャード・ドーキンス (Richard Dawkins) は、著書の中で、文化的伝達の単位、あるいは模倣の単位という言葉で表現している、文化を伝達する遺伝子が存在することが述べられている。ドーキンスは、文化にも遺伝子的要素があると解釈し「文化遺伝子」と命名した。その遺伝子のもとを指すものとして文化遺伝因子 (Culture Meme Factor) としている。人間の成長・発達には、両親から伝えられる遺伝子によっても左右されるが、環境によっても大きな影響を受けている。環境の要因には、学習の成果、直接的な心理的・社会的要因 (兄弟姉妹、両親など)、所属する社会的・文化的環境条件や時代的要因などがある。文化もそれと同様に様々な環境要因によって影響を受け発達・進化しているといえるであろう。現代人の進化を理解するためには、文化遺伝子の存在は重要なものと考えられる。社会は狩猟採集社会から産業社会へ未開社会から近代社会へとといったように進化するなかで、人間の生活もそれを取りまく環境も大きく変動したことはない。しかし、そういった社会変動の中でホスピタリティのもつ相互性は、現在も失われてはいない。失われていないどころか、現代の社会においては最も重要視されている要素であるといえる。社会が一つ (または単独) のもので成り立っているわけではない、複数のものが何らかの関わりをもつ上で「相互性」はなくてはならないものなのである。そこにホスピタリティのもつ全てのものにつうずる性質である「普遍性」があるといえる。

ことばは人間の遺伝的資質に根ざしており、普遍的な性質が滅びずに存在し続けている。ホスピタリティの概念も人類の創生以来、時代と共に変化し、また進化するという文化的遺伝子としての側面があると考えられる。

個人においても組織においても、広い意味での永続性の観点からすると、文化遺伝子の伝承者と同時に伝統文化の継承者という人財が、21世紀の人財の方向性の基本になると捉えている。また、別の意味でホスピタリティの伝承者としても捉えてもいる。

4. ホスピタリティ・コミュニケーションの特徴

ホスピタリティは、前述した通り広い概念ではあるが、早くからホスピタリティ産業との関連において用いられる場合が多かったが、最近はいたる領域に適用されるにつれ、その概念も広まりつつある。

4.1 コミュニケーションの定義

一般的にコミュニケーションとは、「人間同士が言語・非言語媒体を通して、知・情・意の側面を伝達しあう相互作用の総称」とある。しかし、この知と情を伝える手段の一つとして用いられる「言語」の記号体系や行為体系に対する概念のずれがコミュニケーションの障害となることがある。概念とは経験の蓄積により成り立つが、人それぞれ経験を共有している面もあれば、異なった経験をもつ面もある。共有している経験は似たような概念を成すが、異なる経験は概念がずれる。このようなずれる概念を用いて互いの意思を伝えようとし、調整しあう行為がコミュニケーション行為である。

このようなコミュニケーション能力の構成要素に関する代表的な先行研究をみると次の通りである。

- ・Wiemann& Backlund の定義(1980, p.198)

「可能なコミュニケーション行為・行動（複数）の中から対人の目的を達するために行為・行動を選択する能力」

- ・西田司の整理(1996, p.160)

自己開示、行動の融通性、記述性、理解、表現性、オープン性、リスニング、交渉、社会的リラクゼーション、相互作用の管理、注目性、相互作用のかかわり合い、適応性、相手の見方や考え方を予測する能力、性格など。

- ・Spitzberg & Cupachの定義（1984, p.33-71）

- 1) 結果中心のアプローチ（効果的な結果をもたらす能力）
基本能力（環境との適合性）、社会能力（性格、相互作用）、対人能力
- 2) メッセージ中心のアプローチ（伝達行為に関する能力）
言語能力、コミュニケーション能力、対人関係能力

- ・宮元・松岡による整理（2000、p.99-106）：先行研究による異文化コミュニケーション能力要素の分類

西岡司他（1996）動機・態度、知識、技能
石井敏他（1997）態度、行動、技能、性格、その他（動機、好奇心）
山岸みどり他（1992）カルチュラル・アウェアネス、自己調整能力、
状況調整能力、これら全てに関わる感受性

コミュニケーション能力の定義や構成要素は、一見簡単そうだが、その指す中身はそれほど単純ではない。文化的背景を異にするということは、言語記号、言語体系、概念体系、言語行為、価値観など、言語により伝えられる意味の基盤を成す全てが異なるということである。同一言語話者同士でも成長環境や宗教などにより文化的違いはあるけれども、異文化同士の場合は、その比でない。異文化間の意味的相互作用の過程が旨くいかないのは当たり前かもしれない。

外国語学習において言語記号、言語体系、概念体系などについては、相当の理論化が進み、学習方法など進んでいる。しかし、言語行為や価値観などについての理論化

が足りないなかで、異文化間コミュニケーションを円満に行うということが、今後の課題といえる。

文化間コミュニケーション関係の従来の研究では異文化コミュニケーション能力の要素として態度、知識、行動、技能、性格、自己状況調整能力などを挙げている。知識と技能は記号や体系中心の学習で扱われているが、態度・行動・性格・状況調整能力などは、主に「行為体系」に関するものである。「行為体系」は、まさに文化的所産と言える。口頭によるコミュニケーションにおいて行為は欠かせないものなので、この行為体系に関する理解無しでの文化間コミュニケーションの成功は考えられない。一般的コミュニケーションにおいても非言語的要素がコミュニケーションの 8、9 割を左右することを考えると、行為体系的文化要因の影響力が分かる。

以上のコミュニケーションとホスピタリティの定義をつなぎあわせてみると「ホスピタリティ・コミュニケーション」とは、「人間同士が言語・非言語媒体を通して、知・情・意の側面を伝達しあう相互作用の総称」で、「双方の間に優劣・高下がなく、その場の相互間に生じる各種の影響が穏やかで、物事のそうあるべき道筋に当てはまっていることを指す。また、やり方、ものの言い振り、身のこなし方などに、自分に比べて相手の立場や気持ちを理解しようとする心が注意深く行き届くようにすること」である。すなわち、ホスピタリティ・コミュニケーションは、リスペクトの念に基づいた心のこもったコミュニケーションである。

5. ホスピタリティ日本語教育のあり方：言語 9 技能におけるホスピタリティ

5.1 言語の 4 技能神話

従来から言語の学習や教材の構成において基本になっていた言語 4 技能は、言語を発信・受信する際の最小限の使用パターンと言える。日本語教育では、これら主要 4 技能の外に、部分的技能としての補助技能や 4 技能を合わせて扱う統合技能などの概念が用いられている。時代とともに外国語学習のニーズに伴った教授法の変化にもかかわらず、学習内容における言語 4 技能の枠は一向に変わっていない。文字のなかった時代に言語の技能は 2 技能で足りたはず。文字の発明により読み書きの技能が付け加わったのであろう。その後も長い時代を経て言語を囲んだ環境は大きく変わっているにもかかわらず、4 技能に拘っているのはおかしい。

とりわけ、現代のような多文化理解を中心とした交流型教育や情報化社会においては、言語 4 技能教育の限界が実感できる。外国語との接触により翻訳や通訳が生まれ、外国人との交流により異文化間コミュニケーション技能が加わる。新しい I T 時代の情報化社会の到来により検索技能が加わる。このような時代の言語教育で求められる能力は、「コミュニケーション技能」であり、「通訳」や「翻訳」などの「置き換え技能」、「言葉遊び技能」、「情報検索技能」などである。従来の「話す」「聴く」能力の統合は「コミュニケーション能力」や「通訳」に等しいものではない。「読

む」「書く」技能の統合は、「翻訳」技能にも「検索」技能に等しいとは限らない。

5.2 外国語8技能教育に向けて

「コミュニケーション技能」には、語用論的能力、インタラクション能力、言語行動文化的能力、非言語行動能力、異文化理解能力、ホスピタリティ能力などの補助的的技能が含まれる。「通訳」や「翻訳」にも、意味的等価判断の能力、言語文化の理解能力、語調や文体使用能力、語用論的能力、専門知識の理解能力、異文化理解能力などの補助的的技能が含まれる。「検索技能」には、メディア・リテラシー、検索エンジンの使用能力、キーワードの選別能力、的確な情報の判別能力、要点の要約能力などの補助的的技能が含まれる。

従って、これからの外国語教育では従来の4技能に加えて、コミュニケーション技能、検索技能、置き換え技能（翻訳技能、通訳技能）、言葉遊び技能の4つの技能を加えた「外国語8技能」を基に組み立てるべきであろう。これら8技能をどういうふうに組み合わせるかは教師の役割である。

ホスピタリティ・コミュニケーションは、この8技能のうち、コミュニケーション技能に相当する。

日本語の持つコミュニケーション機能は、全てホスピタリティ・コミュニケーション機能に当たるが、中でも、5.4で紹介するような文化色の強い機能ほど、ホスピタリティ・コミュニケーションに与える影響力が大きい。

5.3 コミュニケーション機能項目（2007年修正高校学習指導要領から）

1) 挨拶機能

出会い、別れ、出かけ、帰宅、安否、訪問、食事、年末年始、見舞い、お祝い

2) 紹介機能

自己紹介、家族紹介、他者紹介

3) 態度伝達の機能

感謝、謝罪、賞賛、激励・慰め、承諾・同義、断り、遠慮、謙遜、意向、希望、判断・推測、遺憾、訂正

4) 情報交換の機能

情報提供、情報要求、事情・都合、状況説明、意見提示、趣向、報告、比較、選択、能力、経験

5) 行為要求の機能

依頼、提案、勧誘、助言、許可、義務、禁止、警告

6) 対話進めの機能

呼びかけ(声かけ)、戸惑い(前置き)、話題切り替え、あいづち、聞き返し、確認

これら諸機能の最終目的は、対人関係の目的達成にある。言い換えれば、ホスピタリティ機能とも言える。すなわち、言語機能の総体としての「ホスピタリティ機能」を付け加えたい。

5.4 ホスピタリティ日本語のコミュニケーション学習項目

自然なコミュニケーションを取るためには、以上のような行為体系としてのコミュニケーション機能の中でも、取り分け、あいさつ、あいづち、うなずき、迷惑の受身、遠慮、依頼、断り、話題選び、話題のやり取り、非言語行動、敬語などのような文化色の強い機能の習得に力を入れるべきであろう。

ホスピタリティ・コミュニケーション能力の場合、単にコミュニケーション能力のみならず、対人関係におけるリスペクトの念や福祉・介護の理念についての理解や思いやりのある態度の育成が大事である。

5.5 ホスピタリティ日本語の下位分類

ホスピタリティ日本語は、使用分野の広がりとともに下位分類が求められる。とりあえず、介護の日本語をはじめ観光日本語、ホテル日本語、接待日本語、保育日本語、福祉日本語、カウンセリング日本語、交渉の日本語、商売日本語などが考えられる。

今後は、これら下位分類ごとにそれぞれの特徴を生かしたカリキュラム開発とコースデザイン、教材開発、各種リソースの開発などが求められる。

6. 結語：総合的日本語学習の薦め

ホスピタリティ日本語のコミュニケーション能力が上達するためには、ホスピタリティの性向とホスピタリティの遂行能力が求められる。ホスピタリティ性向は、価値観、親近感、態度などであり、能力は、コミュニケーションなり関連仕事の専門性などがそれに当たる。

とりあえず、ホスピタリティ性向の育成は、生まれつきの性向も大事であるが、読書や討論、奉仕活動、克己訓練、表情訓練などにより磨くことができる。コミュニケーション能力は、コミュニケーション機能中心のシミュレーションやタスク法による訓練が有効である。

関連仕事の専門性は、関連知識を始めインターンシップなどが役に立つ。いずれも体験学習としての総合的日本語学習法が望ましい。というのは、性向、態度、コミュニケーション能力は、実戦的体験により身につくからである。

「総合的日本語学習」は、研究者により多様な意味を持つ用語であるが、ここでは、言語4技能の統合型、会話と行動文化の統合型、学習領域（言語および文化）の統合型、言語文化関連知的領域の寄せ集め型の全てを指す概念として用いたい。いわゆる、総体的言語教育（Holistic Language Learning）なのである。

このような総合的日本語学習・教育が成り立つためには次のような条件が必要である。

- 1 言語表現の意味や言語文化的行為体系を成す知識や事柄の構造的・機能的理解
- 2 学習資料の実物化（生教材の活用）・現場化
- 3 言語4技能の総合化及び技能の拡大

- 4 学習をレベル別・領域別に分けないこと
- 5 学習者の主導的活動や体験によって問題を解決すること
- 6 教授法を特定しないこと
- 7 学習を意識せず目的言語の環境の中で自由に体験すること
- 8 エンカウンターにより異文化への感覚的適応訓練をつむこと
- 9 文化の成り立つ属性を理解し、文化相対性や多文化主義的考え方、他文化に接する態度を養うこと
- 10 文化観は、暗記式でない討論などにより自らの力で理解すること
- 11 学習者の関心事や興味を中心に学習活動をさせること

以上の条件から分かるように、総合的日本語学習の核は、学習者中心・学習者主導型学習にある。広く知られている総合的日本語学習の具体例としては、体験学習、ビデオ学習、タスク・ワーク、シミュレーション、インターンシップなどが薦められる。

<参考文献>

- 石井敏(2001)「異文化コミュニケーション能力とは何か」『獨協大学外国語教育研究』19
- 石井敏他(1987)『異文化コミュニケーション』東京；有斐閣選書
- 石井敏他(1997)『異文化コミュニケーション・ハンドブック』東京；有斐閣選書
- 井上逸兵(2005)『ことばの生態系』、東京；慶應義塾大学教養研究センター
- 桜井雅章(1989)『仕事上手になるチェックリスト』東京；日本実業出版社
- 西田司(1996)『異文化と人間行動の分析』東京；多賀出版
- 服部勝人(2003)「サービスとホスピタリティ」(澤田信子他(2003)『福祉キーワードシリーズ、介護』)
- 服部勝人(2006)『ホスピタリティ・マネジメント学原論』東京；丸善
- 服部勝人(2007)「生涯学習におけるホスピタリティ」『観光学研究』第6号
- 水谷修・李徳奉(2002)『総合的日本語学習を求めて』東京；国書刊行会
- 宮元律子・松岡洋子(2000)「多文化コミュニケーション能力測定尺度作成の試み」『秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要』22号
- 李徳奉(2003)「転換期を迎えた日本語教育に求められるもの」『日本語教育』119
- 李徳奉(2008)「日本語教育広域化の構想」『第7回日本語教育学世界大会要録』
- Dawkins, Richard (1989) *The Selfish Gene*, 2nd ed., United Kingdom: Oxford University Press.
- Spitzberg, B. H. & Cupach, W. R. (1984) *Interpersonal Communication Competence*, Beverly Hills; SAGE.
- Wiemann, J. M. & Backlund, P. (1980) *Current theory and research in communicative competence*, Review of Educational Research, 50.

グローバル時代と日韓関係

森山新（お茶の水女子大学）

このセミナーも早いもので、7 回目を迎える。日韓セミナーが会を重ねる中で思い起こすのはかつての朝鮮通信使である。実は朝鮮通信使は江戸時代以前からあったそうだが、豊臣秀吉が当時の朝鮮を侵略し、中断した。秀吉の朝鮮侵略で両国の関係は最悪になった。

その後江戸幕府を開いた徳川家康は両国関係を改善すべく、朝鮮に使者を遣わし、朝鮮通信使は再開した。通信使は国を挙げて迎えられ、その回数は 10 数回にわたった。

明治に入り、両国関係は再び悪化、日清、日露戦争を経て、1910 年ついに日本は韓国を植民地化してしまった。そして悲しくつらい時代を経て、1945 年、韓国はついに解放の日を迎える。これを韓国では「光復節（クァンボクチョル）」と呼んでいる。

しかし、両国関係の修復には時間を要した。1965 年に日韓国交正常化が実現しても、両国関係はよくならなかった。それはなぜであろうか。いくつかの理由が考えられよう。第一にドイツのように政権が交代せず、過去に対する正当な謝罪と清算が行われなかった点を挙げることができる。欧米ではつい最近、いくつかの国で日本の従軍慰安婦に対する非難決議が採択されていることはそれを物語っている。第二に「徳川家康」のように関係改善のために努力する人物が現れなかったことも原因であろう。であるとすれば、私たち若者が両国の関係を変える先頭に立ち、両国の関係を変えるべきであろう。

では具体的にどうしたらいいか。まず私たちの心がグローバル化することである。確かにグローバル化には正の部分と負の部分とがある。しかし「心のグローバル化」は正、つまり絶対に必要なことである。

今までの国際関係は国益優先が大前提であった。しかしそれでは限界があると気づき始めた世界各国は徐々にグローバルな視野に立ち始めて問題解決に取り組み始めた。最近の地球温暖化への取り組みなどがそれである。しかし依然、その背後には「自国の利益」が見え隠れしている。言うならば、まだ心のグローバル化ができていないということである。でも若者なら、自国の利益を越え、それができると信じている。

心のグローバル化を果たすためには、第一に、相手の立場に立って物事を見つめること、第二に一段上の視点に立って物事を見つめることが重要である。日韓関係を兄弟関係にたとえてみたい。歴史的に考えれば韓国が兄で日本が弟であろう。ここで韓国は兄貴のメンツを立てたがるお兄さんであり、日本は兄貴を兄貴とも思わない生意気な弟であったといえることができる。これで兄弟関係が仲良くなるはずはないであろう。

この兄弟の対立を越えるにはどうしたらよいか。それぞれが相手の立場に立つことが重要であろう。またそれを可能にするためには、親の立場に立つことが重要である。親から

見ればどちらも愛する息子であり、対立が起きたのにはどちらにも非があることが見える。かつて同徳女子大の総長が本学を訪れた際に、「韓国は寛大さ、日本は謙虚さを」と語られたことがある。心のグローバル化はまさにこれを意味する。

最近「文化相対主義」という言葉が叫ばれる。自文化中心主義に対する言葉で、多文化共生には必要な考え方とされている。しかし人間はそれぞれある文化の中で育ち、そのプロセスの中で、自然と自文化に愛着を持つようになった。これは自然な適応である。しかし、その一方で、異文化には愛着を持ちにくくなってしまう。また異文化を自文化の尺度で計ってしまうことにもなる。その結果、何で兄貴はこうなんだ、または何で弟はこうなんだ、ということになる。相手の立場に立ち、親の立場に立つことが必要になる。

これを可能にするためには何が必要であろうか。愛情であろう。兄弟や親の愛がこれを可能にしてくれる。「文化相対主義」も頭で「全ての文化にはそれぞれ価値がある」と考えるだけでは限界がある。ややもすれば無関心で終わることもあるからである。

ではどうしたら愛がめばえるであろうか。人は愛し合うと、あばたもえくぼ、全てがよく見え、欠点が見えなくなる。だから異文化に接する場合にも、相手の理解できない部分はひとまず置いて、まずは、相手が持っていて、自分にはない、すばらしい面を探そう。そしてそれを尊敬し、学ぼう。そこに愛着が生まれ、尊敬が生まれる。互いに相手のよいところを探してみよう。日韓はお互い、自分にはないよいところをたくさん持っている。

「心のグローバル化」により、我々が過去を克服できたとすれば、今まで対立に費やしてきた思いと力を日韓、そして世界の共生のために用いよう。そうすれば両国の悲しい過去を越えるだけでなく、共生のグローバル社会を築く第一歩となるであろう。ここには中国の留学生もいるので東アジアの共生も考えよう。

今回、五つのテーマが選ばれた。「女性の社会進出」は日韓の共通の課題である。「歴史を見つめ平和を考える」ことは今まで日韓どちらかといえば避けてきた問題の一つである。「ソウル、東京」はグローバル化、IT化が進んでおり、これからの共生社会の実現を考える上で重要である。「日韓の教育の現状」はグローバル時代に求められる人材育成を考える上で再考していく必要がある。「日韓の若者文化」にはお互いに学ぶべき点が数多く潜んでおり、お互いに学びあい、成長しよう。こうしたテーマの一つ一つに日韓を代表する皆さんが、調査し、実習し、討論し、考察し、その答えを世界に向けて発信しよう。今回のセミナーの結果が、国連決議より、日韓首脳会談より、六か国協議よりも歴史的な一歩となることを信じたい。

日韓における女性の社会進出

中村紗織・中里光穂・白井綾乃・本多由衣子（お茶の水女子大学）

キムチヘ・イスヒョン・キムナレ・キムトゥラ・チョンヘウオン（同徳女子大学）



1. 研究の動機と目的

今日では、「男はソト、女はウチ」という考え方はもう古いものとされ、女性も男性と同様に仕事を持ち、自らのキャリアについて真剣に考えるのは何も変なことではない。今の時代では女性であっても警察官にも、裁判官にも、国会議員にもなれる。70~90年代の法整備などにより日本の女性は社会に参加、進出できるようになった。一方の韓国も日本同様に長い間儒教の影響で「良妻賢母であるべき」という考えが強かったが、75年の世界婦人年を皮切りに近年、各政権下で女性労働に関する多くの政策が進められている。しかし日韓両国の女性たちは本当に、完全に社会進出を果たしているのだろうか。

研究目的として以下の3つを挙げて調査を行った。

- ① 日韓共通する阻害要因、あるいは異なる点は何かを探る
- ② 野外実習を通して公的な部分でどのような協力がなされているのかを知る
- ③ ①と②をもとに今後の課題として私達はどんな考えを持つべきかについて考える

2. 事前調査

事前調査として両国のデータや法律の検索、施設見学、18歳~20代女性50人を対象にした結婚と仕事に関するアンケート調査そして既婚者にインタビュー調査を行った。

2.1 日本側

(1) 「女性と仕事の未来館」を見学 2010年8月11日（水）

〈施設概要〉

「女性と仕事の未来館」は、働く女性・働きたい女性を総合的に支援する拠点として、2000年1月に開館した。セミナーや相談の実施、情報提供などを通して、働く女性・働きたい女性一人ひとりが働くことの中に自分自身の可能性を発見し、その可能性を広げ、心



身ともに健康で生き生きとした自分らしい働き方を実現できるようサポートしている。

〈見学后感想〉

「全く活用されている様子がない」というのが正直な感想。平日の昼間ということもあつてか、利用者らしき人はほとんど見当たらなかった。

写真1 未来館正面入口 施設3階には、明治から現在までの働く女性が社会の中でどのようなあゆみを遂げてきたか、その働き方や暮らしぶりを模型や資料により立体的に表されている。

また、労働省女性局のポスター、パンフレット、調査資料等の行政資料も展示されている。これらは「一体、誰が見るのだろうか?」と思ってしまうような、あまり実用性のない展示物だった。

地下1階には女性の就学率や就業率の変遷をグラフ化して展示されていたが、誰もが当たり前のよう知っている陳腐な情報ばかりで、目新しい発見はなかった。

しかし、セミナーや相談会の案内を見ていると、今現在働いている女性、復職希望の女性、シングルマザー、起業家志望の女性、就職活動中の女子学生など、様々なステージにいる女性へ向けたプログラムが用意されており、かなり充実した内容で申込者も多いようだ。

全体的に“活用されていない感”が漂っていたが、これは認知度が低いことも一因ではないかと思う。

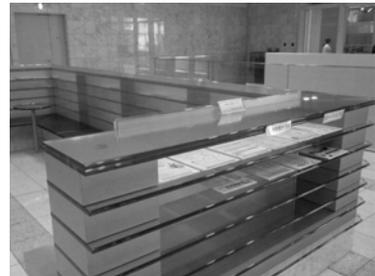


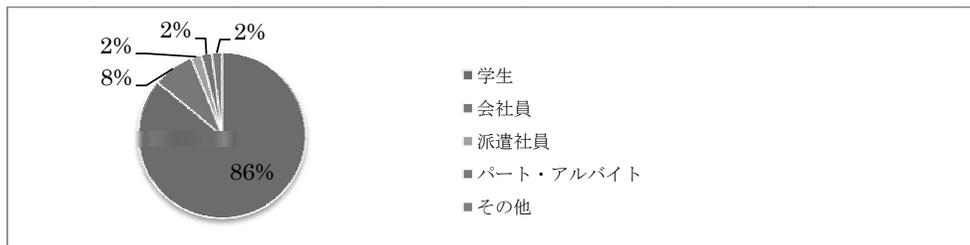
写真2 未来館の中。非常に綺麗

2010年5月の事業仕分け第2弾で「廃止」と判定された際も、一般人の利用にまで広がっていない点が問題視されたようだ。仕分け人からは「国が実施する意味を感じない」などと厳しい評価が相次いだ。女性の労働問題に関心の深い人には便利な施設でも、一般の人々に利用されなければ意味が無いのかもしれない。施設の今後についてはまだ詳細が決まっていないようだが、単なる“無駄”として片付けられてしまうのはあまりにも惜しい。事業内容の更なる充実をはかることはもちろんのこと、まずは施設自体の認知度アップに取り組み、“働く女性の支援拠点”としてきちんと機能することを期待したい。

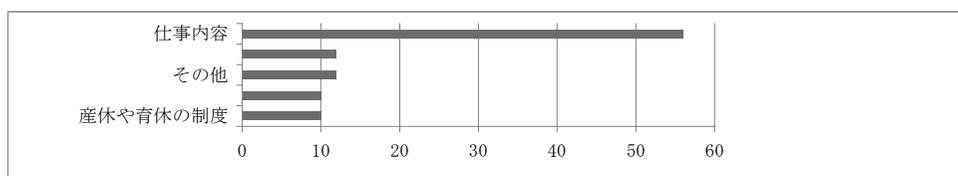
(2) アンケート調査

『女性の仕事と結婚観に関するアンケート』 対象：18歳～20歳代の未婚女性

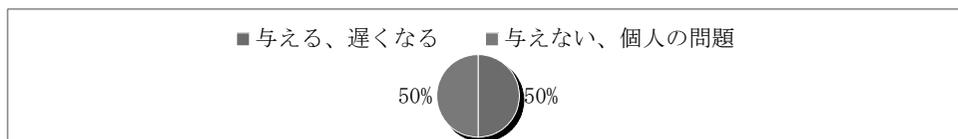
①職業は？



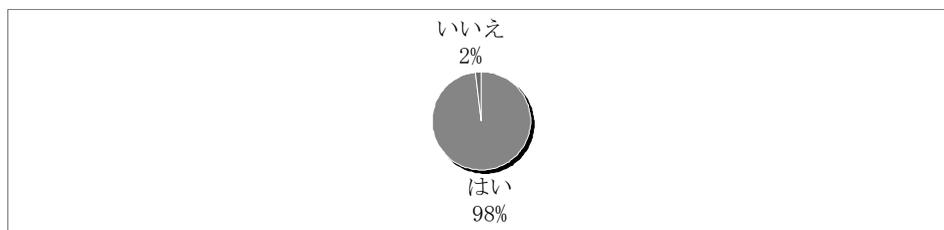
②職業を決める上で重視する（した）ことは何か。



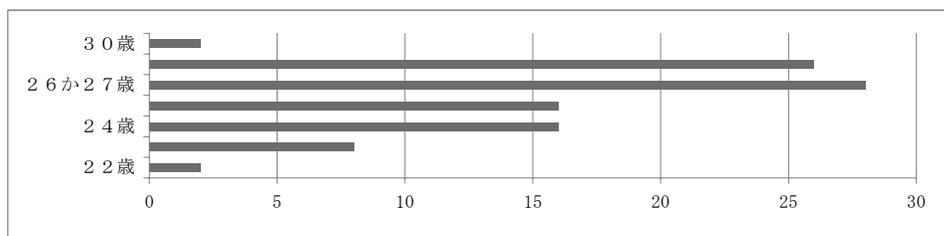
③就職が結婚年齢に影響するか。



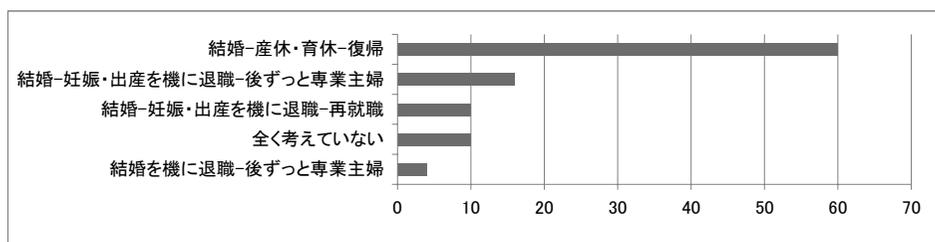
④将来結婚を考えているか。



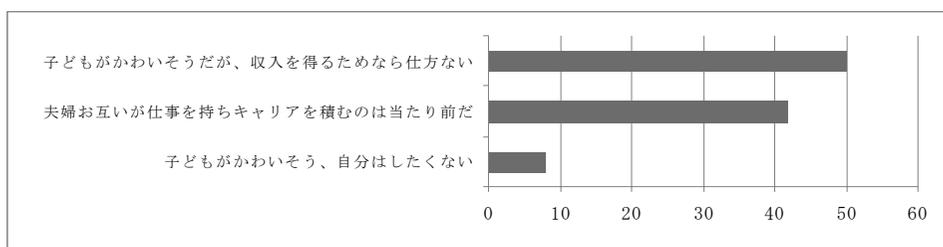
⑤何歳で結婚したいか。



⑥結婚後はどうしたいか。



⑦「共働き」についてどう思うか。



アンケートからわかったこと

- ・ほぼ全員に結婚願望がある。
- ・職業を決める際に、産休や育休の制度をあまり考慮に入れない。
- ・結婚後は、産休・育休後も仕事に復帰したいと考えている人が多い。

(3) ワーキングマザーにインタビュー 2010年7月16・23日(金)

<概要>

いずみナーサリーに子どもを預けているワーキングマザー・Tさん、Kさんにインタビューを実施。いずみナーサリーとは、お茶の水女子大学関係者およびその紹介を受けた者が利用できる保育施設である。

<Tさんのプロフィール>

年齢：39歳（お茶大OG）

配偶者の職業：公務員

職業：大学の非常勤講師 専門は教育学

子ども：2歳の男の子が1人

<インタビューまとめ>

仕事はもちろん続けるつもりだったというTさん。夫は公務員で、勤務時間が自分より長いので大抵の家事はTさんが行っている。家事は明確に分担しているわけではなく、手の空いている方がやるというふうで、夫以外に(実母など)家事育児を手伝ってくれる人はいないので負担は大きいとのこと。

非常勤講師は、大学と1年単位での契約をして教えており、実際勤務時間として賃金が発生するのは、講義をしている90分間だけ。講義の準備や研究している時間にはお金は

出ない。だから産休で長期に休むことはできなかった。Tさんは出産予定が4月だったため、大学が来学期のスケジュールを組む時期(2月)に前期は講義しないことを申請し、前期だけは出産の休みをとって後期から復帰できた。

Tさんの周りの研究者で子供がいる人もたくさんいるし、研究職は個人主義色があるので、子を持つことが大きな問題になるというわけではない。子どもができるのと良くも悪くも生活は変化したが、得たもののほうが多く、教育学という自分の専門分野にも活かせることもあるとお話していた。

〈Kさんのプロフィール〉

年齢：32歳

配偶者の年齢：51歳

職業：バレエ教室経営・バレエ講師。独

配偶者の職業：医師

身時代は劇団に所属、結婚を機に退団。

子ども：3歳の女の子が1人

〈インタビューまとめ〉

25歳で結婚すると同時に劇団を退団するも、バレエはずっと続けているというKさん。ご主人は「自分の好きなこと(バレエ)を続けて欲しい」と、仕事に口を出すことはない。ご主人は決して家事や育児に協力的というわけではないが、近所に住むKさんの実家の母親や地域の人々から、育児に関してかなりの協力を得ている。Kさんは仕事と家庭の両立に全く苦勞していない様子。「働きながら子育てをするなかで、本当に1つも苦勞は無いですか。」と何度も確認したが、「思い当たらない」とのこと。

今回、たまたまKさんのような恵まれたワーキングマザーのお話を聞くことができたが、これが一般的なケースでないことは言うまでもない。

インタビュー結果から、実際に子どもを持ちながら働くということにおいては、夫の収入と何より育児の協力者(実母や義母)の存在の有無が大きく影響することが分かった。夫の他にもうひとり、家のことを助けてくれる人間がいないと実際は妻の側に負担が大きくかかるようだ。共働きをしても、家事や育児は女性が担っている部分が否めない。

2.2 韓国側

資料検索はニュース、記事、インターネット検索、学術誌、論文資料、本を利用した。また資料に役に立つようにアンケートを実施した。日本側と話し合いアンケートの質問内容を合わせ韓国女性50人を対象でアンケートを行った。

(1) 「女性人力開発センター」の見学

実際に見学した国会議事堂以外にも「女性人力開発センター」という施設がある。これは非営利目的の女性団体が運営する団体で、女性の経済活動への参加を促進するための基礎的な職業訓練及び専門的職業訓練を提供することで女性の社会進出を促すという施設である。具体的な活動内容として、以下のようなものが挙げられる。

・ 地域人力市場に応じる教育訓練特化

・ 社会/文化生活事業支援

- ・多様な教育プログラム運営
- ・就業教育/就業相談及び斡旋機能
- ・職業能力開発訓練事業
- ・低所得層の女性を中心にした就業相談及び斡旋
- ・働く女性の悩み相談

女性失業者、会社員、就業を準備する学生たちまで幅広い女性を対象にしている。女性たちの社会進出にどんな手助けになるのか、今までこのセンターを運営しながら見てきた女性たちの変化などを知るにはふさわしい見学場所だと思った。

(2) アンケート調査

アンケート調査を行った結果、結婚後の人生は全体の半数が復帰、再就職を強く希望している。仕事が結婚年齢を伸ばすと考えている人は6割いて、日本よりも多い。一番大きな差があったのは「共働き」に関する質問で、日本は経済的な面で仕方ないと思う人が最も多かった一方、韓国は「キャリアを考えるのは当然のことだ」と回答した人が7割にも及んだ。韓国の社会制度に対する質問では9割の人が「満足していない」と答えた。産休の短さ、会社が規則を守らないこと、機嫌を伺いながら休みを取らねばいけないこと、表面上整っているようだが、現実異なることなどがその理由として挙げられた。アンケートに回答した多くの人が「韓国では女性が仕事することは認められているが、まだ完全ではない」と思っていることが分かった。その要因として家父長的な社会、女性は育児に従事しなければならないという先入観、女性の能力には限界があると考えられている社会の風潮などが理由として挙げられた。

3. 韓国での野外実習



写真3 韓国の国会議事堂

2010年8月19日(木)、韓国国会を訪問。パク・ヨンア議員に約30分間の質疑応答を実施。日韓の学生からパク議員へ、9つの質問を投げかけた。

〈質疑応答のまとめ〉

- ・ 経済が成長している時代には女性も楽に就職できていた。しかし、現在は女性も様々な資格や語学力など高度なスキルを求められるようになった。

- ・ 近年の不況による就職難を反映してか、日本では“専業主婦志向”の20代女性が増えている。韓国でも1990年代初め頃まではそのような傾向にあったが、1990年代半以降は“キャリア志向”が100%に近いほど主流になった。
- ・ 近年、韓国では学校内の成績上位者には女子が多く、医師や弁護士など資格職業に占める女性の割合が高い。これは、少子化のために女子にも教育投資が増えた結果と思われる。

- ・ 医師や弁護士などの専門職以外で女性の就業を増やすには、保育支援を整備・充実することが必要。現在、韓国は出生率が世界一低いといわれる（2009年現在で1.15）。働く女性を支援するため、特に保育制度に力を入れようとしているが、まだ不十分。
- ・ 女性の更なる社会進出のためにも、大学での専攻に関わらず、コミュニケーションスキル・ライティングスキル・リーダーシップなどを女子学生に身に付けさせるべき。パク議員は特に企業の育児に関するバックアップを強調していらっしやった。回答はやや抽象的で、それは時間が30分という短いものだったせいもあるだろうが、もっと具体的な、個人的な意見というのも聞きたいと思った。

4. 調査結果

〈日韓の女性労働力率と各国比較〉

世界経済フォーラムが発表する「ジェンダー・ギャップ指数2009」によれば、日本は世界約130カ国中75位、韓国は115位とどちらも先進祖国の中では低い順位を記録している。実際にジェンダー・ギャップ指数で上位に入っている国々の女性労働力率¹を見ると、日本と韓国が他国に比べて、女性の社会進出という面で後れをとっている事が窺える。

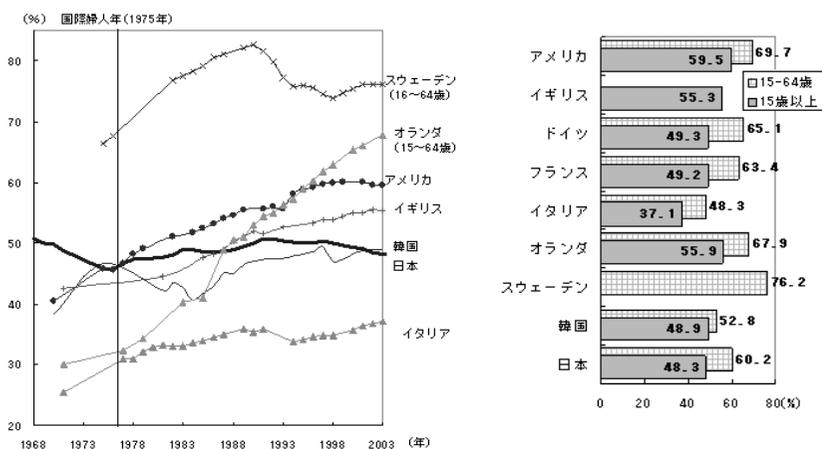


図1 「日韓と諸外国の女性の労働力の推移」

〈日韓の女性の社会進出への取り組み—日韓における女性の政治参加〉

女性の社会進出のためには、より多くの女性の意見が政治に反映されることが重要だと考えられる。図2に示した通り、日本の場合、高等教育を受けている女性の割合は他の先

¹資料出所：ILO “LABORSTA”、総務省統計局「労働力調査」

オランダ 1977,79年は14~64歳。アメリカ 1970,82-94年は15歳以上、1975~82,95年以降は16歳以上。その他の国 15歳以上。

進諸国に比べて劣っていないにもかかわらず、就業割合は10%以上低い結果となっている²。男性の就業率が90%を超えていることを考えると、男女間での格差があると言える。この状況を改善する為には、より多くの女性が政治に参加できる環境を整えることが必要である。現在、日本の国会における女性議員数の割合は11.3%、韓国は14.7%で、国際ランキングでは94位、80位と女性の政治参加が進んでいるとはいえない状況である。しかし、2004年より韓国ではクォータ制と呼ばれる、女性国会議員数を一定の割合にするという制度を取り入れたことで、ここ数年で日本よりも女性国会議員数の割合が増加し、女性議員による立案も増えてきている。日本でもクォータ制の導入が話し合われているが、まだ実現には至っていない。

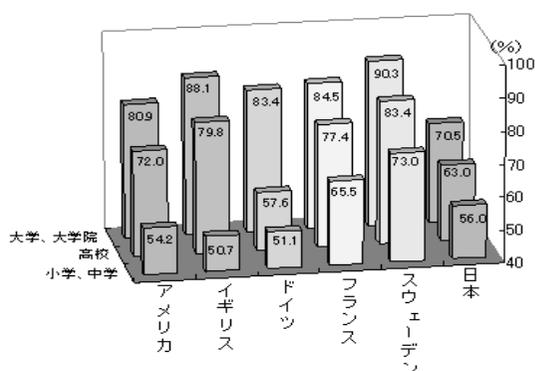


図2 女性の学歴別労働力率の国際比較 (25～64歳)

5. 考察

5.1 日本側

韓国と日本の女性の社会進出を比較して得た共通の課題としては、女性が社会進出をするうえで足かせとなる「男尊女卑」の考えがいまだに根強く残っているということがある。この固定観念をなくすためには、男性用トイレにも女性用トイレと同じように、ベビーベッドを設置したり、紙おむつ用の自動販売機を設置したり、日々の生活のなかで目に見える形で男女平等な社会を作り上げていくことが重要である。

韓国には300人を超える被雇用者がいる場合、その企業には託児所を設置する義務があるが、日本にはそういった法律がない。また、韓国では選挙の際にクォータ制が取られているのに対し、日本にはそういった選挙制度がない。日本にも同様な法律ができれば、女性のさらなる社会進出が期待できるであろう。このように日韓で差が生まれた原因としては、日本では女性の地位向上のための運動が進んでいないという問題が考えられる。そ

² 資料出所：OECD“Education at a Glance 2004”

ただし、図2に示されているのは2002年の数値である。

の大きな要因としては、日本の女子大学には、韓国と異なり、今現在、法学部が設置されていないこと³、女性学・ジェンダー研究を行えるのがお茶の水女子大学と城西国際大学の2校であるということが挙げられる。これは、日本女性の法や政治への関心の薄さを物語っており、さらにそれを促進させる原因となっているのではないかと。加えて近年の困難な就職状況から「専業主婦希望」も再び高くなってきている。社会を変革させるには、民間の下からの支援が必要である。そのために、女性が法や女性学などを学べる環境を整備することも重要である。

このように、女性の社会進出は、一見韓国のほうが日本より進んでいるかのように思われるが、より女性の社会進出が進んでいる国々と比べれば、日本も韓国も女性の社会進出という点ではまだまだ後進国であるといえる。実際に、2009年に世界経済フォーラムにより発表された、社会進出における性別格差の度合いを評価した「男女格差指数」では、日本は75位、韓国は115位であり、1位はアイスランド、以下フィンランド、ノルウェー、スウェーデンと北欧諸国が上位を占めるという結果であった。

表 1 世界経済フォーラム 2010 「男女格差指数」

Country	2009 rank	2009 score
Iceland	1	0.828
Philippines	9	0.758
Sri Lanka	16	0.740
Mongolia	22	0.722
Kyrgyz Republic	41	0.706
Kazakhstan	47	0.701
Uzbekistan	58	0.691
Thailand	59	0.691
China	60	0.691
Vietnam	71	0.680
Japan	75	0.677
Singapore	85	0.666
Tajikistan	87	0.666
Indonesia	93	0.658
Bangladesh	94	0.653
Brunei Darussalem	95	0.652
Malaysia	101	0.647
Cambodia	104	0.641
Nepal	110	0.621
India	114	0.615
Korea, Rep.	115	0.615
Pakistan	132	0.546

教育という点では他の先進国とそれほど差はないというのに、それがその後に活かされないのはもったいないことである。今後、両国の女性のさらなる社会進出のためには、上記のような北欧諸国を手本に政府は改革を進めていくべきであろう。また、「しごと未来館」のような施設をもっと認知・活用させるべきである。それと同時に私達も自分が何をやりたいのか、何を目指すのか、またそのためにはどんなことが必要になるのかなどを、女性たち自身が主体となって調べていかななくてはならないだろう。

³ ただし、平成 23 年に京都女子大学に設置されることが決まっている。

5.2 韓国側

セミナー期間中、日本側の学生たちと一丸となって活動したからか、このセミナーが持つ「体験の重要性」を知ることができた。日本側もこのプログラムを授業ではなく自由参加に転換できたらいいと思う。なぜかという、一方は授業の一環で、もう一方は自発的な参加であるため、双方が期待している最終の到達点が違う可能性があるからだ。微々たるものではあるが、私達は日本側の学生の課題の達成のためにできるだけ配慮しようと心がけていた。もっと心を開いて、何の制約もなく自立的にセミナーを進められなかった点が物足りなかった。

しかし私達のグループの、セミナーの話し合いの中で実現させてみたいと思った事柄もある。例えば、家父長制の意識の根を断ち切るような男性向けの育児の雑誌⁴を作る、あるいは男性トイレにベビーベッドを設置する、そのほかにも幼稚園の運営時間を延長することよりも優先して会社の近くや社内に託児所を作るなどである。

もしもこのセミナーに、私たちグループの主題である「女性の社会進出」に関わる現職の職員が参加していたならば、彼らは新しい視野やアイデアを得ることができたかもしれない。セミナーが単なるセミナーで終わってしまうのではなく、現実の行動に繋がっていくと願っている。

<参考文献>

森山新 (2010) 『韓国における取組と日本への示唆』 内閣府調査

広木道子(1993) 『新・世界の女たちはいま―韓国―』 学陽書房

李在興 「韓国における女性雇用政策の現状と問題」

<http://www.jil.go.jp/institute/kokusai/documents/li.pdf>

(財) 自治体国際化協会 「CLAIR REPORT ー韓国の女性政策についてー」

http://www.clair.or.jp/j/forum/c_report/html/cr188/index.html

韓国女性部公式 HP[英語版] <http://english.mogef.go.kr/index.jsp>

時事通信 2009年10月27日

⁴ ちなみに日本では『FQ JAPAN』という男性向け育児雑誌が発売されている。ただし出版元のアクセスインターナショナル社の本部はイギリス。

慰安婦

ー過去の傷を癒し、平和なる未来へー

五十嵐美季・岡戸美希 鈴木智子・出分日向子（お茶の水女子大学）
クユギョン・ヤンインヒ・キムカヨン・チンユンヒ（同徳女子大学）

1. 研究の動機と目的

私たちが「歴史」グループとして集まり韓国側とチャットを進める中で、歴史問題に関連して「慰安婦」という言葉が出てきた。「慰安婦」という言葉自体を知ってはいるものの、詳しくは知らなかったもので、メンバーのほとんどが調べてみるべき問題だと感じていた。考えてみれば私たちは今まで「慰安婦」問題について詳しく知る機会はなく、知っている事と言えばメディアなどにより広められた漠然としたイメージや偏った考えであり、それ以上踏み込んで知ろうとしたこともなかった。しかし当事国として、また同じ女性として向き合わなければいけない問題であると感じ、この機会に調べることとなった。

私たちはこの研究を通し、「慰安婦」問題のみでなく現在の日韓関係を見つめ直し、また今後の日韓関係について考えを深めることを目的とした。歴史問題はこれまでその話題に触れることはタブーであるような社会的風潮があったが、これからの関係を考える以上過去を無視することはできない。日本は戦争について語る時、自分たちが加害者であったことを直視しようとしませんが、歴史問題を置き去りにしたままではこれからの関係は発展しない。社会を担う世代として、歴史問題を直視し当事国同士で討論を深めることで今の日韓に何が必要なのか、またこれから何が必要とされるのかを考える機会としたい。

2. 事前調査

私たちはまず「慰安婦」問題について詳しく知ることから始めた。参考として、メンバーそれぞれが「慰安婦」被害者の1人である宋神道さんの「慰安婦」裁判を追ったドキュメンタリー『オレの心は負けてない』を視聴し、日本側は『戦争と性-韓国で「慰安婦」と向き合う』を読んで意見交換を行った。また、「慰安婦」問題に対する国民の意識を図ることを目的にアンケート調査を実施した。この結果と考察は、4の調査結果に記すことにする。

2.1 文献による調査

2.1.1 「慰安婦」とは

日本軍「慰安婦」とは、日本が太平洋戦争で敗北した1945年8月までの間に日本軍の性慰安を強要させられた女性のことをいう。12歳の娘から学生、主婦などの様々な女性が、就職詐欺、人身売買、誘拐、暴力などの方法で集団的に連行され、管理された。大東亜戦

争に連れてこられた朝鮮人女性の「慰安婦」は10万から20万人と推定されている。戦争が長くなるほど「慰安婦」はより多く必要になり、植民地だった朝鮮の女性を多数連行した。これは、「朝鮮の女性には性病がない」という儒教思想の考えも一つの理由となった。

慰安所設立の歴史的背景とは、日中戦争以後、1937年の南京占領の時に日本軍が大々的に民間人を虐殺し女性をレイプしたことにある。これが国際的な非難を浴び、日本軍の幹部たちは兵士の性処理を体系的に管理する必要性を感じた。その上、戦争が長期に渡ったことで日本はレイプと性病拡散を遮る必要性がより切実になり、軍慰安所の制度を拡大した。日本軍「慰安婦」が生活した慰安所は軍が直接運営あるいは民間に委任した。全て軍隊の保護監督、厳しい統制下にしかれた。

「慰安婦」の女性たちは、規定よりも多くの軍人の相手になったり、軍人の要求を拒否すれば殴られたり殺されたりした。終戦後、慰安所の存在を隠そうとした日本軍は関連資料を焼却処分し、慰安所にいた「慰安婦」を集団的に遺棄したり虐殺したりした。

2.1.2 現在

「慰安婦」被害者は結婚して子供を生んだりする普通の女性と同様の人生を送ることが出来ない。そして身体的のみではなく精神的な障害、トラウマで苦しんでいる。そしてこれが国際的にも論議になり、国連やオランダなど様々な議会で日本政府は謝罪と賠償をするべきだという決意案が出ている。また、日本軍の性奴隷に関しての国際法廷の中には、戦時性奴隷として女性を強制的に動員した日本の戦争犯罪を断罪するために開かれた国際民間法廷もあった。2000年12月に東京で開かれた、日本に戦争犯罪の責任と加害者への政治責任を課すために女性を中心となって行った刑事法廷である。アジア被害国8ヶ国—韓国・北朝鮮・台湾・中国・フィリピン・マレーシア・インドネシア・日本—が共同開催し、世界の女性団体と人権団体がこの法廷を支援した。この裁判では、被告に起訴された裕仁天皇と元日本軍幹部に人間の奴隷化、拷問、殺人、人種的理由によるいわば人道に対する罪を犯したという有罪判決を出したが、民間法廷のため法的拘束力はなかった。

2.1.3 違反した国際法規法の項目

(1) 国際人道法規範の違反

①martens clause 「より完璧な戦争規範が設けるまでには・・・戦闘員と民間人は・・・国際法の原則のもとに存在する」 国際人道法は国際社会すべての国に絶対的義務として与えられるものである。

②戦争犯罪の内容 ③人道に反する罪 ④戦争法規範の違反

(2) 国際条約の違反

①婦女売買禁止協約の違反 ②強制労働禁止協約の違反 ③奴隷売買禁止条約

④国際慣習強行規範の違反

2.1.4 両国の態度

-日本

国家的・法的な賠償ではなく、人道的な義務だけがある。日韓条約、サンフランシスコ

条約などで賠償や請求権の問題は解決済みだ。「時効が成立した」、「第二次世界大戦が終わってから 50 年以上も経った」という主張をしている。

-韓国

1993 年、保健福祉部を通じて「慰安婦」を保護し、無料の医療支援及び生活費を支援する「生活支援法」を施行した。しかし、現政権に入ってからには経済的関係の悪化を懸念したせいか、「慰安婦」に関する発言を慎んでいる。

2.1.5 ドイツとの比較

2005 年、ドイツのベルリンでも日本軍性奴隷被害者の問題に対して日本政府の謝罪と賠償を求めるデモが行われた。一方、第 2 次世界大戦におけるユダヤ人大量虐殺に対するドイツの反省と賠償が世界に大きな感動を与えた。1970 年当時、ドイツの総理であるヴィリー・ブラントはポーランドを訪ね、ユダヤ人虐殺に対してひざまずき、謝罪したのである。2005 年には、当時大統領であったホルスト・ケーラーも公式謝罪した。そしてドイツの首都ベルリンにホロコースト記念館を設立することで、過去の罪を告白し、反省の意を示した。また、ナチスによる強制労役被害者のための基金を設立し、25 億マルクを募金した。この基金設立にはドイツの優秀企業が参加したという。

2.2 日本側

日本側は日本での実習として、2005 年 8 月に開館した早稲田にある「わたしの戦争と平和資料館」を訪れた。ここは多くの平和資料館があるなか唯一慰安婦問題を特化した資料館で、太平洋戦争における日本兵の暴力だけでなく、現代の戦争や紛争における女性に対する問題も取り上げている。

平和を目指す人々が集えるような場も提供し、小規模な会合や集会、ミニシアター、展示会などが開けるオープンスペースも備えている。資料館が教育や女性たちの行動の拠点にもなる。毎年特別展を開催し、「慰安婦」だった女性たちの声を届ける。

ここでは被害女性の生の証言がパネル展示してあり、想像するだけですごく嫌な気持ちになった。「嫌な気持ち」というととても抽象的で分かりにくいのが、簡単に表せるような気持ちではなかった。証言によれば、誰も自分から進んで「慰安婦」となった女性はおらず、皆工場労働者になるなどとだまされて、もしくは誘拐などの強制連行という形で連れて行かれたということだった。彼女たちが被害を受けたのが私たちと同じような年齢、もしくはそれより年下の場合がほとんどであった。また解放されたでも自分の受けた酷い被害を家族に言うことや、結婚はおろか男性と付き合うことも恥ずかしくてできず、「慰安婦」だった戦時中だけでなく戦後の長い人生においても多大すぎる影響を受けた。定職に就くことも家族のもとに帰ることもできず、「慰安婦」だったことで差別をうけ、たったひとりで生きる。それはどんなに辛いことか私たちには分からないが、耐えきれないだろうということは想像できる。今まで「慰安婦」という言葉を聞いたことはあってもそれが具体的にどんなものなのか、どんな被害をうけたのか知らなかったし、知ろうともしなかった。しかし今回の実習で少しでも具体的に知り、とてもひどいことだと分かり、日本が謝罪して

いないのはおかしいと感じた。

また、日本には「慰安婦」に特別に焦点を当てているこのような施設はひとつしかなく、これは日本人の「慰安婦」に対する関心の低さを表しているように思う。

2.3 韓国側

韓国側は事前の実習として、7月7日（水）に水曜デモに参加し、7月13日（火）にナヌムの家を訪問した。

2.3.1 水曜デモ

水曜デモは「慰安婦」問題を解決するために、毎週水曜日に日本軍「慰安婦」被害者の方々と社会団体、女性団体、一般人と一緒に日本大使館の前で行うデモのことである。水曜デモは1992年1月8日、宮澤喜一日本首相が韓国を訪問したのがきっかけとなって始まり、雨が降っても雪が降っても欠かすことなく今日まで続いている。これは、ひとつの主題のもと世界で最も長く行われているデモで、2010年8月21日現在までに、延べ931回行われている。

水曜デモの現場は、韓国人でさえも「慰安婦」問題についてあまり関心がないことを見せてくれた。「慰安婦」問題について被害者たちが望んでいる日本政府の謝罪を得るためには、まず韓国人たちが関心を持つべきだと感じた。

2.3.2 ナヌムの家

ナヌムの家は1990年代、生活がままならないこともあった日本軍「慰安婦」被害者の方々のために、「楽に住める所を作ってあげよう」という考えで作られた場所である。現在ナヌムの家に住んでいる人は8人。そして、ナヌムの家は歴史教育のために日本軍「慰安婦」歴史館を運営している。その歴史館では、慰安婦の説明やナヌムの家に住んでいる日本軍「慰安婦」被害者たちの経験が反映されている絵を展示している。



写真1 名札



写真2 再現部屋内部の様子

その中でも、当時「慰安婦」が生活した部屋を再現した部屋は大変ショックだった。外には日本語の名前が書かれた札が掛けられている。部屋の中にはベッドと膣を洗う容器しかない。その部屋を見ることで、私たちは「慰安婦」の痛みを間接的に感じられた。

3. 韓国での野外実習

私たちは当初、8月19日（木）の韓国での野外実習地としてナムムの家や水曜デモを考えていた。しかし、それぞれソウルから遠い場所に位置していること、実習の日時と予定が合わないということを理由に、同様に当時の物を見学できる西大門刑務所歴史館を午前中に、「慰安婦」問題解決のための活動をしている韓国挺身隊問題対策協議会（以下、挺対協）を午後、それぞれ見学することに決めた。

1) 西大門刑務所歴史館

西大門刑務所歴史館は、大韓帝国末期に刑務所として作られ、韓国の抗日独立運動に対する大日本帝国の代表的な弾圧機関だった。それが1998年、抗日独立闘士の霊を慰めて未来に独立の重さを知らせるために、西大門刑務所歴史館として開館した。



写真3 西大門刑務所

しかし、日本人も知るべきものを展示しているにも関わらず日本語の案内板がなく、やっと予約して受けた日本語の説明案内はペースが速すぎて、展示物を見る時間もなかった。

2) 韓国挺身隊問題対策協議会

韓国挺身隊問題対策協議会（以下、挺対協）は、日本軍「慰安婦」問題解決や被害者の人権と名誉を回復することを目的として1990年に設立された。主な活動には、水曜デモの実施や「慰安婦」被害者へのケア、「慰安婦」問題についての集会・展示会の開催などがある。また、「慰安婦」問題だけではなく、世界中で起こる様々な女性に対する暴力に関する情報収集や、歴史・人権教育の場の提供、戦争性暴力被害の防止活動なども行っている。現在は、「戦争と女性人権博物館」設立に向けた活動も進行中である。

今回の実習では、はじめに「慰安婦」問題をまとめた映像を視聴し、その後挺対協の方にインタビューを行った。以下にその概要を項目ごとにまとめる。

① 挺対協設立のきっかけ

挺対協の設立者であるユンチョンオクさんは、韓国が解放されてから男性は次々と帰って来るのに女性は全然帰って来ないことを疑問に思っていた。以前から「慰安婦」についてのうわさを聞いていた彼女は、1980年代に日本各地を訪ねながら「慰安婦」の痕跡をたずねて調査し発表した。その後、様々な女性学者や女性団体（協会、市民団体など）が集まって、挺対協を作った。

② 「慰安婦」被害者に対する正しい呼称

よく使われているものには、「慰安婦」「従軍慰安婦」「挺身隊」の三つがある。しかし、この三つはすべて間違った呼び方である。被害者自身は日本の軍人を慰安したかったわけではないので、「慰安婦」と言う呼び方は適切ではない。「従軍慰安婦」と言う言葉は、自分の意思で「慰安婦」になり軍隊に連れて行ったという意味なので間違っている。

「挺身隊」は、被害者の苦しみを把握していない言葉である。

現在一番ふさわしいとされているのは、「性奴隷被害者」や「強制的被害者」などであるが、これらは「慰安婦」被害者本人の前で使うには辛い言葉なので、「日本軍慰安婦被害者」と言う言葉が正しい言葉であろうと思っている。どんな名称が良いかは、今後も引き続き考えていかなければならない。

③「慰安婦」被害者のおばあさん（韓国語でハルモニ）の望み

戦争犯罪認定、真相究明、公式謝罪、法的賠償、責任者の処罰、歴史教科書への記録、追悼碑と資料館の建設

これらは、挺対協も日本政府に対する要求として掲げている。

④日本政府がこれまで何度も謝罪をしてきたにもかかわらず現在も謝罪を要求する理由

事実をよく把握していない人の口から「売春」という言葉が出たり、日本の政治家の中に依然として「慰安婦」問題をきちんと把握せずに謝った発言をする人がいたりするので、過去の謝罪が本心からくるものだとは信じがたい。心を込めた謝罪をして欲しい。

このように普段からハルモニたちと直接交流して支援している方にインタビューをすることで、より実状を知ることができた。特に、日本政府に対して一番求めていることは「心からの謝罪」であり、過去の罪を認めて反省する誠実な態度が求められているのだということを確認できた。

4. 調査結果

私たちは事前調査の一環として、「慰安婦」問題の認知度と相手国に対する意識をはかるため、日韓それぞれでアンケート調査を実施した。調査方法は、日本側はインターネットによる調査、韓国側も同様にインターネットによる調査と街頭調査である。対象としたのは主に10～40代の男女である。当初は記述式の設問も用意したが、両国で調査方法を統一することが出来ず調査手段が制限されたため、対象者全員から記述式の回答を得ることは困難だった。さらに、日韓両国でサンプル数が異なること、特に日本側のサンプル数が少なく世論データとするには多少偏りがあると考えられる点には留意したい。しかし双方の結果を比較検討することで、いくつかの傾向が見出された。

質問は、以下にあげる17項目である。（〔 〕は韓国側の項目）

- ① 韓国〔日本〕についてどう思うか。
- ② 韓国〔日本〕の好きなところはどこか。（複数回答可）
- ③ 韓国〔日本〕の嫌いなところはどこか。（複数回答可）
- ④ 現在、日本〔韓国〕の10～20代には韓国〔日本〕の芸能人、歌やドラマが流行っているが、これについてどう思うか。
- ⑤ 韓国〔日本〕の情報はどこで手に入るか。（複数回答可）
- ⑥ 韓国人〔日本人〕と交流したことがあるか。
- ⑦ 韓国〔日本〕のイメージに一番大きく影響を及ぼしたのは何か。

- ⑧ 日韓両国の関係がよりよくなるためには、これからどのような努力と行動が必要だと思うか。(複数回答可)
- ⑨ 日韓両国の関係改善のために日韓両国の政府に要求する行動には何があるか。
- ⑩ 慰安婦について知っているか。
- ⑪ 慰安婦は実際にあったことだと思うか。
- ⑫ 学校で慰安婦について学習したか。
- ⑬ 慰安婦の情報をどうやって得たか。(複数回答可)
- ⑭ 慰安婦についてどの程度知っているか。
- ⑮ 日本で慰安婦裁判が行われていることを知っているか。[ナナムの家を知っているか。]
- ⑯ 日本に慰安婦に関する資料館や記念碑があることを知っているか。
[毎週水曜日に日本に謝罪を要求する集会(水曜デモ)があるのを知っているか。]
- ⑰ 慰安婦問題に対して、早急に必要とされることは何か。

ここでは、関連する複数の項目を同時に検討し、全体を概観することでわかったことをまとめていく。

まず①～⑨の日韓関係に関しては、両国において相手国に対し肯定的な印象を抱いている人が多いという結果になった。これには、今日互いの国の芸能や料理の受容がますます高まっていることやメディアの影響、観光などで両国の交流機会が増えたことが理由としてあげられる。しかし一部には否定的な印象を抱いている人々もいて、この場合は歴史・政治問題を理由にあげる意見が大多数であった。これに関連して、韓国側では今後の日韓関係改善・活性化のために必要なこととして日本の過去に関する謝罪と歴史を振り返ることをあげていた。その一方で日本側は謝罪と答えた人はほとんどおらず、むしろ否定的な意見つまり謝罪は必要ないと考えている人が多いという結果が出た。逆に日本側の意見としては、経済協力や交流拡大といった未来志向の意見が多かった。しかし、それに必要な歴史を振り返り意識を変えることをせず異なった歴史認識を抱いたままでは、良好な関係を築いていくには依然として障害が生じるであろう。

次に、⑩～⑰の「慰安婦」問題に関して、韓国では以前より教科書で扱われる内容が減ったため10代では「慰安婦」について知らない人も数人いたが、それでも大多数の人がこのことを知っていた。日本でも、学校で「慰安婦」について学習したと答えた人が全体の約2割いたが、言葉は聞いたことがあるなど表面的な知識に留まっているということがうかがえた。これでは、メディアの報道や政府の見解を鵜呑みにするだけで終わってしまうであろう。「慰安婦」問題解決に向けて必要なことについても、韓国側は日本政府の謝罪を韓国政府の積極的対応という意見が多かったが、日本では謝罪という意見はほとんどなく、関心を持つことが必要だという意見が多かった。つまりこれは、現時点では関心が低いということであり、やはり歴史を学習する場である学校において「慰安婦」問題が取り上げられる必要があるだろう。

5. 考察

5.1 日本側

今回のセミナーで「慰安婦」について学んだことは私たちにとって貴重なものとなった。セミナーを通して学んだこと、考えたことを以下に述べていく。

「慰安婦」という言葉は知っていたが、テーマである「慰安婦」問題は具体的にどういったものだったのかは知らなかったため、この機会に深く知ることができるのではないかという思いから選んだものであった。しかし、「他人事だから」という気持ちがあったことも事実である。

調査をし、韓国側と議論を重ねていくうちに、衝撃的な事実直面することも多々あった。私たちがメディアなどによって広められた間違った考えを鵜呑みにしていることも分かり、「慰安婦」問題の現状が見えてきた。事前に行ったアンケートからも分かるように、日本は「慰安婦」問題に対する関心が低く、もう終わってしまった過去のことだという認識を持っている人が多いようだ。関心の低さは、教科書に「慰安婦」問題の記述が無いことなど、知ることのできる環境の乏しさによる情報不足が原因であると考えられる。情報が不足しては自ら進んで知ろうとすることは難しい。また、日本は、第二次世界大戦における唯一の原爆被害国として被害者意識が強調されがちであることも関心の薄さの理由であろう。確かに原爆の被害は多大で、傷ついた人は数えきれない。しかしそれと同様に、日本も外国に対して酷い仕打ちをしたのだ。被害者意識ばかりではなく、加害者意識も持たなくては行けない。一方、韓国はどうかというと、韓国側の指摘にもあるように、韓国国内においても「慰安婦」問題への関心が低いという事実がある。これは驚きであった。「慰安婦」に対して clean ではない、恥ずべきことだという偏見を持っている人が多くいることにも驚いた。両国の人々が事実を知り、真剣に考えてこれまでの無関心を反省する必要があるのではないかと思った。

国際社会の注目が高まったことで、解決に向けての活動を行う団体も領域を広げている。しかし、問題解決への道のりは遠いように思われる。少しでも解決へ近づけるように、日韓両国がこの問題に向き合わなければいけない。現状では、真摯に向き合い、深く理解しているとは言いがたいのではないだろうか。これは、政治的イシューとして「慰安婦」問題が話題になったとき、ナショナリズム論へと変化し、自国の正当性を主張する見解が出されることや安倍元首相をはじめ批判的な発言をする人もいることが示している。もう一つ解決を阻めているものとして、韓国の要求に付随する問題が挙げられる。つまり、公的謝罪を受け入れると、必然的に公的賠償金も支払わなくては行けなくなることだ。裁判所では 2000 年の国際民間法廷で裁かれたような責任者や制度について、現行法のもとでは裁くことができず、判断を保留せざるを得ないのだ。

今すぐに解決できる問題ではないが、解決へと近づくためには、これからの世界を担っていく私たちの世代が動き出すべきだ。私たちの世代が政府に対してできることは限られているが一人一人の考え方が改められることで将来的に、「慰安婦」問題への対応が変化す

るのではないかと思う。まずは、私たちのような若い世代がこの問題に関心を持ち、「慰安婦」問題は決して過去の出来事ではなく、現在も苦しむ人々が毎日を生きているという事実を知ることが必要だ。日本国民が事実を知り、罪を認め、謝罪が必要であると行動を起こす「内からの働きかけ」はもちろんだが、韓国の国民も問題に関心を持ち、日本に謝罪を求める「外からの働きかけ」も必要であり、この二つのどちらも欠けてはいけない。

難しい問題ではあったが「慰安婦」をテーマに選んで良かったと思う。時間的な問題でナムムの家に行けなかったのは非常に残念であったが、事前学習で実際に行っていた韓国側が数多くの情報を提供してくれたおかげで状況を理解できた。セミナー全体を通して、「慰安婦」問題を含め歴史問題は、これからの日韓関係のためにも避けてはいけないことであると実感した。また、若者のこれからを考えさせられることが多かった。今、日韓の両国が「慰安婦」問題と向き合うことは、両国間の問題を解決するのみでなく、今後他国で同じような問題が起きたとき、その解決の道標になるかもしれない。

5.2 韓国側

最初、日本側が「慰安婦」をテーマにしたいと言ってくれた時、とてもうれしかった。私達よりもっと関心を持って「慰安婦」について知ろうとしているということがうれしかったのである。

このテーマを調査する前には、私達も「慰安婦」が何かは知っていたが、あまり深く関心は持っていなかった。しかし今回のセミナーを通して、今まで関心がなかったことを恥ずかしいと思った。このセミナーを通して、「慰安婦」のことを真剣に考えるようになり、被害者のおばあさんたちの気持ちが少しでも理解できたと思う。18年間、900回を越えるまで続けられてきた水曜デモに行ったときの気持ちは忘れられない。そしてナムムの家の博物館にあったもう亡くなられたおばあさんたちの遺品と証明をもとに作られた再現の部屋は、ショックという単語でしか表現できず、当時の残酷さを感じるには十分だった。

セミナーのおかげで考え方も変化した。以前は、全て日本の誤りであり日本政府が積極的に進めるべきことだと思っていたが、アンケートや実習を通して、韓国ではあまり「慰安婦」について関心がないということを知った。「慰安婦」については多くの人がある程度は知っているし、悲しく思っている。しかし実際、そのために何をしているかと言うと何もしていないのである。「慰安婦」について調査をすればするほど、その事実がはっきりと見えてきた。

また、この問題が韓国よりもドイツやオランダといった他の国で、より議論になっていることを評価すべきことだと思う一方、恥ずかしくも思った。なぜ韓国ではなく他の国で問題になっているのか。これには日本政府と日本国民よりも、韓国政府そして韓国人の積極的な関心が必要だと思った。「慰安婦」の問題はただの過去の問題では終わらないし、現在と未来を連結している、私達皆が解決しなければならない課題だ。「慰安婦」被害者のおばあさん達はもう待ってくれない。小さなことからでも良いから、私達にできることを探し、実行に移すことが必要だ。それこそが、「慰安婦」問題解決への近道なのではないかと

思う。そのために、未来を導く大学生がもっと関心を持って「慰安婦」問題をきちんと知り、ブログや YOUTUBE に正確な事実を載せて数多くの人達に知らせるべきであろう。

最後に、このテーマにしたいと言ってくれた日本側がいなかったら、ずっとこの問題を忘れていたかもしれない。そして一緒に真剣に考えてくれたことにも感動した。歴史問題は難しいと思ってずっと避けてきたのだが、こうやってお互い話し合ってみることで少しは解決に進められたのではないかと思う。

<参考文献>

高柳美知子・岩本正光 (2007) 『戦争と性-韓国で慰安婦と向き合う』かもがわ出版

在日の慰安婦裁判を支える会 (2007) DVD 『オレの心は負けてない』

女たちの戦争と平和資料館 HP <http://www.wam-peace.org/jp/index.php>

韓国挺身隊問題対策協議会 HP <http://blog.daum.net/hanagajoah/184>

<http://www.womenandwar.net/>

参考記事

<http://news.naver.com/main/read.nhn?mode=LPOD&mid=sec&sid1=oid=055&aid=0000039649>

<http://news.naver.com/main/read.nhn?mode=LSD&mid=sec&sid1=102&oid=001&aid=0003381367>

<http://www.asiae.co.kr/news/view.htm?idxno=2009081912592369843>

<http://www.ukopia.com/ukoAmericaSociety/?pagecode=read&sid=11&sub=1&uid=135689>

<http://www.yonhapnews.co.kr/bulletin/2010/07/08/0200000000AKR20100708002400073.HTML?did=1195r>

国会図書館 HP <http://www.nanet.go.kr/>

ナムムの家 HP <http://www.nanum.org/>

日本軍慰安婦被害者 e-歴史館 HP <http://www.hermuseum.go.kr/>

漫画『もう一度生まれたら、花に』 <http://www.overkwon.com/>

日韓の家屋の比較から考えるこれからの 家屋の在り方について

李由衣・八波理奈・相澤紀衣・安藤瞳・安念美智子・南坂葵（お茶の水女子大学）
パクヒョンジョン・イスミン・チョンインファ・キムソラ・ホセジン・ハヘミ・チャンヘジン（同徳女子大学）

1. 研究の動機と目的

最近韓国では明洞^{ミョンドン}などの若者都市が観光客に人気である。ソウル市内には伝統的な街並みも存在するが、そこには注目が集まりにくい。どうすれば伝統らしさに注目や関心が集まるのか。

一方日本では、観光客は伝統的なものを京都などに求めて旅行する。一方東京には、現代的・近代的なものを求めて観光客は訪れてくる。東京大空襲により家屋の大部分が焼け、伝統的な街並みが失われたという過去もあるかもしれないが、東京にも伝統的な日本らしさや建造物を取り戻すことはできないのか。日本らしさを取り入れることが出来たら、伝統が生活や住居の中で生かされたら、わたしたちの生活の幅はどのように広がるのか。また、どうやって伝統を取り入れることが出来るのか。

どのような内容に焦点を当てれば韓国らしさまたは日本らしさを伝えることができるのだろうと考えた。そこでグローバル化が進み、ボーダレスになる中で、人の暮らしや文化や伝統が最もよく表れるところである家（建築様式）を、それぞれの気候に対する対策法に分けて調べてみることにした。

2. 事前調査

2.1 日本側

まず日本の過去の建築様式を調べるために江戸たてもの園に行き、学芸員の方にインタビューを行った。昔といっても様々な建築様式があったが、どの家もそれぞれの気候に共通した対策が見られた。基本的に日本は暑さや湿気に対する対策が充実していた（写真1，2）。そして、未来の建築様式を調べるためにお茶ハウスに見学に行き、教授に色々説明していただいた。教授の考えとしては、縁側や素材など昔からの伝統を残しつつ IT 技術を取り入れた家を目指したいとのことであった。そして気候対策としてはやはり昔からの知恵がそのまま進化した形で使用されていた（写真3）。

近現代になり伝統は確実に失われつつあるが、それでも確かに、少しではあるが息づいているのだなと感じた。



写真1 江戸たてもの園



写真2 江戸たてもの園



写真3 お茶ハウス外観

2.2 韓国側

私たちは過去・現在について、韓国の建築における気候対策の特徴を調べた。

1) 韓国伝統の家『韓屋』で見られる気候の対策の特徴

①マル(床) (写真1)・暑さ対策・湿気対策

マル(床)は地面との間に空間を設け、板を敷いた所であり、日本の縁側と類似している。韓国では暑く雨が多く降り湿気が多い夏を過ごすために底が涼しいマル(床)を使った。マル(床)は部屋と部屋を連結する通路であり、壁がないので風通しがよくなる。

②黄土(写真2)・暑さ対策・雪対策・寒さ対策

黄土は、多くの酸素を含んでいる。そして、自動的に温度を調節し、夏には外からの暑い熱気を防ぎ、冬には熱を長く保存する。雪が降った時は水分を吸収しながら湿気を調節し、家の中を暖かくする。

③韓紙(写真3)・暑さ対策・湿気対策・寒さ対策

韓紙は韓国の固有の紙で、強烈な日光を遮断する効果があり、紫外線まで遮断できる。また空気中の湿気を自動で調節する。

④チョマ(写真4)・暑さ対策・寒さ対策

チョマは韓国の軒で、幅が広くて外側に行くほど先端が持ち上がるという形態で建てられた。家の中に一定量以上日の光が入って来ることを防ぐために作られた。すなわち、夏に太陽が高く浮かんだ時、深いチョマは日の光を遮り、陰が作られて涼しいのである。

⑤窓（写真5）・暑さ対策

韓屋は窓が大きく作られているので風通しがよく、窓わくに韓紙が貼られているため韓紙の長所も一緒に持ちあわせている。

⑥家の位置・風対策

韓屋は山を背に正面は水と向い合うという「背山臨水」を原則としている。背山臨水の下で、昼には水側で山側の方に平温な風が降り、夜には山の谷間の風が水側の方に降る。それにより人が活動する昼にはいい風の気運をより受けることができ、夜には山から吹いてくる風を防いで静かに寝ることができた。韓屋は家の位置を周りの自然環境を考え作ることで、風と風の気運の流れを考慮したのである。

⑦家の間取り・風対策

韓屋は家にあるすべての門を開けると、すべての部屋に風が通じるようになっている。これをよって涼しい夏が過ごせ、門を開けたり閉めたりすることで、風向きと風量を自由に調節できる。

⑧キダン（写真6）・湿気対策

韓屋はキダンという名の台石を積み重ねて高くして、その上に礎石をおいて地と一定の距離を置く。これは地から上って来る湿気を防ぐためで、快適な環境を造成するのに効果的である。

⑨オンドル（図1）・寒さ対策

韓国の伝統的な家屋暖房方法。炊き口で火を起こして、炊き口で生成された熱気を含んだ熱い空気が部屋の底に敷かれた「旧たち場(=gu-dul-jang)」というものの下を通りながら暖房になって、その空気は最終的に煙突から出る方式の暖房法。‘バンゴレ’の上に平たい石で旧たち場を作り、その上に土を塗って部屋の底を作る。炊き口(=アグンイ)で焚き物を炒れば、熱い空気が旧たち場の下を通りながら部屋底を暖かくして炊き口(=アグンイ)から出る煙は煙突から出て行く。北部地方で寒さを克服するために作られたもので、韓国全土に普及している。



写真4 マル



写真5 黄土



写真6 韓紙



写真7 チョマ



写真8 窓



写真9 キダン

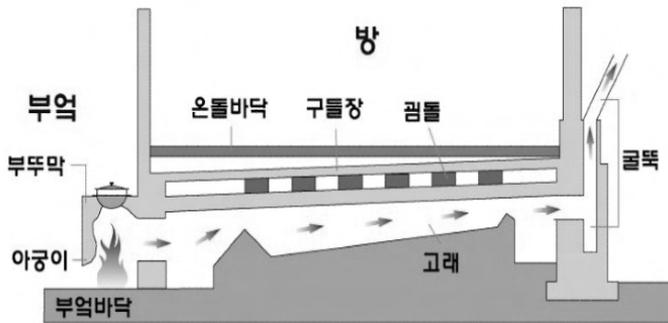


図1 オンドル

2) 現代の家にみられる気候対策の特徴

①ボイラー (図2)・暑さ対策・寒さ対策

ボイラーは韓屋の伝統暖房装置であるオンドルの原理を適用したもので、石油、石炭、都市ガスなどの燃料を燃焼させて、その燃焼熱を水に伝え、蒸気を発生させる装置である。これを利用して家の床下のパイプ管を通じて蒸気が流入され、床を暖かくする。ボイラーを通じて家の中の温度調節ができ、夏には湿気を阻んで、冬は暖かく過ごすことができる。

②二重窓 (写真7)・寒さ対策

窓を二重に設置したもの。二重窓は外の冷たい空気が中に入らないようにする役割、雨水や落ちる雪を防ぐ役割をする。また、外窓と内窓の間を狭めて部屋の空間を広げたり、外窓と内窓の間を離し植木鉢を置くなど自由に空間が活用できる。

③ベランダ・暑さ対策・寒さ対策

ベランダは家の中にある韓国のマル (日本の縁側) または 韓国のマダンの役割を担っている。ガラスで作られているので、外の景色を見ることができるし、日光浴、休息などでもできるところである。このようなベランダは、暑さと寒さが直接、家の中に入ることを防いで、温度の調節をする役割もしている。

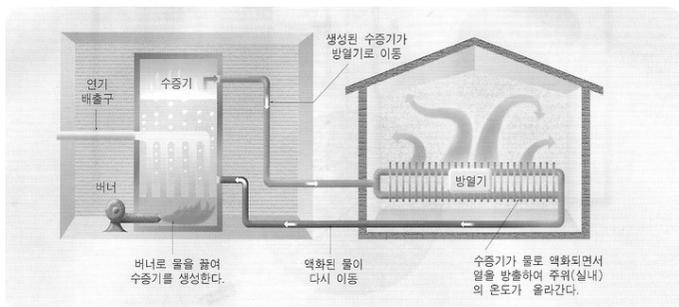


図2 ボイラー



写真10 二重窓

3. 韓国での野外実習

8月19日(木)

①「ナムサンゴール韓屋村」10:20~12:00

10:30~伝統文化遺産解説

韓国の伝統家屋を回り、王朝時代をふまえた生活文化の解説を聞いた。



写真11 韓屋村入り口



写真12 韓屋

②「北村韓屋村」13:30~16:00

伝統家屋が現存し、人々が暮らし続けている集落、北村韓屋村を見学した。

③「來美安」17:00~18:00 (17:00~解説)

韓国のマンションブランドであるレミアンの施設で、ユビキタスを取り入れた未来の住宅を見学し解説を受けた。



写真13 レミアン内部

4. 調査結果

①「ナムサンゴール韓屋村」

階段の段数で身分の高さが違うことや、方角に意味があることなど、日本のメンバーには新鮮なことばかりであった。

女性と男性で、居住に区別があることがさまざまな家屋に反映されていた。

②「北村韓屋村」

落ち着いた住宅街であり、長い塀に囲まれた家屋が立ち並んだ。内部はもちろん見学できなかったが、午前に見学した韓屋が息づく町並みに韓国の歴史と現代の共存を感じた。

③「來美安」

韓国の習慣として、家に帰ったら脚を洗うなどの生活文化や、床を高くするなどの建築文化も取り入れながら、乗るだけで健康診断ができる体重計や、タッチパネルで買い物ができ、また冷蔵庫の中身を把握できる台所など、最先端の技術を生かした新しい住宅であった。韓国の高度な技術を目の当たりにしつつ伝統を残している点を通して、韓国の未来の住宅に魅力を感じた。

5. 考察

5.1 日本側

今回の実習調査を通し、韓国の圧倒的な IT と建築の融合技術を目の当たりにし、かつて「技術大国」と言われていた日本の建築における技術を再度見直すきっかけになったと思う。しかし韓国の住居と比較すると、日本の住居は IT 技術を取り入れた家を売りにはしておらず、むしろ、ベランダや自然とのつながりを売りにした家が多い。住居に IT 技術を導入する事が重要だとは思われていない傾向がある。古民家が現代風のデザインにアレンジされている事が多く、必ずしも新しい家に IT 技術を必要とはされていないと感じた。

この実習調査結果より、建築技術・住居に求められているモノが韓国と日本とで異なっているという事がうかがえた。その原因としては主に「政府の対策」と「精神的差異」の2点が考えられるであろう。

1. 各国政策の違い

- ・日本：日本政府観光局（JNTO）は、2010年に訪日外国人旅行者数1000万人を達成するという目標を掲げた「ビジット・ジャパン・キャンペーン」を展開し、日本建築、文化などが見直されている。
- ・韓国：韓国では、「情報化推進基本法」により1996年6月に策定された情報化推進マスタープラン（1996-2000）の一環として、1999年3月に「サイバー코리아 21」が開始されている。

2. 韓国・日本学生の考え方の違い

今回のグループ討論を通じ、韓国と日本の学生の間で考え方の差異がみられた。

- ・韓国の学生：革新的で、新しい技術はどんどん取り入れていく。好き・嫌い等の意見がはっきりしており、自分の意思を持っている
- ・日本の学生：保守的で、簡素。そこまでこだわりをもつわけではない。新しさよりも、安定を求める。意見を示す際に曖昧な事も多いが、その中にも鋭い感性や感覚を持ち合わせている。

以上2点より、韓国と日本との間で建築の差異が生じたと考えられる。

しかし韓国の現地調査として、未来の住宅を取り扱っているレミアンを訪れた際に、昔ながらの韓紙やチョンマルをイメージした伝統デザインを積極的に取り入れており、日韓双方の学生がそれを見て皆関心をしていた。日本でも自然や古民家が重要視されている事からも言える事として、両国ともに、IT・建築技術などといった「物理的」なものだけでなく、デザイン・居心地などといった「精神的」なものも重要視されていると感じた。

しかし、「物理的」な技術は変化していくものであるが、変化する中にも、変わらないものもある。それが文化・伝統・住み心地などの「精神的」なものだと思う。全ての「物理的」なものが時を経て変わっていく様に、IT技術やグローバル化などの影響によって我々の「暮らし」が変わり始めているのは確かである。それは、現在の日韓両者の住居環境において、個々の文化が薄れてしまっているところからも見てとれる。しかしそれは、決して住居の価値を削り取っている訳ではなく、「精神的」な本質が変わらない限り、文化・伝統などはこれからも残り続けるだろうと考えられる。

また、住居環境というのは住居者とともに変化するものである。韓国と日本の両者の良い点を折衷させる事が出来れば、より良い住居環境や建築技術を発展させていく事が出来るであろう。例えば、レミアンとサムスンが提携していたように、デザイナー等の他業界と積極的に提携する事で、今後の住居環境に伝統を残す手助けになるのではないかと。提携をする事で、住居者の性格に合わせたデザイン、技術、住居環境を提供する事が可能であると考えられる。

5.2 韓国側

私たちのグループは、世界が徐々にグローバル化していく現象を、家に焦点を当てて調査した。

昔は各国の家が気候の特色によって違う特徴を持っていると思ったので、過去の家の特徴を気候の対策を通じて比較した。夏が暑くて湿度が高い日本は畳を、冬が寒くて湿度が低い韓国はオンドルを、各国の家の特徴の代表として挙げられるように、気候の特色によって家の特徴を調べることができた。

しかし、過去と現在の家の特徴を比較するために資料を調査していくうちに、グローバル化する世界で現在の各国の家の特徴は過去より似てきていることが分かった。過去の日韓の家の特徴の比較のための資料を調べる時は多くの資料があったが、現在の日韓の家の特徴の比較のための資料を調べようとすると、異なる部分が少ないので、調べる事が困難だった。それほど現在の各国の家は似てきていると言えるだろう。また調査の過程で、

ユビキタスなどの IT 技術を利用している家が徐々に増えてきていることも分かった。このことを考えても、現在の日韓（だけではなく世界）の家の特徴が IT 技術を利用しているので、似てきたのだと言えると思った。

このように同じようになる理由は、飛行機などの交通の発達で世界が近くなり、またインターネットなどで多くの交流が可能になることなど、グローバル化が原因だと思われる。したがって、さらにグローバル化した未来の日韓の家はユビキタスなどの IT 技術をより利用して似たような家になるであろう。

しかし、未来の日韓の家が同じようになると思うことだけが結論になることには問題がある。将来的に世界の家が同じようになったら、各国の特徴が消えてしまうだろう。それで私たちのグループは、各国の特徴を最も現している伝統を未来の家に残すことが必要だと考えたのである。未来の家に自分の国の特徴を集結した伝統を残すことで、IT 技術で同じようになった未来の家に自分の国の特徴を生かしながら発展できるのではないだろうか。つまり、伝統を残すことで、ローカル性を生かしながらグローバル化ができるのである。

ここで、注意しなければならない部分は、伝統をありのまま残すことではなく、未来の状況と社会に合うようにアレンジして残すことである。このようにすれば、伝統と未来 (IT 技術) が共存できる、よりよい家を作っていくことができると思う。

<参考文献>

- 内田青茂 小野吉彦 (2003) 『お屋敷拝見』河山書房新社
鈴木伸子 (2008) 『TOKYO 建築 50 の謎』中央公論社
田中辰明 (2007) 『これからの外断熱住宅』工文社
藤森照信 (1993) 『日本の近代建築 上』岩波書店
藤森照信 (1993) 『日本の近代建築 下』岩波書店
イ・ヨンスク (2003) 『韓国人の生と未来住宅』延世大学校出版部.
ウェルビング愛(2010.03.26) 「韓屋ハウス - 韓屋のよい点」
Daumblog.(<http://blog.daum.net/wellbing114/12?srchid=BR1http%3A%2F%2Fblog.daum.net%2Fwellbing114%2F12>)
プライオン(2009.07.25) 「グルオンエ ダルガどし - 韓屋 流れる、遮るものがない、通じる。」 Daum blog.(<http://blog.daum.net/jopopcis/17440870>)
「NAVER 百科事典 - ユビキタス」 NAVER 百科事典.
(<http://100.naver.com/100.nhn?docid=770800>)
來美安 ホームページ. (<http://www.raemian.co.kr/front/index.jsp>)

日韓の若者文化

ー自己表現とコミュニケーションの観点からー

友田 椋子・内藤有咲・中島紗織・七枝智美・孫桑桑（お茶の水女子大学）
パクケヒョン・クォンハナ・パクヒョンウン・ソユラ（同徳女子大学）

1. 研究の動機と目的

私たちが生まれた時代—そこには既にインターネットが普及し、一家に電話やテレビ、パソコンがあるのは当たり前といった時代であった。そんな利便性を享受しながらも、私たち若者は新たな文化を創造している。そういった若者文化は、今のわたしたち若者の生活にとって、切っても切れない関係にある。若者文化は、古来の文化と比較して独自の要素を含有しており、かつ、わたしたちの外見や内面をより反映する。そして、一方で新たな文化が生まれ、一方で古い文化が廃れるという一定のサイクルの下、若者文化は日々進化していく。そのように、ひとつの文化内でも移り変わりの激しい日本の若者文化であるが、果たして他の国の若者が発信する文化とは、どのような違いがあるのだろうか。そう考えたことがこの研究の発端となったのである。

研究内容にあたり、わたしたちは、若者文化の中で若者自身がどのように自己を表現しているか、という点に注目した。多種多様な若者文化の中では、個々が自由に己を表現できる。わたしたちは韓国側とチャット討論を繰り返した結果、外的自己（外見といった外面的部分）と内的自己（自己の考えを疎通するといった内面的部分）を、若者がどう表しているか、研究することとなった。この主題を考えるにあたり、外的側面として<ファッション>、内的側面として<コミュニケーションツール>について、それぞれ具体的に調査を行った。そこから日韓双方の若者文化を比較し、また若者文化が何に影響され、また何に影響を及ぼしているかを探る。そしてまた、韓国での共同生活やディスカッションを体験し、若者の本質に迫る。

2. 事前調査

2.1 日本側

<ファッション>

渋谷でフィールドワークを行なった。渋谷にいる人々はバラエティに富んだファッションを身にまとっていた。いわゆる赤文字系とよばれるお姉さん系ファッションの人もいれば、ギャルやゴスロリファッションの人もいた。

また、ファッションの歴史についても文献を用いて調査した。1970年代から現代に至るまでのファッションは多種多様なものが生まれてきており、その時代を反映するようなフ

ファッションが流行した。特に最近では、レギンスなどの重ね着ファッションやタイトなスキニージーンズなどが世代を問わず流行した。

<意志疎通>

mixi 利用者に対してアンケートを行なった。mixi の利用歴、利用目的、利用頻度、また、mixi がなくなったとしたら自分の生活はどう変わるか、mixi が自分の情報源に占める割合、mixi の長所・短所、mixi 以外で利用している SNS はあるか・またそれは何か、などの質問項目で調査した。

2.2 韓国側

<ファッション>

ホンイク大学でフィールドワークを行なった。普段は意識しないファッションについて、注意深く観察する良い機会となった。

日本側と同様、ファッションの歴史についても調査した。韓国でも、その時代に即したファッションが流行していたが、最近では、日本と同じくレギンスやスキニージーンズの流行がみられる。

<意志疎通>

SNS 利用者に対してアンケートを行なった。主に利用している SNS は何か、その利用歴、利用目的、利用頻度、SNS がなくなったら自分の生活はどう変わるか、短所や改善してほしい点、SNS や自分の情報源に占める割合、利用を辞めてしまった SNS はあるか・またそれは何か、などの質問項目で調査した。

3. 韓国での野外実習

8月19日、私たちのグループはWOO JUNGというブランドのデザイナーにインタビューをした後、韓国の若者のファッション文化を観察するため、^{ミョンドン}明洞と^{デハンノ}大学路を訪れた。

3.1 インタビュー

若い日本人女性をターゲットとしたブランド、WOO JUNGというブランドのデザイナー、チェさんがインタビューに応じてくれた。



写真1・2 WOO JUNGで撮影させていただいた秋冬の服

【質問】

- ①日本の若者はどんなファッションを好むと思いますか？
- ②日本の若者の服をデザインする際、何に一番配慮してデザインしますか？
- ③今までの韓日のファッションの違いと共通点は何だと思いますか？
- ④最近日本で流行しているファッションは何だと思いますか？また、日本人の若者は流行に敏感だと思いますか？
- ⑤日本の若者たちのファッションにおける過去と現在の違いは何だと思いますか？またその理由を聞かせてください。
- ⑥日本の若者が嫌がるファッション、スタイルは何だと思いますか？
- ⑦韓国人デザイナーとして日本人女性の服をデザインする際に、難しいと感じることは何ですか？

【回答】

- ①主に2タイプあるように感じています。1つは、花柄やドット柄などのプリントやレースをあしらったものなど、かわいくて女性らしいタイプです。もう1つは、オーガニックな素材を用いたナチュラルなタイプです。また、日本人は素材の良さや洗濯のしやすさなども服選びの基準にしているようです。
- ②（上記の質問①・回答①と関連しますが）かわいくて女性らしい服を好む人に向けてデザインする際はディテールに、ナチュラルな服を好む人に向けてデザインする際は素材に配慮しています。
- ③韓国は、良く言えばシンプル、悪く言えば地味で、全体のバランスを考え、スタイルを重視します。一方日本は、ディテールを重視し、全体のスタイルが良くても、ディテールが良くないと気に入らないようです。また、具体的なスタイルとしては、日本ではあまりスポーティーなスタイルは人気がないようですが、韓国ではキャップやトレーニングウェアを日常的に身につけます。
- ④韓国は、ある芸能人のスタイル等が流行するとみんなこぞって真似をする傾向があるため、店頭には、ブランド名が違うだけの、似たような服ばかりが並びます。一方、日本は流行の服があっても、それぞれのブランドなりに特性があるため、流行がそのまま反映されるわけではありません。今、私たちは秋冬の服を作っているのですが、雪柄やセーター等のあたたかそうに見える服を考えています。日本はあまり流行に影響されないのので、たとえば、シフォン素材は韓国では夏しか着ませんが、日本では季節を問わず着用され、レイヤード（重ね着）を楽しんでいます。
- ⑤以前はかわいい系のファッションでしたが、最近ではシルエットを重視したファッションに変わってきたようです。理由としては、ZARAやFOREBER 21、H&M等のグローバルブランドの進出によって、日本なりの個性がなくなってきていることが考えられます。
- ⑥真っ赤や真っ青、真っ黄色などのビビッドカラーをあまり好まないです。

⑦日本人は各人の個性が強く、人によって好きなスタイルが様々です。そのため、それぞれの好みに合わせてデザインするのが、韓国人デザイナーとして難しいと感じています。

3.2 明洞

高級ブティックやカラオケボックス、メガネ店やファストフード店、時計屋、化粧品店、屋台や露店（偽ブランド品を売っている露店もある）などが数多く立ち並んでおり、韓国でもトップクラスの規模と人気を誇る観光地であり、日本人観光客にも人気の高いスポットの一つであることから、日本語で表記された看板や日本語を話することができる従業員が他地域に比べ非常に多かった。東京の渋谷や原宿と似た様相で、若者の姿が多くみられる。



写真 3・4 明洞の街並み

3.3 大学路

ももとはこの付近にソウル大学があり、学生街として発展していたのだが、1975年に大学が移転してからは若い芸術家たちが集まり始め、現在の若者が集まる芸術の街となった。ハンドメイドのアクセサリーのお店も数多く立ち並び、目を奪われた。右下の写真は体験型4Dコースターが楽しめるお店。



写真 5・6・7 大学路の街並み

4. 調査結果

日本でも 2008 年 9 月に H&M 銀座店がオープンしたが、私たちが行った明洞にも、ZARA、H&M、FOREVER 21 などのファストファッションのブランドの店舗が見られた。原宿で見られるようなゴスロリファッションの店や人は見受けられなかったものの、ファッションにおいてもグローバル化、ボーダレス化が進み、街を歩く人のファッションも店頭に並ぶファッションも多様なスタイルが見られ、日韓では大きな差異は見られなかった。相違点としては、渋谷や原宿には曜日・時間を問わずたくさんの人がいるのに対し、明洞や大学路はそれほどでもなかった。また、渋谷・原宿には路面店はあるが屋台はないので新鮮だった。連なる店の種類も日韓で違いを感じた。渋谷・原宿にはドラッグストアが多く見られ、手頃な価格の化粧品店はあまりなく、ファッションブランドが多い。

5. 考察

5.1 日本側

私たちは「若者文化」をひとつの大きなテーマとして、それを外見、内面 2 つの側面に分けて調査した。いずれにしても日韓の我々の世代の若者にとって欠かせないものとなって影響を及ぼしているものは、まぎれもなくインターネットであることがわかった。ここからグローバル化とこれからの若者文化の変遷が関連づいているのではないかと予想できる。グローバル化が促進すればするほど、若者文化は新しいものを取り入れ形を変えていくだろう。また、そうしてできた新しい文化がインターネットなどを通じて他の文化圏へと流れ、更に促進されていくのではないだろうか。グローバル化と若者文化は、これからの時代切っても切り離せないものとなっていくだろう。両者はお互いに影響しあい、さらにその動きが活発になっていくと考えられるからだ。

今回の実習全体を通して、一つのテーマを追求していくなかで何が大切となる要素かを感じ取ることができた。グループワークにおいて最も基本的だが最も重要となるのがいわゆる「ハウレンソウ」の報告・連絡・相談、つまりコミュニケーションである。実習の計画から実際の実習、討論の進行、発表原稿と資料の作成など、すべての工程においてコミュニケーション能力が問われていると感じた。わたしたちのグループは当初テーマ設定の段階で互いに見解に違いが生じており、実際に対面しないチャットやメールでのやり取りのなかで自分の本心を伝えることは難しかった。パソコン上という非常に希薄な関係であったため、途中で連絡が途切れるということもあった。そのためにセミナーで韓国を訪れ彼女たちに初めて会うまでは自分たちの班はうまくいくかと多少の不安があったが、その不安は今思えば要らぬ心配であった。とても明るく常に場を盛り上げてくれ、韓国の文化や若者の考え、関心事を教えてくれた。セミナー中は日本語を使用することになっていたため、討論の時も互いに伝えたいことをどのように言えば一番理解しやすいか、相互理解のための姿勢が不可欠であった。面と向かって話すことで初めて相手と向き合い、理解しようと心から思うことができるようになるのだと痛感した。

私たちのグループのテーマは「日韓の若者文化」ということで、両国の自分たちと同じ世代の若者がどういうものに興味があって、どうやってコミュニケーションをとり、何を考えているのかなどを追求していたが、事前学習や野外実習で調査したことよりも、セミナーの8日間が最も目的とするものの答えに近かったと思う。実際に自分たちと違う環境の中で暮らす若者と日常生活を共にし、他愛もない会話をするなかで、彼らが何の影響を受けているのか、どんな考えを持っているのかを体感していき、お互いのことを知っていくなかで、我々が扱った調査内容に対しての自分たちの考えがまとまり、自分たちなりに一つの結論を導き出すことができた。

5.2 韓国側

今回、日本の学生と協力して一つのテーマを追求するというセミナーに参加して、日本や日本の文化、語学に対する印象が変化した。今までほとんど経験したことのない不慣れた日本の文化に触れ、コミュニケーションも日本語で行うということは時には言いたいことをなかなか伝えられず、主張するのが難しい場面もあった。特に発表の時には原稿があっても言葉の壁は大きかった。だが、同じ韓国側のメンバーがフォローしあったり、日本側のメンバーが理解しようと努めたりするなど、互いに分かりあおうとする姿勢が常にあり、そのおかげで発表をより良くするための討論や資料作成の作業がスムーズに進んだように思う。実習中の課題・反省点としては、発表の中で自分が担当した部分について、事前準備が追いつかず、本番で言いたいことを言いきれなかったところがあったことだ。外国語での発表ということもあり、準備時間をもう少し取るべきであっただろう。しかし、発表に至るまでの討論・実習・交流はとても貴重で忘れられない経験となった。海を隔てて違う文化の中で生活する学生同士が、一つのテーマを探究していくという経験はめったに出来るものではないし、また理解しあうことが難しかったりすることもある。日本文化という大きなスケールのものに対して詳しくなることまでには至らなかったが、この数カ月はお互いの国に対して何かを考えてみようとするきっかけとなる大事な時間であった。日本側のメンバーとも絆が想像以上に深まり、これから気軽にお互いの国を行き来するなど交流を続けていきたい。

<参考文献>

城一夫・渡辺直樹(2007)『日本のファッション 明治・大正・昭和・平成』青幻舎
H&M世界四季報 <http://4ki4.cocolog-nifty.com/blog/2008/09/hm.html>

日韓両国の教育問題について —大学受験と高校生活—

山本佳南子・小松映里佳・大石絵里佳・富沢友里・田端はるな（お茶の水女子大学）
パクヘイン・イヨンジュ・イスジン・キムチヒョン・ウォンチンヒ（同徳女子大学）

1. 研究の動機と目的

私たちは「教育」という大きなテーマの中で、高等学校教育や大学受験に焦点をあて調査を行うことにした。このテーマは現在大学生である私たち自身にとって非常に身近であり、だからこそ見えてくる教育の特徴や問題点について主体的に考えることができるだろうと考えたからだ。

またディスカッションをするにつれて、日本側の学生は韓国の教育について「大学受験のときは警察官もがサポートすることもあるなどの、お受験国家」といった断片的なイメージしかなく、韓国側の学生についても「日本のエスカレーター式教育はうらやましい」などといった抽象的な印象しか持っていなかった。一方で、自国の教育の特徴についても知らないことが多いのではないかという考えに至った。このことから自国の教育についても今一度学び直し、お互いに両国の教育について知ることによって認め合える部分や学び合える部分があると考え、調査を開始した。

また、「多文化交流」という観点からも、このテーマを調査することは非常に有意義だと考えた。なぜなら「教育」といったものはその国の歴史や文化を反映しているだけでなく、その国の人の性格や生活にも影響を及ぼしていると考えられるからである。教育というテーマを研究することにより、韓日両国が、お互いの国についてより一層理解を深めるきっかけになるのではないかと考え、調査・研究を進めることにした。

2. 事前調査

2.1 日本側

訪韓前に日本側は行ったこととしては、まず、学歴社会に対する一般的な肯定論と否定論、日本の大学入学試験のシステム、エスカレーター式システムについて、そもそもの日本の教育方針や教育理念について、また、現代日本教育の問題点としてゆとり教育や格差問題、キャリア教育等も調査した。また、韓国側から用意された高校生へのアンケートを高校生 20 名ほどを対象に行い、討論に備えた（アンケート内容は、以下の韓国側事前準備を参照のこと）。

続いて、「学歴社会についてどう考えるか」という意識調査を行った。これは、訪韓中に訪れるソウル大学でアンケートを行うため、それと比較できるように東京大学の学生を

中心に行ったものだ。調査項目は、「①日本は学歴社会だと思いますか」、「②学歴社会至上主義についてどう思いますか（日本がそうであるかそうでないかは関係なく）」、「③日本の“教育”について問題点があるとすればなんでしょう」という三つであり、10名の東京大学の学生から回答を得た。その結果、①については、学歴社会であると回答した人は3名で、それ以外は、強いとは思いますが、一概にそうとは言えないという回答であった。また②については、ナンセンスだという意見が9割で、その理由として、地域や経済力によって生じる格差の存在が挙げられていた。そして③については、「教育における国際性の欠如」や「外国語教育のレベルの低さ」、「キャリア教育の欠如」などという回答があった。アンケート結果を総合して受けた印象としては、‘社会として、学歴は一番わかりやすい尺度ではあると思うが、しかしそれが人間の尺度になるとは思っている人は少ない。学歴があるからなんだ。’というものである。日本で最も学歴が高いであろう東大生の意見としては意外な意見であったが、私たちのグループ内でも同様な意見を持つ者が多かったので、日本人の学歴に対する大体の意見として、以上のようなものを用意した。

2.2 韓国側

私たちはまず、日本側が興味の強かった大学入学試験や、入学試験のシステムの概要について調べた。その中で、私たちが考える問題点と解決方法についてもまとめた。また、韓国には「特別目的高校」という分類の学校があるが、これは日本にはないということだったので、インタビュー調査や学校の様子を拝見させてもらえるところを探してみたところ、そのうちの一枚が快く受け入れてくれることになった。そのして、インタビュー調査の内容や、特別目的学校という存在に対する意見や問題点だと思ふことを伺うために用意した。また、現代韓国の教育事情や問題点も自分たちでまとめ、討論のために準備した。さらには、日本側から韓国の高校生の生活事情を詳しく知りたいという要望があったので、以下のようなアンケートも作成した。同様に、日本側にも高校生へのアンケート調査を依頼した。

<アンケートの質問項目>

*今年生ですか。（ 年生）

1. 高校生活に、どのぐらい満足していますか。
2. サークル活動をしていますか。している場合、その時間はどのぐらいですか。
3. あなたの学校はサークル活動が活発で、それを学校側も積極的に支援していると思いますか。
4. 正規の授業以外の強制補充授業や強制自習などに参加したことがありますか。
5. 現在バイトはしていますか。
6. TVは1日にどのくらい見ますか。

7. 本は1ヶ月にどのくらい読みますか。
8. インターネットは1日どのくらいしますか。
9. 現政権の教育政策を、どのくらい支持/反対していますか。
10. 学校生活をしながら、十分に趣味を楽しめていますか。
11. 大学に進学する人と、そうではない人の将来には違いがあると思いますか。
12. 大学進学のための現在の高校授業は正しいと思いますか。
13. 学校以外に塾に通っていますか。
14. 学校の授業と塾の授業とでは、どちらがより入試の勉強に効率的だと思いますか。
15. 学校の授業以外にも塾の授業が必ず必要だと思いますか。
16. あなたの志望校はこの中でなんですか。
17. 高校生活の中で、サークル活動の意味は何だと思いますか。そしてなぜサークル活動をしなければならないと思いますか。もしくはなぜ部活動をしていますか。
18. 現在の高校教育の中で問題があると思うところがありますか。
19. あなたの今の夢は何ですか。なければ書かなくてもいいです。

3. 韓国での野外実習

実習初日の8月18日は午後のみで実習時間が短かったため、カンナムという街に立ち並ぶ塾の見学をした。こちらでは大学受験対策の塾だけでなく、大学生や社会人が就職のために英語などを学習する塾も見ることができた。一見、高層ビル群に見えるような建物も学習塾であることが多く、韓国の人々の勉学への熱意とビジネスとしての「教育」を、身をもって体感するとともに、「韓国の人々は勉強しすぎではないか、そこまでして勉強しなければならない社会の仕組みはどうか」といった、翌日以降の討論に繋がる議題も浮かんできた。18日の実習では塾の外観や印象を捉えることに目標を置き、実質的なインタビュー調査は翌日に実施することにした。



写真1 塾の外観（カンナム）



写真2 塾の内部

8月19日は、午前中に特別目的外国語高等学校を見学し、広報の方のお話を伺うことができた。その特別目的外国語高等学校は、韓国国内の大学へ入学を目的としたクラスと海外の大学へ入学したクラスに分かれていた。海外への大学を入学目的とするクラスは、主に英語圏が多く、授業はほぼ英語で行われている。教科書も、先生の講義も使用言語は英語であった。



写真3 外国語高等学校の授業風景

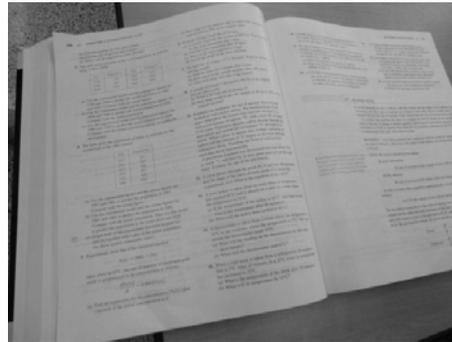


写真4 外国語高等学校の教科書

そして午後はソウル大学に行き、広大なキャンパスの中でグループに分かれてソウル大学の学生にインタビューを行った。その結果、多くのソウル大学の学生にインタビューの協力を得ることができた。質問項目は、日本のものと同様である。

4. 調査結果

<特別目的外国語高等学校でのインタビュー>

特別目的外国語高等学校について、韓国の学生から「朝から夜まで1日中勉強するところ」「エリート教育」「お金持ちが行くところ」といった断片的な情報しか聞いておらず、私たち日本側の学生は、スパルタ教育で生徒がみな机にかじりついて勉強している様子を想像していた。しかし、ご協力いただいた漢栄外国語高等学校の広報の方のお話を聞き、校内を見学させていただくことで、それは断片的な印象にすぎないということが分かった。

まず、一番驚いたのは、28の部活が存在し、活発な活動がされているということだった。環境、医療研究、武術など多岐にわたる部活動が行われており、年に一度の体育大会も生徒全員が参加しなければいけないようで、勉強以外のことを犠牲にしながら勉強に取り組んでいるのではないのだなといった印象を受けた。ただ、日本の学校の部活動は勉強だけでは得られない集団に適応する能力や肉体的鍛錬に留まらない精神力、そして忍耐力の育成を主眼としている一方、この高等学校の部活動は、その活動で得た経験や知識を勉強に活かすために行われているようだった。

また、授業は単位制で、卒業に必要な単位は216、そのうち82が語学の授業の単位ということだった。こういったカリキュラムにより、たいていの生徒は1年以内に専攻の外国語を話せるようになるようである。

さらに、韓国の弁護士のうち50%の人がこのような特別目的高等学校出身ということからも分かるように、優秀な人材を数多く輩出しているようである。しかし韓国全土から中学校で1、2位を争うような優秀な生徒が集まるため、授業についていけず普通科のコース・学校に移ってしまう生徒も多いようだった。

見学に伺った8月は夏休みだったということもあり、普段の生徒の様子は見るのができないかもしれないと予想していたが、その予想に反して多くの生徒が自習、補習のために登校しており、学期中とあまり変わらない学校の様子を見ることができた。自習室を見学したが、自習室内の座席は一人一人指定されており、私語や寝てしまうなど態度の悪い生徒がいれば、その席から外され自習室の使用が禁止されるということであった。学期中は7時15分から授業が始まり、多くの生徒が0時まで勉強し、0時15分のスクールバスで帰るということだった。こういったことから、8時30分から16時頃まで授業というのが一般的な日本の高等学校のカリキュラムと比べて、学校での拘束時間が長く校内での競争も激しいように感じられた。

さらに私たち日本側の学生が驚かされたことは、このような特別目的高等学校に通う生徒たちの意識である。日本の教育環境では、生徒は生徒たち自身の将来の選択肢を広げるため、各自の目標を達成するために勉強しているといった印象を受けるが、広報の方によると、漢栄外国語高等学校の生徒たちは国家、世界というフィールドの中で少しでも活躍し、その発展に従事しようという思いで日々勉強に励んでいるということだった。

漢栄外国語高等学校は東京の高校と姉妹校提携、また短期交換留学を行っており、さら

に北京の高校からは教師陣が見学に来るなど海外の高校からも模範とみなされているようだった。私たちは、特別目的高等学校は日本の高等学校とは異なる点が多く、圧倒されてしまうばかりだったが、生徒の勉強に対する熱意やそれを駆り立てる動機づけ、授業のカリキュラムなど、日本の学校も学ぶべき点が多くあるのではないか、という考えに至った。

<ソウル大学でのインタビュー>

ソウル大学では、事前に日本で私たちが行ったアンケートと連動させるために、

- ①韓国は学歴社会だと思うか
- ②学歴社会だとしたら、学歴社会についてどう思うか
- ③どうしてソウル大学を選んだか
- ④普通科の高校出身か、特別目的高校出身か
- ⑤④について、よかったと思うか

という質問を行った。調査をした日は夏休み中であったため構内に学生が少なく、また広大なキャンパスの中で効率的にインタビューを行うことができなかつたため、12人の回答を得るにとどまった。数多くいるソウル大学生の中の限られた学生の回答であるため結果を一般化することは難しいが、以下に結果の分析を提示する。

まず①についてはすべての学生が「そうである」と答えた。また、②については「学歴社会が本当にいい競争を生み出し、社会をよくする有益な仕組みであるのならば、必要だと思う。」「全面的によいとは言えないが、優秀な人材を生むひとつの方法ではあると思う。」「勉強に縛られずもっと自由に人生を楽しめたらとも思うが、今の社会が学歴を求めている限り仕方ないことだと思う。」「自分は塾などを利用してこの大学に来ることができたが、‘勝ち組’だとは思っていない。しかし、学歴社会である限り、もし大学で勉強したくても経済的理由などから進路を制限されてしまう人がいるならば、そのサポートをするのも社会の義務だと思う。」といった回答が得られた。以上のことから、多くの学生が韓国は学歴社会であり、現在ではその他に社会をよくする方法が見つけられていないため、学歴社会であることはある程度仕方ないことであると考えているようだった。

③については、「自分が目指せる最高のレベルの大学だったから」、「ソウル大学にいけば、優秀な人々に出会え、たくさんのことを学びとれると考えたから」、「まわりのみんなが目指していたから」、「できる限り上のレベルを目指すのが当たり前だと考えていたから」といった回答が得られた。

④については、7人が普通科の高校出身、5人が特別目的高校出身であり、私たちの予想に反して普通科出身の学生が多かった。

⑤については、普通科出身の学生の中には「大学に来てからのレベルにまで差が出てしまうので、特別目的高校出身の学生がうらやましい」と答えた学生や「特別目的高校の生徒たちは勉強ばかりしていて大変そうだった」と答えた学生がいた。一方、特別目

的高校出身の学生の中には「自分は勉強が大好きで趣味のようなものだった。そのため学校の授業も苦ではなかった」、「勉強は大変だったが、その生活がなければソウル大学には来られなかったと思う」、「非常に優秀な友達と出会えた」、「勉強は大変で辛かったし、今の学業に役立つことはほとんどない」といった回答が得られた。以上のことから、自身の出身校について、マイナスな印象を持っている学生は少ないことが分かった。さらに学業における充足感について、出身校の違いはあまり影響が無いように感じられた。

<日本の教育環境、その問題>

韓国側の学生が日本の教育について一番興味を抱いていたのが「エスカレーター式教育」についてだった。韓国の学生は「試験などを受けずに大学までストレートで行けるのはうらやましい」と考えていたようだった。しかしエスカレーター式教育にも、家庭の経済状況によって受けられる児童、生徒が限られてしまう点や、進級のための試験が比較的簡単であることから、学力を十分に培うことなく大学に行ってしまう人が出る点など、問題として挙げられることがいくつかあった。

さらに日本の教育の問題としてあげられたのは、ゆとり教育についてである。ゆとり教育とは、詰め込み型の授業を廃止し自発的に考える時間を設けるために他の学習時間、内容を削るものであったが、多くの教師が文部科学省の指示にそって授業を行い、状況に合わせて柔軟に工夫することが困難であったため、画一的な教育となってしまう、現在では失策と認識されている。

次に問題として挙げられたのは、教師の質の低下である。昨今では教師による犯罪の報道が後を絶たない。また、教員免許の取得が比較的簡単であり、一度取得してしまえば一生有効な資格になることなどから、教師の一定の質を保つという点について懸念されている。しかしこの教師の質については、教員免許に更新の制度を設けることや、教職課程の比重を重くして「教師を目指す人しか教職を取れないようにする」制度を設けることで対策とする方針が決まっているようである。

<調査を踏まえてのディスカッション>

以上の調査を踏まえて、私たちのグループではまず「両国とも、どういった教育が一番よいのか」という大きな枠組みからディスカッションを行った。しかし、両国の学生が自国の、そして自分が受けてきた教育について全面的に批判的に思っているわけではなく、少なからず「相手側の国より自分の国の教育制度の方がいい」と考えてしまい、なかなか歩み寄ることができなかった。そこで私たちは初めて、教育というものがその国の文化や歴史の上に立っているものであり、逆にそれらを形作っているものでもあるのだと気づくことができた。ここから、私たちは「両国同一の理想の目的について考えるのではなく、グローバルな視点から、我々はどのような人材育成を目指せばよいのか」を考える方向に向かった。

5. 考察

5.1 日本側

このセミナーでは、両国の教育の問題点や利点を挙げて「理想の教育」を考えることを最終的な目標としていた。しかし、考察を進め、討論を続けていくうちにテーマが大きすぎることや、それに関する資料が少なすぎるという理由でなかなか意見がまとまらなくなってしまった。次第に、自分たちが自分たちの観点でしか「教育」というものを見てないことにも気付いた。そこで、目標点を変え、「理想の教育」ではなく、そもそも教育とはどうあるべきか、どうあってほしいか、という話し合いになった。そこでは、色々な意見が挙げられた。その中で、グループ内で皆意見がほぼ一致したのが「夢を持てる教育」である。それは、学歴社会であったり、大学入試が厳しかったり、様々な背景や社会システムを変えることはできないが、その中で教育を受ける学生の「夢」を育て、また、「夢」を持てるようにするという教育であると私たちは考えた。なぜ、このような話になったかというと、私たちグループの日本人学生、韓国学生両者共に数名ずつ、本当はなりたい夢があったけど、社会のイメージやシステムなど何らかの外的要因で諦めてしまった経験を持つ者がいたからである。その外的要因とは例えば、本当はファッションの勉強がしたかったけど、受験勉強が忙しくてそんなことを考えている時間はなかったし、そういったことを相談したり考えたりするような機会もなかったなどということである。本来、教育とはその人の人生をより豊かにするためにあるべきではないだろうか。しかし、そうした要因で夢を“諦めさせる”ようなことが少しでもあるのならば、「良い教育」とは言えないのではないかというのが私たちの意見である。

国をまたいで教育について考えるのはなかなか難しいものであったが、それは、教育がその社会背景に基づいて成り立っているからである。しかし、この教育というテーマは、今後も非常に重要でホットなテーマであると思う。またこれからは、グローバル化が進む時代であり、あらゆる異文化が混ざり合うことも多いだろう。その中で、教育において何らかのブレない軸を考えておくのも良いのではという意見も出た。そのひとつとして、上述の内容が当てはまるのではないかと考えられる。少し抽象的であるが、それを日本で具体化するならば、キャリア教育に力をいれることに繋がっていくだろう。例えば、大学三年生になると就職活動が突然始まり出すが、そうではなく、もう少し前の高校生くらいの時期から将来自分は何がしたいかということを考えさせる機会を設け、そうしたことへの知識を増やすことなどが考えられる。

幅広いテーマであったため、なかなかまとまらなかったが、そういった人間や同世代といった根底の共通点をもとにして考えを巡らせていくと、見えるものがあるように思った。またこのテーマとは関係ないことではあるが、異文化を見る際には、差異から目を向けていくのではなく、共通点から目を向けていくのもあるのだなという大きな発見ができたのも、このセミナーで学んだことの一つである。

5.2 韓国側

地理的にも近くて、文化的にも似ている両国の教育に、違いなどあまりないとだろうと思っていた。例えば、学歴社会であること、教育の大幅な体系については事前研究でほぼ同じという解釈だったからだ。しかし、実際に日本側と話してみると、両国の間に様々な違いがあることがわかった。現在の高校教育の方法や学生たちが教育受ける方式といった、目に見えるものはもちろん、目に見えない両国の昔からの歴史を根底とした人々の認識が違うのだということに気付き、それが今の教育にまで現れていることも分かった。そして議論を進める中で、'でも母国の教育の方がいいのではないか'と思っていることに気付いたのも、大きな発見である。

また、私たちにはもう関係ないと考えていた高校教育にも、もっと関心を持って見守ることが大事だと思えるようになった。というのも、このセミナー前は、今の私たちの教育にそれほど問題があるのかなどと、あまり問題だと感じずにいたからである。しかし、セミナーにより、どの国においても高校教育は最も大事なもので、これからの未来に進む人材への最後の教育の機会であると考えられるようになった。

<参考文献>

中野雅至(2005)『高学歴ノーリターン The School Record Dose Not Pay』光文社

溝上憲文(2005)『超・学歴社会』光文社

毎日新聞ホームページ(2010/0816)

<http://mainichi.jp/life/job/news/20100816ddm010100049000c.html>

フリー百科事典ウィキペディア <http://ja.wikipedia.org>

日韓セミナーを通して

中里光穂 (0910142)

1. はじめに

私が今回この実習に参加したのは、韓国に興味を持っていたがまだ一度も訪れたことがなく、しかも観光で行くのではなく韓国の学生と交流することで、韓国の文化を直接感じたいと考えたからである。韓国と日本は歴史的な関係において深く関わっており、韓国内においても日本へのマイナスイメージがある中で、日本に興味を持って、日本について学んでいる学生とはどのような人達なのかとても興味を持った。そして実習を通して文化の異なる人とコミュニケーションを円滑に行うにはどうすればいいかを学ぶことが私の一番の課題であった。

2. 実習を通して

韓国側とは事前にメッセージングを通して何回か交流をしていたが、機械を使つての意思疎通が円滑に進むかどうかは言葉の理解に比例するのだと感じた。特にチャットでのやり取りには顔の表情やジェスチャーといった非言語が使用できないため、互いの理解にすれ違いが生じるなど問題も多かった。

韓国で初めに驚かされたことは、韓国側の学生の日本語力のレベルの高さである。最初、日本語学科の学生ばかりだと思っていたが、美術や薬学など全く異なる学科に所属する学生もいて意外だった。ここ数年で日本に留学する韓国人学生が増加しているが、日本人も第三言語の習得を行う上で見習うべき姿勢だと感じた。

ホームステイ先のお宅では、浴室とトイレの区切りがなかったが、これは予め覚悟をしていたので、日本グループの他の人たちよりもショックを受けずに済んだ。しかし、韓国でも湯船につかる習慣があると思っていたが、シャワーが主流であると聞いて、入浴が日本の文化であることを感じた。また、韓国人は世話焼きだという考えのもとにホームステイ先へ伺ったが、不便を感じるほど干渉されることはなかった。片言の韓国語でパートナーの子にフォローしてもらいながらお母さんと会話したが、そこでも必要以上に干渉されることはなかった。

合宿所に移動してからは発表の準備に追われ、ここで初めてコミュニケーションの難しさを感じた。あらかじめ調査内容を詰めていたつもりでいたが、話しあって行く過程で資料が全く足りないことがわかったり、お互いの認識にズレがあったりと、自分たちの発表への認識の甘さを痛感した。しかし、発表内容は不十分ではあったが、一つのテーマに対して異なる目線からの意見は興味深く新しい発見も多かった。また、言葉の意味を考えながら意見を伝えるという経験は、今後異文化交流を行う上で貴重な経験になった。

3. 感想

実習に参加する前の私の韓国人に対するイメージは、積極的で自己主張が強い性格というものだった。しかし、韓国側の学生はよく日本の文化や日本人の性格を理解していて常に気を遣ってくれていた。気を遣われることはあまりないだろうと思っていたので、とても意外だったし、かえって自分が韓国についてあまり理解して行かなかったことを反省した。よく韓国の男性は優しいという噂を耳にするが、韓国の学生はとても世話好きだったので、男性がそれ以上に気を遣うようになるのには納得できた。

日本人は韓国人に比べて感情の表現が小さいと感じたため、積極的に自分から腕を組んでみたり、話す距離を縮めてみたところ、とても喜ばれたことが嬉しかったし、韓国の文化を少しは理解できたのではないかと感じた。はじめに書いたように、私の中で今回の実習の課題は、異文化コミュニケーションを円滑に行う方法を学ぶことだったが、実習を終えて、その為にはまず自分から異文化を受け入れて実践してしまうことが一番ではないかと感じた。相手に理解してもらうのも必要であるが、自分がその文化を受け入れようとする姿勢がなければ、コミュニケーションが円滑に進むことも難しくなるのではないだろうか。今回の実習を通して韓国に友人を持たせたことはそれだけで意味のあることであり、今後も交流を続けていきたいと思う。

日韓大学生のアルバイト事情

中村紗織 (0510259)

今回のセミナーでは、日韓の大学生活の相違点を多く発見することができた。なかでも特に私が興味を引かれたのは、「韓国の大学生はあまりアルバイトをしない」ということである。

日本の学生は大学に入学したら、少しでも親の負担を軽くするため、「せめて小遣いくらいは自分で稼ごう」と思う者が多い。特に地方から上京するとなると、物価も高いため、親の仕送りだけでは生活は厳しい。よく言えば、「親に頼らず、自立心が芽生える」ことになるが、アルバイトに熱中しすぎて勉強が疎かになることもしばしばある。以前から、日本の大学は「入るのは難しく、卒業するのは簡単」と言われてきたためか、授業よりもアルバイトを優先する学生も多い。一方、韓国の場合は、大学に入るのも大変だが、それ以上に卒業するのが大変であるため、真面目に勉強に打ち込む学生が多いようだ。また、韓国では親も子どもがアルバイトをすることを好まない。「教育を受けさせることは親の役目」という意識が強く、借金をしてでも教育にかかる費用は惜しまないようだ。家庭の事情によってアルバイトをせざるをえない場合もあるが、それでも日本に比べると少ないといわれる。

そして、韓国の大学生がアルバイトをしないもう1つの大きな理由が、“賃金の安さ”であると思われる。日本と同様、「家庭教師」や「塾講師」は他のアルバイトに比べて高時給らしいが、その他のコンビニや飲食店などは4000W前後が主流のようだ。日本では、高校生でも都心部であれば時給800円ほどから稼げるし、中には時給1000円を超える場合もあるというのに。なるほど、「勉強やその他の有意義な時間を削ってアルバイトをしよう」という気にはなれそうにない。確かに、セミナーの自由時間に食事や買い物を楽しみながら、「まだまだ日本よりも物価が安いなあ」と感じた。美味しいカルビとお酒をお腹いっぱい堪能しても、代金は1人あたり11,000Wほどだった。大学生が買いそうな服や化粧品も非常に安い。そう考えると、4000W前後の時給でも十分に楽しい大学生活を満喫できるのかもしれない。しかし、グローバル展開している飲食店やファッションストア（スターバックス、マクドナルド、ZARA、FOREVER21、など）では価格は日本と変わらない。そして、明洞や新村といった“若者の街”には、今やそれらの店が溢れている。韓国の大学生は、これらの店を利用しないのだろうか？主なターゲットは観光客（多くは日本人）なのだろうか？何にせよ、低賃金で働くくらいなら、学生時代は親に甘えてその分しっかりと勉学に励むことが大学生にとってベストな選択なのだろう。そう思う反面、アルバイトを通じて得られる“社会勉強”も必要なのではないかと思う。

日韓の食事様式から考える礼儀

白井綾乃 (0910235)

ホームステイをしたその初日の夜、以前から森山先生が『「これでもか!」というほど、ご飯がだされます。』とおっしゃっていた通り、いろいろな種類のおかずの乗ったお皿がところせましと並べられた。まさに「食卓の脚が折れるまで」という言葉が相応しかった。

翌日朝、緊張からか興奮からかたまたま早朝 5 時半ごろに目が覚めたのだが、もうその時間から調理する音が聞こえ、朝から韓国式家庭料理のフルコース。朝も夜も、とにかくこれでもかどご飯が並べられ、さらには「好きな料理は?」「何が食べたい?」と尋ねられて、私はあの 3 日間、おうちの食べ物を食べちらかしてばかりの客だったと思う。

韓国人でもなく、昔からの関係とかそうわけでもない人間にこんなにフレンドリーに至りつくせりしてくれるなんて、なんて優しいんだろうとその心に驚き、感動し、また感謝の意も十分に述べられない自分の韓国語のレベルの低さを申し訳なく思った。

しかし「無理して食べなくても、残していいんだよ。」と同徳の学生キム・ナレさんに教えてもらった。「昔は自分の分のご飯も相手に差し出すことで相手に歓迎とか好意を示していて、もらった側も半分残すことで感謝や満足の意味を表わすと考えられていた。それが韓国の礼儀だ」と。

日本では、「農家の人が丹精込めてつくったお米は、その米粒のひとつにも神様が宿っていて、残すなんてばちが当たる」という風に我々は教わってきたわけだが、韓国の礼儀は今までの自分にはない見方で、なるほどと思った。

また正座でなく胡坐で食事をしていいこと、茶碗を持ちあげて食べないこと（礼儀正しくないと言われる）、そのためなのかどうかはわからないが、お箸のほかに汁物などはスプーンを使って食べることなど食事に関しては日韓違う点が多々ある。食事を残すのに関しては、日本では感謝や礼儀をむける対象が食材そのものや食材を栽培してくれた人であるのに対し、韓国では食べ物本来の所有者が自分に過度に与えてくれたことに向けられている。勿論どちらが正しいとかの問題ではないし、どちらも礼儀だ。

しかしながら、最後に私が最も感じたのは、礼儀や作法は確かに学び守らなければならない点であるが、それ以上に料理を作ってくれた人に「いただきます」「おいしいです」「ありがとうございます」「ごちそうさまでした」とちゃんと（韓国語で）言うことだ。どこの国に旅行に行くにしても、食事に関するフレーズは覚えておいた方がよく、それは、少し大げさかもしれないが、世界共通の礼儀だと感じた。

思いやり

本多由衣子 (0910267)

「韓国人男性は優しい」とよく耳にする。実際に、知り合いで韓国人男性と付き合い合っている日本人女性の話を聞くと、韓国人男性は日本人男性に比べて優しく何でもやってくれと話していた。こういう話を聞いていた私は、このセミナーで韓国へ行くまで、無条件に「韓国人男性は優しい」と簡単に考えていた。たしかに、セミナーで交際している男性がいるという子の話を聞いていると、個人差はあるにしても日本人男性よりは積極的だが、気配りができて優しく、記念日を大事にする傾向が韓国人男性にはあるように思われた。しかし、それは決して無条件なものでも、一方方向的ではないものだったのだ。

セミナーで韓国人の友達がたくさんできてわかったことは、彼女たちの気配り、思いやりが素晴らしいということであった。たとえば、一緒に道を歩いていれば必ず自分を車道側にして、車が来ればまるで彼氏のように私の体を引き寄せてくれた。また、ご飯を食べていても、飲み物やごはんがなくなれば、すぐにおかわりを持ってきてくれた。しかも、ある特定の一人がそうだったのではない。みんながそうであった。韓国人女性は日本人女性に比べて、気配りがよく思いやりにあふれた心を持っているのだ。そんな韓国人女性であるからこそ、韓国人男性も優しいのではないだろうか。

以前までは、韓国人男性は優しく、そんな男性のもとで韓国人女性はわがままを言っているのではないかと考え、一方方向的に韓国人男性が優しさを女性に与えていると考えていた。しかし実際に、双方向的に「優しさ」があふれているのだと感じた。韓国人女性のあの優しさ、気配り、思いやりがあつてこそ、韓国人男性の優しさも存在するのだ。

また、韓国人女性のスキンシップもとても印象的であった。言語コミュニケーションだけではすぐに仲良くなれない。そこで重要なのが非言語コミュニケーションであるわけだが、その非言語コミュニケーションの一つの道具であるスキンシップがとてもうまく感じられたのだ。先ほど例にもあげたように、他人を気遣った際にも躊躇することなく他人の体に触れる。けれども、自分を気遣っての行動であるわけだから、こちらにも不快感は全く与えない。そういうことを当り前のようにできる彼女たちを、これから国際社会に出ていく私たちは学ぶべきであろう。

韓国人女性は自己主張が激しいとしばしば言われるが、そんな彼女たちは実際には思いやりにあふれた、あたたかい心を持っている。そんな彼女たちと出会えたこのセミナーは、私にとってとても貴重な体験となった。

日韓の人間関係構築の違い

鈴木智子 (0910132)

今回のセミナーで韓国に行ったことは、私にとって非常に大きな経験となった。韓国を訪れることは初めてであったのだが、訪れる前は韓国のことをよく知らずに、韓国人は歴史的な面から日本人に対してあまり良い感情を持っていないのではないかなど勝手に思っていた。しかし、実際に韓国を訪れてみて、韓国人の人と接する時の暖かさを感じた。

私のホームステイ先の子は、セミナーで一緒のグループの子ではなかった上に、その子は日本語があまり達者ではなかった。果たして上手く人間関係を築くことができるのだろうかと不安に思っていたが、ホームステイ先に着くと、アボジとオモニが暖かく迎えてくれて、まるで昔から知っているような錯覚に陥った。なんと挨拶をしたら良いだろうかというような不安は、一気に消えていった。確かに、言葉の面では通じないことが多く、苦労はしたが、通じないからこそお互いの表情、ジェスチャー、声のトーンなどから判断した。そうすることで、相手を良く見るし、自分自身も相手に伝えようと、意識しながら話したり、ジェスチャーを大きさや付けたりと工夫した。言葉では伝えられないからこそ、違う部分で伝えようとした。日本にいたら、当たり前言葉は通じるので、そんなことは意識したことが無かった。日本では、初対面の人には、まずどのような挨拶をするかといった第一声が重要になってくるが、韓国では、言葉よりも態度の方が重要であるように感じた。

韓国側の子に言われて印象に残っていることがある。「日本人はよく「ありがとう」「ごめん」と言うよね。韓国ではお箸をとってもらったぐらいで「ありがとう」は言わない。そう思っているのは皆、分かっていることだから。」意識はしていなかったのだが言われて初めて気付いた。日本では、そのちょっとした気持ちを言葉にして表していくことで、人間関係を構築しようとしている。韓国の場合は、言葉ではなく、態度や内面からにじみ出るもので人間関係を構築しているのだ。韓国で過ごしたことで、気持ちを伝える道具は言葉だけではないことを感じた。

韓国で一番感じた人の暖かさは、言葉だけでは伝えられないものだと思う。歴史的な面を抱えている日本人に対しても、言葉だけではなく態度で優しさを示してくれた。日本側は、この優しさに誠意を持って答えていかなければならない。実際に韓国人、文化に触れ合い、遠いような思いがあったが、近い国なのだと認識を新たに、また、実際に、異なる文化に触れ合い、自分の中に取り込んでいくことの大切さを痛感した。

日韓セミナーに参加して

出分日向子 (0910419)

今回セミナーに参加し、私はとても有意義な時間を過ごすことができた。私は歴史・平和チームの一員として「慰安婦」をテーマに調査を行った。正直言えば、事前調査などを面倒に思っていたし、それほど興味津々でテーマを設定したわけではなかった。しかし詳細に調査をはじめたことで自分が「慰安婦」をどれほど知らなかったか、また知ろうとしなかったかが分かった。日本人であるのに日本がしたことを知らず、にも関わらず表面的な知識のみで「日本は謝罪しなくてよい」などと言っている人があまりにも多い。以前の私もそうであった。自分が得た知識を自分の中に持っているだけでなく、それを広めていかなければならないと感じた。

また、私は今回始めて韓国を訪れたのだが、8日間を通して1番印象的に感じたのは、韓国がとてもアメリカ的であるということだった。韓国人女性の服の着こなし（脚を積極的に出すなど）だったり、フレンドリーさだったり、リビングルームの広さや、若いカップルの付き合い方がとても似ている気がした。アジアの国であり、韓国は日本にとっても似ているだろうと思っていたから、私は韓国とアメリカという組み合わせに驚いた。しかしよくよく考えてみるとこれは冷戦期にアメリカから大きな影響を受けているからではないかと思ひ、それならばとても自然なことだと思ひ直した。そしてこう考えたときに、冷戦期にアメリカとソ連によって分断されるべきだったのは日本だったという森山先生の話思い出した。もし仮に日本が分断されていたなら、日本のどちらか半分はアメリカ文化の影響を大きく受け、今ほど日本独自の文化は継承されていなかったかもしれない。そう思うと日本の責任の大きさを感ずずにはいられない。

また、絶対にアメリカ的ではないが、韓国の特徴のひとつであるのは教育の熱心さである。今回3日間だけホームステイをさせてもらったが、そこには高校生のホストシスターがいた。私が家に戻るといつも勉強していて、10時ごろに「塾に行ってくる」と言ったときには私は本当に驚いた。塾の授業が終わるのも1時ころになるというからおそらく驚き、信じられなかった。私が「そんなに遅くまでやって、授業中眠くならない？」と聞くと、母親が近くで聞いていないことを確認してから「ときどき寝てしまう」と笑って言っていた。そんな時間まで授業があることも驚きだし、それに対する需要があるのもまた然りである。韓国人は教育熱心だと聞いていたが、そこまでやるとは思っていなかった。この熱心さはどこから来るのだろうか。これもやはり日本の植民地支配に少なからず影響を受けているのではないかと思う。朝鮮王朝が途絶えたことで身分制度は消滅し、階級は関係がなくなった。また、足、人口密度も高くなった。これらの理由により、韓国において成功するには学歴に頼ら

ざるを得なくなったのだ。

このように考えると、日本は韓国にとっても大きな影響を与えているが、果たしてそれはよいことなのだろうか。日本は欧米から大きな影響を受け続け、それは日本の発展に欠かせないものであった。韓国が受けた影響を韓国人たちはどう感じているのだろうか。過去を変えることはできないから、それについて今議論することはしないが、この先日本と韓国の両国が互いに良い影響を与え合っていければよいと思う。そのためには今回のセミナーのように私たち若い世代が積極的にまた真剣に交流をし、韓国人と日本人としてではなく、人と人として接していければ、互いの誤解は解け、平和な未来への一歩となると思った。

対話と国際関係

五十嵐美季 (0910206)

私は今回の日韓交流セミナーに参加するに当たり、少し不安を感じていました。それは日韓に歴史問題があったからです。私は高校時代、世界史の先生に戦時中日本軍が韓国にしたことを、特に「慰安婦」問題について話を伺ったことがあり、その時から日韓関係に興味を持つようになりました。近年日韓はお互いの国のアイドルが人気になったりドラマが流行したりと交流が盛んとなっています。しかし、日本のサブカルチャーが韓国に流入していることを韓国の人々はどう思っているのだろうか、表面上日本文化を受け入れてはいてもやはり心の底では日本に対する嫌悪感があるのではないだろうか、と懸念していたので、韓国の人々とうまくコミュニケーションがとれるだろうかと不安に思っていました。そんな中でテーマとして歴史問題を取り扱うことにはかなりのプレッシャーを感じていました。しかし敢えて「慰安婦」をテーマにしようと思ったのは、歴史問題や日韓関係について韓国の人々の意見を聞いてみたい、そこから考えたいと思ったからです。実際韓国側とチャットを通し交流を始め、そしてセミナーが始まってからはそのような不安は全く無用のものだったと気づかされました。韓国側の学生はみんな積極的に話しかけてくれ、日韓が国際関係で問題を抱えていることなど微塵も感じられない程でした。韓国側の皆さんの積極性や、日本語を使ってくれたことに感謝したいと思います。一番印象的だったのは、「慰安婦」問題についてグループ内で討論をした際、私が加害者の兵士の立場になった発言をした時です。日本軍兵士達が加害者であるのに変わりはない、だけど彼らも戦争なんてなければきっと普通の人だったと思う、戦争という極限状態の中で通常の人格を狂わされた、彼らもある意味で被害者かもしれない、と私は言ったのですが、その瞬間に日本最良の失言だったかな、と不安になりました。しかし韓国側の学生はやっぱり日本人だなどと反発することもなく、「うん、そうだね。」と理解を示してくれました。思えば私は今まで韓国の方と接した経験があまりなく、経験もないのに、歴史問題があるからと言って韓国の人々と交流することを恐れていました。しかし私は今回初めて韓国の人々と一対一で深く関わりましたが、そこに国の壁を感じることはありませんでした。このような状態にあるのは日韓だけではないのではないだろうかとは私は思います。今国際関係上でいがみ合っている国々も、きっと国という枠に縛られ対話を避けようとしているから問題は解決しないのだと思います。国家間の交流を深め一対一の対話を積み重ねることで、お互いに理解しあえるのだと思います。国家間で問題を抱えているからといって、相手との対話を恐れないこと、勇気を持って相手に歩み寄ることが国際理解の第一歩なのだと思身を感じました。このような場を提供して下さった森山先生、金先生に感謝いたします。これからも日韓交流セミナーがずっとずっと続いていくことを願っています。

日韓の感謝・謝罪表現の違い

岡戸美希 (0910217)

私が今回のセミナーで韓国の学生と交流することを通しての日韓の比較を試みる時、一番に思い浮かぶことが感謝・謝罪表現の違いである。私がそのことをセミナー中に気にとめる場面はそれほど多くはなかったのだが、それを意識するきっかけとなったのは、同じグループの韓国メンバーが言ったことにあった。

合宿の前夜、私がその子と電話をしていると、彼女は少し風邪を引いたかもと言いつつ、まだプレゼンの準備があるから眠れないと言っていた。そこで私は「無理せずにがんばって」と伝えたのだが、その何気ない、私としては言い慣れた励ましの言葉に対し、彼女は後日になって「あの時はすぐに『ありがとう』と言えなかったけど、あの言葉すごく嬉しかったよ。ありがとう。」と言ってくれた。彼女はまた、「日本人は『ありがとう』って言葉をよく使うよね。私もみんなに会ってから、『ありがとう』を言うように心がけるようになったよ。」ということも話してくれた。

私はこの彼女の話聞いて、日本人の感謝や謝罪の言葉について考えてみた。すると、確かに主観的な印象だが、日本人はとかく「ありがとう」や「すみません」といった感謝・謝罪の言葉を使っているのではないかと思われた。これは、洪 (2007:27-28) が指摘しているように日本の「親しき中にも礼儀あり」、また韓国の「親しき中にも迷惑」と言われる両国人の人間関係構築の違いとしても表れているのではないだろうか。加えて、日韓の対人距離に関する比較とも合わせて考えることができる。例えば、日本人は少しぶつかったり手が触れ合ったりするだけでも、親しい友人間でさえ「ごめんね」とすぐに謝る習性を身につけている。このことは、洪 (2007:280-281,288) が言及しているように、一般的に韓国人よりも日本人の方が対人距離の長いことと、また領域意識の違いと関係しているであろう。つまり、日本人は対人距離が長く、また自他を明確に区分する習慣があるため、相手の領域を侵したという認識から謝罪の言葉がすぐに出てくるといふことだ。日本人はそれによって円滑な人間関係を築いているのではないかと思われる。

日韓両国人それぞれの人との関わり方について、どちらがよりよいというように判断する必要は全くないが、このセミナーを通して韓国の人との関わり方を見て「親しき中にも迷惑」と互いに寄りかかりながら形成される人間関係も、他者とのつながりをより身近に感じられていいものであると感じた。

<参考文献>

洪珉杓 (2007) 『日韓の言語文化の理解』 風間書房

言葉と交流

李由衣 (0910158)

このセミナーに参加しようと決めたとき私は、在日コリアン4世である自分が少しの間だとしても旅行ではなく初めて「自国」に滞在できるようになったことを考えると、当日が待ちきれませんでした。お粗末なレベルでしかありませんが、一応相手の言うことが分かる程度には韓国語を使うことができるので交流しやすいだろうし、韓国に対する思いも他人とは違うものも抱いている、とっていたのです。今でも、統一展望台を訪れたときなどの思いは他の誰とも違うものだったかもしれないと思っています。しかし、単に言葉が分かるだけでは交流の助けにはならない、と今では考えが少し変わりました。そのきっかけは、同じ班の学生から「言葉が分からないからこそ、相手の考えていることについて考えるようになった。ホームステイ相手が韓国語混じりで話していてもなんとなく相手の話したいことが分かるようになった」という話を聞いたことでした。

そのときまでの自分の行動を見返してみると私は、韓国のことがもっと知りたい、折角来たのだからと、ホームステイさせてくれた相手に質問ばかりしていました。相手は親切に答えてくれていたのですが、私にもっと聞きたいことがあったのではないだろうか、違う話もしたくはなかったらどうかと、言葉が通じる自分は相手のことをちゃんと考えていたのか、そして自分のとった行動は交流と言えるのかと、不安を抱きました。

私達の班は一時、セミナーの事前学習において調べるテーマが全くの白紙に戻りそうになったこともありました。韓国にいる人とあんなにも密な交流を持つことは初めてだったこともあり、遠慮の加減を取り違えたことや目的意識の不足が原因だったので、その後のウェブ上の会議では互いの意図が間違っただけで伝わらないよう気をつけて話したり内容を細かく確認したりするようにしていました。それなのにいざ韓国に行ったら自分が関心を持つことばかり話してしまい、また同じ失敗を繰り返すところだったとその子話を聞いて気付いたのです。それからはできるだけ相手がしたいことも考えながら行動するようにしました。

同徳女子大学の院長先生は「あなた達は相手の、そして文化を『知っている』でしょうか。『分かっている』でしょうか」と仰っていました。合宿では出身国に関係なく班の皆で協力し、セミナーの発表や料理など一つのを完成させることで、ウェブ上の会議で話していた時に比べてとても仲良くなれたと思います。仲良くなったということは、少しは分かり合えたのだろうし、互いのいいところを認め合えたのでしょう。一緒にいれば、そして互いが互いの気持ちを考えようと努力すれば、ゆっくりと相手も相手の文化も「分かる」こともできるのではないかと思います。

日韓セミナーを終えて

安念美智子 (0910205)

今回は、韓国の学生と過ごした8日間のうち、私が身をもって感じたボディタッチという交流手段について主に考えたい。とはいうものの、セミナー初日から3日目までは、私はあまり韓国人のスキンシップ（ボディタッチ）の多さを体感することなく過ごした。グループのメンバーからボディタッチをされることもほとんどなく、森山先生から聞いていたような、手をつなぐや肩を組むなどのスキンシップは感じられずにいた。内心私は、なぜ私のグループのメンバーはあまり積極的にボディタッチをしないのか疑問に感じていた。3日間ホームステイをさせてもらい、かなり仲良くなったスミンちゃんからも、それほどのボディタッチはされずにいた。けれども見ていると、韓国人メンバー同士での会話の際は、手をつなぎながら、または肩を組みながら話をしているのだった。また、別れ際もハグをしたり、手を握り合ったりしているのだった。私が日本人だから遠慮されているのではないか、もしくは自分が気付かないうちにバリアをはってしまっているのではないかと思った。けれどもスキンシップをもっととりたいとは思ったものの、普段日本での生活においてスキンシップを減多にしていないため自分からすることに躊躇し、する勇気をなかなか持てずにいた。

セミナー4日目、大きな起点となることが起こった。4日目の夕食のとき、人数が多くてIT・都市グループのみなどと一緒のテーブルに座ることが出来なかった私と、同じグループのセジンちゃんとヘミちゃんの3人は、先生方と同じテーブルで食事をとることになった。そしてそのとき森山先生が、スキンシップやボディタッチについての話題を2人にきりだしたのだ。すると2人は、「して良いのかわからない」と答えた。先生は「普段通りのコミュニケーションを日本人学生にもしてやってくれ。それが日本人学生の学ぶところとなる」と2人に言った。すると2人は、わかったと言った。その一言で、2人の意識が変わったように思えた。そして私も、その「して良いのかわからない」という韓国学生側の正直な気持ちを聞いたことで、私から積極的に相手に向かっていくことの必要性を痛感した。その後はフレンドリーさを意識して、手に触れたりするよう心がけた。すると、あちらも積極的に私に対し、スキンシップ（ボディタッチ）をとってくれるようになった。

ここから私が学んだことは、受動的ではダメだということ、相手にたくさん望む前に自分から向かっていくことの必要性だった。加えて、何かきっかけとなる出来事を持つこと（今回では、森山先生の発言）が大事だということだ。文化が違う国同士での、相互理解を経験することも出来た。

日韓のコミュニケーションスタイルの違いと学び

相澤紀衣 (0910101)

私はこの韓国実習を通して人と人の距離の近さにたいへん感動し、また驚きました。その距離は物理的な距離でもありますし、精神的な距離でもあります。物理的な距離の近さが精神的な距離の近さを生み出しているのかもしれないとも思いました。

私は当初8日間も韓国に実習に行くことに期待と不安が入り混じった気持ちでいました。なぜなら私はとても人に打ち解けるのに時間がかかり、自分からアプローチすることが苦手だからです。初めて韓国の学生と会った時も、どうしたら良いのか分からず緊張の連続でした。その証拠に韓国と日本の両方の学生が書いてくれた寄せ書きには「静かな人だと思ったけれど」という一言が必ず入っていました。しかしながら、韓国の学生の一人と話すうちに本来の自分を出すことができるようになりました。すると皆さんがとても人懐こく話しかけてくれていることにも気付きました。素直で、明るく、親切的な韓国の学生の人柄にとても惹かれていく自分がいました。森山先生がおっしゃっていたように、韓国の人はみんな温かいと実感しました。

私はこれまで、自分だけがとてもシャイであると思っていましたが他の日本人の様子を見ると、日本人全員が基本的にシャイであることに気付きました。また、他人と友達に明確な違いを設けていると思いました。知り合いは他人に含まれ、知り合いと友達の間には明確な差異化が図られていると思います。つまり、自分とその周り以外に無関心という態度です。また、無関心の中でも「本当は関わりを持ちたいのだけれど、拒絶されることが怖いので無関心を装ってしまう」という人が日本人の中には多いと思いました。日本人の「同一を好む」文化が、近年の社会の変化に伴って「変化や突出を嫌う」文化として日本人に還元され、日本社会を生きにくい世の中にしていっていると感じました。韓国はボディタッチが多い文化ですが、私はそれもまた人と人の距離を縮める上でとても良い文化だと思います。

私たちは物理的にも精神的にも人と触れ合うことを恐れない、韓国のコミュニケーションのあり方を学ぶべきだと思います。少なくとも私にとってはとても心地よい距離感であり、日本でいるときの孤独感や寂しさはこの日本独特の距離感から生まれるのではないかとすら思いました。私は今後、韓国で感動した人と人の距離の近い関係を作れるよう、日本でも実践していきたいです。そして表面的な付き合いではなくてお互いを思い合えるような関係をたくさんの方で作っていきけるよう精進していこうと思います。

日韓のコミュニケーションスタイル

安藤瞳 (0910103)

韓国で最も印象的なのは、温かいコミュニケーションだった。日本との違い、そしてそれにより派生する事柄と課題を考えた。

韓国でのコミュニケーションは、まず一つ目に人と人との距離が近い。自然と肩に手を乗せたり、手をつないだり、腕を組んだりする。人と触れることに日本より抵抗が薄いようだ。日本では人とあまり触れないようにするし、パーソナルスペースというものを参照すると、だいたいそれに沿っていると考えられる。

これは、誰かと仲が良い、ということや、心を許している、ということが無言のうちに伝えられると思う。韓国では、実際はそう思っていない場合もあるのかもしれないが、見ただけで、人との心の距離が分かるように思った。今回、私は、人には気持ちや考えは伝わるように伝えなければ、分かってもらえないのだということを感じた。だから、この目に見える距離や触れ合いは、気持ちを許しているという安心感になったし、さらに心を開かせてくれるものだった。

一方、例えば日本人は人と触れることが珍しいため、電車などで人にぶつかったり、触れただけで謝ることが多い。しかし、韓国の地下鉄で感じたのは、ぶつかっても知らぬ顔で通り過ぎていく人の多さである。きっと、人と触れたことに特別に思うことがないのだろうと思うが、一つの面では受け入れやすく、また違う面では受け入れがたいという文化の違いを実感し、何でも実際に体験してみれば馴染めるとは言い切れないことも学んだ。

また、謝るということについて、日本では物をとってもらったり、どんなときにもすぐありがとうと言い、ちょっと手を借りたり、邪魔になるところにいたりしたときにはごめんねという。しかし、「なんでごめんねなの？そんなこと言わなくて良いのに。」と言われることが非常に多かった。遠慮なのかと思い、あまり気にしなかったが、最後まで言われ続けたことで、これは文化的な差なのだとすることに気がついた。誰かに教わったのではなく、制度の差でもなく、人との関わりで見つけた違いはそれが始めてだったように思う。自分で分からない場所でも手探りでもコミュニケーションしてみることを、ここで得られたと感じた。

実習に行く前、私は韓国のコミュニケーションスタイルに慣れることができるかととても不安だった。違う文化は、根本的に違う考え方を生むとも思っていた。しかし、実際には目に見えていたコミュニケーションのスタイルには意味があるのを感じ、チャレンジを拒否しないことが大事だったと思った。また、韓国の人たちが日本の文化を理解しようとし、実践してくれたことで、日本の文化は韓国で否定されるわけではないことも感じられた。

伝えることの大切さ

八波理奈 (0712404)

今回の実習の準備、調査、発表やレポートなどを通じて、数えきれない程の日韓の違いや類似点を沢山学ぶ事が出来ました。焼き肉1つの食べ方からもカルチャーショックを受けたほどでした。しかし、その中でも特に一番心に残った事があります。それは「言葉」です。

親の都合上、私は幼少期に海外の人達と接する機会が多かった為、言葉が通じない事があっても仕方がない事だ、表現の限界があるのは当たり前だと思っていました。しかし今回の実習に参加した事で、今までの自分の考えを改めるきっかけとなりました。

韓国に行った際、日本の学生も韓国の学生も、相手が理解できる、自分が知っている数少ない語彙で思いを伝えなくてはいけない状況下にいました。従って、言い間違えや捉え違いなどは、お互い全く気になりませんでした。むしろ、そんな事関係無しに、なんとか相手の気持ちを汲み取ろうとお互い必死に努力して、考えながら話していました。

その時に、実習の準備で日本人側で話合っている際に、何度かテーマを巡って意見のすれ違いが起きた事をふと思い出しました。

「何故同じ言葉を話す日本人同士が分かりあえないのだろうか・・・？」

その時は、日本人同士の些細な言葉にいらだってばかりいた自分がいました。距離が近ければ近いほど思い通りにならないことにいらいらし、「なぜ言葉が通じるのに、伝わらないの？なぜこんなにも、いらいらするの？」・・・といつも歯痒さを感じていました。

今回の実習を通じて、漠然ではありますが、その答えが分かった気がしました。伝わらないのは、言葉に頼りすぎて相手の言いたいことを読み取ろうとしていなかったからだという事です。

本当は何が言いたいのか、何を伝えたいのか、一步踏み込んで考えてみる。当たり前の事かもしれませんが、これが決定的に私には欠けていました。私だけでなく、日本人皆に欠けていた事かもしれません。相手に伝えたい、でも伝わらない、でも伝えなきゃ・・・と、一方通行になってしまっていたのです。

韓国と日本の学生同士で話すときは、どんなことを言いたいのか、挙動をよく観察しながら、一言も聞き漏らさないように一生懸命相手の言葉を両者ともに聴いていました。それに対し、日本人同士になると、何にも考えずに言葉を右から左に流してしまい、頭の一部にひっかかった単語だけ拾ってどうでもいい事ばかりを言ってしまっていました。これでは伝わる訳がないのは明確です。

毎回一生懸命耳を傾けていたら疲れてしまいますが、本当に大切な人と話す際には、これを怠ってはいけないという事を改めて実感しました。

相手に伝えるために話すのに言葉尻だけ捕らえてしまっているのは、何のために話しているのかわからなくなってしまいます。

これからは、「伝える」為に頭の中の思いをきちんと言葉にすることから始めていきたいと思います。しかし、言葉だけでは一方通行になってしまい意味がない為、その足りない部分を補う為にも相手の言葉の真意に一步踏み込んで考える事を意識していきたいと思います。

今回の実習を通して、「言葉」を「伝える」大切さを改めて実感したと同時に、それを学生のうちに経験をする事が出来て良かったと真に感じます。残り少ない学生生活を有意義に過ごす為にも、この実習で学んだ経験を忘れずに活かしていきたいと思います。

日韓の他人への気遣いの違い

南坂葵 (0910437)

今回の日韓国際交流セミナーで様々なことを体験し、学び、感じることができました。その中でも特に感じたのが、先生が事前授業でも仰っていた、他人への気遣い方の違いでした。私自身どちらかというと他人と少し距離を置く人見知りタイプであったため、セミナーの最初の日、たった1週間で仲良くなれるのだろうかと少し不安でした。しかし、セミナー後半に、気づいてみると、日本の仲の良い友達もしくはそれ以上に話をしたりふざけ合ったりしている自分にふと気付きました。この短い期間に距離を縮めることができた理由として考えられるのが、韓国側の私たちへの気遣いや接し方であるのではないかと考えました。

まず、最初とても驚いたのが、最初に会った日、食事を済ませた後各自解散したときに日本側のトランクを引きずっているのが韓国側であったということです。もし逆の立場であったなら荷物運びを手伝いはしたと思いますが、ほぼ無理やり取り上げたといっているような行動はとらないのではないかと思います。日本側からすれば、すこし有難迷惑ではなかったのかと感じます。そしてもう一つ違いを感じたのが、各自日本側にずっと話し掛けてくるということです。日本では初対面の場合、相手の出方をうかがいながら少しずつ、話が途切れないように配慮しながら会話を進めていくものだと思います。ですが初日から色々な人に嵐のように話しかけられたのでとても驚きました。しかし、この驚きは悪い物ではなく、寧ろ私にとっては新鮮な楽しさといった感じでした。

そして次に感じたのが申し訳なさでした。韓国側の私たちグループの日本側と比べ物にならないほどの徹底した事前調査や、日本語学科であるとはいえ常に私たちと日本語で会話していること、そして会話の端々から、何事においても日本側が困らないように配慮してくれているのがこれらの行動と伴にひしひしと感じられました。

そして迎えた最終日では、皆の涙の嵐。私は何とか涙はこらえたもののとても胸の奥が熱くなりました。

今回の研修を通して、日韓の他人に対する気遣いの現れ方が少し違うことを肌身を持って体験することができました。しかし、それと同時に感じたのが、現れ方は違うけれど、思いやりの心は日本人と良く似ているのではないかと思います。多文化交流をすることでどうしても「日本人は消極的すぎる」や「人と距離を置く」など日本の悪い所に目が行きがちですが、そうではなく逆に、日本独自の良い点を改めて発見する機会にすべきであると考えました。

日韓の大学生間の学習意欲の違い

友田 椋子 (0910245)

1週間韓国の同年代の女子大生と生活をともにして、一番衝撃を受けたことはなんといっても彼女たちの日本語能力の高さであった。語学学習に対して熱心なのだと思っていたが、それだけではなく、彼女たちは何に対しても本気の姿勢で臨んでいた。妥協という言葉が自分の辞書にないように思えた。私は自分も含め現代の日本の大学生は如何にして楽な道をたどりよい結果を得ることができるか、という考えの下に生活しているように思える。たった飛行機で2時間の近い距離に暮らし、お互いの文化の往来も激しく影響しあっているはずの私たち両国において、なぜこんなにも一生懸命さが違うのだろうかと思議に思う。

たとえば自分が英語圏の国へ行き、日本語をほとんど知らない現地の学生たちと1週間一緒に生活することになったらと考えると、彼女たちの凄さがわかる。私は途中彼女たちの母国語が韓国語だということを忘れてしまう場面が何度かあった。単語力もそうだが、発音や私たちのグループが若者文化だからかもしれないが若者言葉の使い方も何も不自然でない。自分がその立場になったとき、流暢な発音でとっさに会話に参戦できるだろうか、ネイティブに違和感を感じさせない会話ができるということは非常にレベルの高いものだ。

日本語は大学に入ってから習い始めたメンバーが多かった。この短期間でどうやってそこまで上達したのか、それは発音や文法などいくつか日本語と韓国語に類似点が存在するからかもしれないが、ほかの語学にも通ずるものがあるだろうと思う。なかにはワーキングホリデーで1年間日本に住んでいたことのあるメンバーがいたり、日本のドラマを欠かさずチェックして主題歌も完璧に歌えたりと、自分から日本語に対して積極的に何かアクションを起こしている。ドラマの中で聞き取れない言葉を私にいくつも訊ねるなどもしていた。

学習面ではとても熱心で自分の目標に対してアグレッシブだが、彼女たちの素敵なところはスイッチのオンオフがしっかりできることだと思う。実習中も、発表準備の段階では意見の相違や見解の食い違いなど討論を活発にしていたが、それ以外のときは、個人的にチャットで話しかけてくれたりするなど、とても人懐こく接してくれ、清々しいけど和やかな空気を持っているという印象を受けた。

この性格はどこから来るのか。私は8日間ずっと考えていた。なんでこんなにノリがよくて個人的で面白い人たちが集まっているんだ、と不思議でしよがなかったのと、自分も彼女たちのように確立して「自分らしさ」に忠実にありたい、と想っていたからである。韓国人の20歳前後の女性のアイデンティティはどのような要素があって形成されるのか。

何が影響しているのか。自分なりに考えるために滞在中に韓国の特徴を自分で考えてみた。歴史・食べ物・メディア・宗教…さまざまな要素があげられる中で、日本の文化も大きく影響している。映画やファッションなどのサブカルチャーはとりわけわかりやすい分野として挙げられるが、他文化である日本の影響を大きく受ける彼女たちが性格までも感化されずに自分たちのアイデンティティを保っているのは、彼女たちが自分たちの文化や伝統を誇りに思って大事にしているからなのではないだろうか。自分の暮らしの根底にあるのは自文化であり、その土台の上にさまざまな環境が乗っかって出来上がるのが自分の人格だと私は思う。その土台の部分彼女たちはしっかり持てているから、芯の通った印象をもたれるのではないか。

同徳女子大の学生はお茶大生にない親しみやすさや明るさ、お茶目な一面と真剣なときの集中力や協調性、自ら発言する積極性の一面を兼ね備えていて、それはどちらも私たちが持たねばならないものであると私は思っている。同じ時代に生きる同じ年代の女性であるから余計そう感じてしまう。彼女たちが持つこの2つの側面は、グローバル化する社会の中で活躍したいと思うならば持っていなければ生き残るには難しい要素だと思う。彼女たちをまねして同じようになればいいというのではなく、自分が大事にしているものは何か、それをはっきりとさせた上で、新しく出会うものや他文化に対して心を広く持ち、相手と自分が win-win の関係になれるような振る舞いをできるようになりたいと思う。

異文化での学び

内藤有咲 (0910141)

私は今回初めて韓国を訪れました。仁川空港でお手洗いにいったときの、紙をトイレに流さない習慣からはじまり、同徳女子大学の学生のみなさんとの交流に至るまで、全てが私の日常とは異なり、はじめはとまどいを覚えることばかりでした。しかし、そんなとまどいもすぐに消え去り、なじむことができました。

韓国の学生のみなさんは、話しやすくノリがよくて、一緒にいるとこちらの気分まで明るくしてくれるような方ばかりでした。初対面でもすぐに打ち解けることが出来、常に楽しい時間を過ごすことができました。

私のホームステイ先は、ご両親が病院にいるとのことで、滞在させていただいた時は同徳の学生さんとその弟さんの2人暮らしでした。そんな大変な時期に、しかも韓国語がほとんどわからない私を受け入れていただき、そしてもてなしていただいて感激しました。学生さんと弟さんはとても仲が良く、たくさん会話しているし、夜は一緒にお散歩にいたりして、友達同士でもそうですが、家族内でも、人と人の距離が近い気がしました。私はあまりそういう体験をしたことがないので、あたたかい家族の雰囲気に混ぜていただいてとても嬉しかったです。弟さんはほとんど日本語がわからない、かつ私も韓国語がわからなかったのも、一緒に話すのは難しいかなと思っていましたが、学生さんに通訳してもらったり、日本から持っていった「旅の指さし会話帳」(かなり様々な情報が載っていたのでいろんな話題ができました)を使って通訳なしで話してみたりして、楽しくコミュニケーションを取ることができました。

日が経つにつれて、韓国のメンバー同士が韓国語で会話していた時、韓国語そのものの意味はわからないけれど、何を言っているかは何となくわかるようになりました。言葉ではなく、心が通うって、こういうことなのかもしれないなあと思いました。普段の私は人や物事にそれほど感情を入れ込む方でもないけれど、今回韓国へ行って見て、人と人との繋がりがって良いなあと感じました。

帰国後も、MSNで、何人かでチャットをしたり、映像電話で明け方まで話し込んだり、交流が続いています。韓国メンバーのうちの1人は、来年ワーキングホリデーで日本に来る予定で、残りのメンバーも冬に日本へ旅行する計画を立てているそうです。私も、後期は時間割の関係上、毎週4連休となりそうなのでそれを利用し、11月か12月に再び韓国を訪れ、メンバーと再会しようと考えています。

セミナーを終えて

中島紗織 (0910143)

1. 実習参加の動機

高校3年生の頃から、韓国のドラマにはまり、韓国に興味を持った。行ってみたいとは思っていたが、旅行という形では現地の人と触れ合うことはなかなかできないだろうし、食事や買い物に終始してしまうのではという考えからチャレンジできずにいた。グローバル文化学環に進学したところ、実習で今年韓国に行くことができ、しかも前期から同徳女子大学の学生とチャットやスカイプで交流が図ることができると知り、自分が望むかたちで韓国に行くチャンスだ、と思い、参加を決めた。

2. グループの決定

はじめ私は、平和問題について考えるグループにしようかと悩んだが、韓国に興味を持ったのはもともと韓国のドラマや映画だったため、若者文化のグループに参加することにした。ドラマの中でたくさんの韓国の俳優・女優を見ながら、すごくきれいだが、日本の俳優・女優とは異なるファッションスタイルだと感じ、ファッションがグローバル化する中、この小さいながらも明らかに感じられる差異は何が関係しているのか、同徳女子大学の学生と意見交換を交わせればと思った。

3. 事前交流

授業内やグループ内で決めた曜日ごとにチャットやメールを使って交流を深め、意見交換を重ねた。お互いの主張がうまく通じ合わなかったり、なかなかお互い譲れない部分があったりと、何度となく先生の力も借りながら、テーマを決めた。途中メンバー内で連絡がとれないこともあったようで、決して順調とは言えないものだったが、それでも、顔を合わせたこともない韓国側の学生の配慮を感じたり、日本側の頼もしいメンバーと支え合いながら実習を迎えた。

4. 韓国実習

思った以上に韓国語を身に着けられることなく迎えたため、ホームステイを中心にとつともなく大きな不安を抱えながら飛行機に乗った。グループの友人に、早く最終日のホテル泊の日になってほしいと散々泣きつきながら韓国に到着した。しかし、韓国側の学生に会い、食事をともにしながら他愛もない話をしていっていると、今までの不安が嘘のように消えていくのを感じた。お互いの日本語を熱心に聞き、話し、初対面の学生とまで恋愛の話で盛り上がった。ホームステイ先でもご家族が歓迎してくれ、その日に撮った写真を家族で見たりマッコリを飲んだり日本のドラマを見たりボディランゲージを駆使しつつ通訳してもらいながら、たくさんお話をした。合宿へ行く朝は、お母さんが本当に寂しそうな顔をして、合宿後も会えると思っていた、次韓国に来る時も我が家に泊まってね、と言って送

り出してくれ、本当に感激した。毎日昼間顔を合わせていたグループの学生と、今度は合宿で1日中ずっと過ごすことになり、様々な違いなどからぎくしゃくしたりしないかと不安でたまらなかったが、分かり合えて当たり前、というスタンスでなく、きっと分かり合えるからしっかり聞こう・言おうというスタンスで臨んだおかげか、毎日本当に楽しく快適に過ごせた。別れがあまりにあつという間に感じられ、心から寂しかったが、これが最後の訳がない！と思い、泣き笑顔でおそろいのストラップを身に着け東京に帰った。

5. 帰国して

改めて日本の良さを感じた。もちろん韓国もすごく良かったが、改めて自分の住み慣れた国や家、聞きなれた言葉に安心感を覚えた。1週間という長いようであつという間の実習を終えて、緊張がとけたせいか体調を崩した日本側の友人も多かったようだが、私は特にそういったこともなく、ホスト先の学生と過ごした朝を恋しく思いながら過ごした。前期の授業のうちから、先生の話から積極的に触れ合っていく韓国の交流スタイルに、不慣れなため戸惑うのではないかと不安だったが、世話好きで親切で本当にあたたかい人ばかりだったなあとしみじみ思った。また絶対韓国へ行きたいと思う。その際は、また同じホームステイ先に泊めてもらおうつもりだ。今回この実習に参加して心からよかったと思う。

日韓の若者の自己表出

七枝智美 (0910252)

自己を表現するにあたり、わたしたちは様々な方法を用いる。若者は主に、自分を着飾るファッションやヘアメイク、そして独自のホームページやブログなどで自分の思いを綴ることで、己という存在を表出する。これは今回、わたしのグループの研究内容と類似するのだが、更に7日間韓国の学生と共に過ごした中で直に感じ取ったことを含め、論じてみたいと思う。

まず、外的自己を表現するにあたり、若者にとって欠かせないのがファッションである。実際に韓国の街に出てみて思ったのが、ほぼ、日本の若い女性の服装と変わらないということだった。ZARA や FOREVER21、そして UNIQLO までもが進出しているから、流行に差がないのは当然といえば当然である。しかしそういった流行が類似しているとはいえ、日韓の若者の好みは若干異なる。日本の若い女性は、可愛らしい可憐な服装を好む傾向があり、韓国の若い女性は、格好良く美しい服装を好む傾向があるように思える。もちろんこれに例外はあるが、それは J-POP や K-POP のアイドルグループを見てみてもこれに似た傾向が見られる。

次に、内的自己を表現するにあたり、若者の間で主流となっているのがインターネットである。日韓ともに似たようなコミュニティ中心の SNS があり、これを利用して皆思い思いに呟いたり、写真を載せたりしている。日本の若者がそういったネット上での繋がりを大切にしているのと同様、韓国の若者もネット上での交流を重視しているようだ。インターネットで自分のホームページなどを作って、自分という人間を表現したりする。

そして、実際に韓国の学生と共に過ごしてみて感じたことだが、やはり韓国の学生は自己開示をより積極的に行っていたように思う。自分の好みや関心をありのままに伝えてくれ、そしてわたしたちの好みや関心を問う。日本の学生が消極的だったとまでは言わないが、韓国の学生の方がより積極的だったように感じた。しかし互いに思ったことを素直に伝えることができ、短期間ではあったが、自分がどのような人間であるかを伝え、また相手がどのような人間であるかを理解することが多少なりともできたように思う。

自己を表現するにあたり、日韓に大きな差はないように感じられた。見た目も相違なく、また自分らしさを表出するためにインターネットの活用は欠かせない。ただし、自己開示は韓国の方が積極的であり、オープンである。相手を理解し、より深く交流していくにあたり、どれだけ自己を表出できるかで、大きく違いがあると思う。韓国の学生との交流を通して、その重要さを実感した。

日本人の遠慮と韓国人の「ケンチャッナヨ」

孫桑桑 (0810289)

今回の日韓セミナーを参加して、いろいろな経験と思い出が得られました。そして、日本との文化の違い、個性の違いも相当感じられました。その中で、私が一番深く感じたのは、日本人の遠慮する性格と韓国人の何に対しても「ケンチャッナヨ」って言ってくれる性格でした。

まず、呼び方からびっくりしました。日本では、普通に相手の名前その後ろに「さん」をつけて、学校も会社も、家族以外の誰に対しても、このような丁寧な呼び方を使っています。だが、韓国の友たちにあったときから、年を聞いたら、すぐに「おんに」と呼ばれていました。なんで親しい呼び方だろうと思いました。日本の丁寧だけど、距離感も感じる呼び方になれていたため、韓国式の呼び方にまだ耳慣れない状態でした。そして、親しくなったときから、呼び方がまた変わりました。今回は「無視してもいいおんに」、「寝るのが早いおんに」とか、日本では絶対あり得ないほどの呼び方をつけてくれました。笑う一方で、こんな呼び方をして怒られたらどうするのと聞いてみたところ、いつも通り、「ケンチャッナヨ」って答えてくれました。

そして、食事をするときにも、相手のコップを平気に使ったり、料理を人数分に分けるのではなく、皆同じ皿のなかで取っていたりなど、日本では家族以外には見られない風景を目にしました。日本の場合には、例えば友達と一緒にご飯を食べるときにも、相手のコップを使わない、料理をスプーンで分ける、最後の一口をあえて食べないなど、そんな風に遠慮しています。だが、韓国人はそう思っていないようで、友達なら同じ皿から取るのは当たり前で、相手のコップを使うことも「ケンチャッナヨ」ってまた言われました。最初に感じた衝撃は徐々に温かいものになって、心の中にとけ込んでいきました。

また、町中に歩いているとき、人の肩にぶつかったら、日本ではすぐに謝りますが、韓国では向こうから「ケンチャッナヨ」と言われました。韓国の友達に謝らなくてもいいのかと聞いたら、また「ケンチャッナヨ」と言われました。

韓国にいる時間は一週間でした。わずかな時間だけど、韓国人の「ケンチャッナヨ」のおかげで、大変楽しい時間を過ごしました。もう一度日本の遠慮する社会に戻ってきたけど、何が足りないとよく感じています。人生のなかで、たまには、遠慮するよりも「ケンチャッナヨ」と思うことも悪くないと私は思います。

韓国の友人関係についての発見

山本佳南子 (0810283)

今回のセミナーに参加し私がもっとも驚き興味をそそられたのは、韓国の人たちの「友人との距離の近さ」である。その中には、親しき仲にも礼儀あり、と考える私たち日本人にとっては失礼にあたるのではないかと感じ、遠慮してしまうようなこともあったので挙げてみたい。

まず、友人とごはんを分け合うことについて、日本では友人からごはんやお菓子を分けてもらうとき相手が申し出てくれるのを待つか、「一口いい？」と決まって言うものである。それに比べて韓国ではみなが自分のものを分けてあげる、代わりに自分も人のものを分けてもらうといった文化があるように感じた。私自身そのことを理解するのに時間がかかり、「あなたのために買ったのではないのに、ほとんど食べられてしまった」と残念に思うことが多々あった。

次に、共同生活についてである。今回のセミナーでは韓国人学生とともに3泊4日の合宿を行い、同じ部屋で過ごした。私の経験上日本人同士の共同生活では、各自が自分のテリトリーを決め、他の人のところには入っていかないといった印象がある。それに比べ韓国では、同じ部屋なのだから自分の自由にスペースを使っていっていいと考えられているように感じた。このことについても、私は「私の寝るところなのだから、その上を気にせず歩いたり寝転がったりしないでほしい」と感じてしまっていた。

しかし逆に韓国ではお互い思ったように行動でき、いい意味で相手に気を遣わないで生活できているのかもしれないと考えた。いわば「自分が自由にやらせてもらう代わりに、相手が自由にやることも認めている」ように感じた。逆に日本ではお互いがある程度お互いに気を遣うことで一定以上の邪魔はせず、秩序が保たれているといったように感じる。

今回のセミナーでも後半にさしかかると、こういった韓国の文化にも慣れ、最初は嫌だと思っていた韓国の文化も「相手と自分の両方が気持ちよく生きていくための方法」なのだなど自分なりに理解し、韓国人学生とも打ち解けられたと感じている。

こういったことを踏まえ、日本と韓国、どちらの文化がいいとは決して言えないが、育ってきた環境によってその人のものの考え方がかなりの割合で決まるのだな、と改めて感じた。さらに私がこのような韓国の友人関係の在り方を「理解」することは今回できたと思っているが、それを「実践」に移すには時間がかかると感じ、多文化「理解」の上にも共感・受容・実践などさまざまなレベルがあるとすれば、お互いのことを尊重し合って生きていくということは本当にお互いの努力があってこそできるのだなと考えた。

日韓交流実習 個人レポート

富沢友里 (0910140)

今回の実習は私にとって、韓国へ行く初めての機会でした。実際に行ってみるまでは、なんとなく日本と似たような文化を持っているのだろうと思い込んでいました。なぜなら、日本も韓国も中国の影響を受けていることが伝統的な服や言語などに表れていると聞いていたからです。しかし、実際はまったく異なる点が多く、驚くことばかりでした。

特に韓国の「ケンチャナヨ精神」には驚かされる事が多くありました。時間を守ることにに関して、日本人は5分前行動などと言われるように厳しい方だと思いますが、韓国人は「みんな絶対まだ来てないから大丈夫」などと言ってゆるい方だということを初めて知りました。また料理では、出てくる魚は丸ごとかぶつ切りかしかないこと、サラダのような生野菜を食べることあまりないことなどにも驚きました。「生野菜は食べないの?」と聞いたところ、「キムチがあるじゃないか」と答えられた時は班のメンバー全員びっくりしてしまいました。生野菜と言うとサラダとかそういうもので、漬けたものはあまり生野菜という感覚ではなかったからです。髪型にしても韓国人はとてもゆるく、日本ではおばさんっぽく感じてしまうような結び方をされていて、不思議に思っていました。韓国でそういうゆるい結び方が何年か前にはやったそうです。韓国と日本はファッションやメイクなども似ているイメージだったので、日本でよく見かけるふわふわのお団子頭などを全く知らなかったりと以外にも差異が大きく驚きました。

家ででの生活では、弟さんが最初の挨拶からジョークをいって来たり、お母さんが韓国語を教えてくれたり本当にフレンドリーでした。しかし、弟さんは朝早くから夜遅くまで学校に行っていて、お母さんも夜12時過ぎまで働いているという忙しい一家で、韓国の家庭がみんなそうだとは限らないと思いますが、衝撃的でした。そんな忙しい中でも、私にご飯を作ってくれたり、韓国語を教えてくれたり、プレゼントを買いに行ってくれたり、いろいろなことをしてくれました。森山先生もおっしゃっていたように本当に情に厚い民族なんだなあと感じることができました。とても感謝しています。これからも連絡を取り続けていき、また日本や韓国で会いたいと思います。

最後に、今回私はパスポートを忘れるという失態を犯してしまい、とても迷惑をかけてしまいました。それなのに、パートナーの子は長い時間待たせてしまったのに「来てくれてありがとう」と言ってくれ、皆さんからは寄付金を頂き、旅行会社の方はお仕事の話を教えていただき、先生やTAの方にもいろいろな手続きをしていただき、感謝しています。本当に皆さんのおかげで行って来れた実習だったなと強く感じます。ありがとうございました。この経験を、実習という形だけではなく、今後に生かしていきたいと思っています。

日韓セミナー参加レポート

小松映里佳 (0812207)

今回日韓セミナーに参加する事が出来て本当によかったと感じています。韓国という国で日常を送る韓国女子大生の生活に直接触れ、日常を共有できたこと、それによってただ本で読み日本で交流するだけでは得られない衝撃を得られたこと、教育現場を訪問することで違和感を感じ、同時に自分の国の教育に対する理解も深まったこと、など具体的な項目を挙げるときりがありません。その中で特に考えることの多かった項目2点を挙げたいと思います。

まず、一週間を通して、韓国という国の異文化度合に驚かされました。というのは、以前の観光旅行や韓国人友人との交流の中で、韓国という国は儒教思想の重さこそ違えど、日本と殆ど同じ雰囲気を持つ国だと思っていたからです。

観光客には見えない習慣と生活スタイルが私を戸惑わせました。具体例を1つあげると、食事マナーがあります。誰かの頼んだものを平気で周りの人が食べきってしまうこと、更には料理体験時、完成品の大なべに大勢がスプーンを持って群がり、使ったスプーンでまた大なべをかき混ぜていたことなどなど・・・私には一見だらしなさとしか映らず、ショックが大きかったのが現実です。しかし、そのシーンだけを切り取ってしまえば自分の中にある判断基準からショックを受けたままだったと思いますが、共同生活を送る中で彼女たちの中にある「共有」の精神の素晴らしさとして私の中に残りました。一人ひとりの感覚ではなく、みんなでみんなを助ける、これはみんなのもの、といったような家族意識が根底にあったと感じています。

今回は違いはあれども似たようなものだろう、という想像があったからこそ些細なことの衝撃が大きかったという結論ですが、今後様々な国の文化と交流する中で、自分の中でどうしても「生理的に無理だ」という習慣に立ち会うことがあるはずです。そのようなときに「受け入れるんだ、我慢するんだ」と強く無理をしてしまうことよりも、「申し訳ないけれど、これは私にはできない」とはっきりと伝えて素直に楽しむことが重要なのではと考えています。そのためにも、「どうすれば相手に失礼なく自分の考えと判断を伝えられるのか」が非常に重要な問題です。今回、教育に関するお互いの意見の違いを纏めるときにもこの問題を強く感じました。気を使って自分の判断を妥協することなく、しかし失礼にならないように目的を達成するための手段としての方法について、異文化という現場から考えることができました。

次にもう一点私が驚いたことは、韓国の若者の多くが南北統一を望んでいないという現実でした。報道機関から伝えられた情報なのか教科書からの情報かわかりませんが、私の中には南北統一を殆どの国民が望んでいるというイメージができあがっていました。統一

時代を知らない若者にとっては、単なる隣国であり「私たちまで貧乏になりたくない」という意見はもっともです。この問題を考えるときに私たち当事者外の人間は無理に歴史を全てひっくり返して複雑にしてややこしくしていたのでは、といった疑問が浮かびました。森山先生のおっしゃっていた「日本の身代わりとなって分断されてしまったといえる悲劇」はもっともであると感じるとともに、これからの私たちの世代はまっさらな気持ちでこれからの問題に向き合っていけるのではと感じます。もちろん戦争問題が関係するようであれば真剣に向き合う必要があります。しかし戦争をしていない私たちが友好関係を結び、これからの問題に共に取り組む時に、過去は関係ないのではと38度線を通して考えました。

今回このような貴重な機会を与えてくださった先生方に感謝するとともに、今後の活動に生かせるよう理解を深めたいと思います。ありがとうございました。

韓国と日本の未来

大石絵里佳 (0812207)

私は、今回セミナーで統一展望台の訪問を心待ちと言ったらおかしいかもしれないが、行く前から様々な想像を巡らせていた。たとえば、38度線には見張りをしている軍隊が24時間体制でいて、背中には銃をかついでいて・・・というように重苦しいものを考えていた。しかし実際には、38度線に人影を見つけることはできなかった。そして、そもそもの建築目的が南北間の軍事境界線の観光開発の一環であることが分かった。しかし、統一展望台から見る北の景色は、朝鮮戦争によって自分の故郷への帰還ができない人々にとってはどのように映っているのだろうかと思うと胸が苦しくなる。

6・25戦争、朝鮮戦争、朝鮮動乱と呼び方は様々であるが、一般的に日本では朝鮮戦争と習い、韓国では6・25戦争と呼ぶようだ。私は、パートナーの友人から『ブラザーフッド』という韓国映画を見るようにと勧められたので、帰国してからすぐにDVDを借りて見てみた。この映画は、朝鮮戦争が主のテーマで、その背景に家族愛・友情そして兄弟愛が描かれている。私はこの映画を涙を流しながら見ていたのだが、常に頭の中には、同徳女子大学の李先生の言葉があった。「戦時中は、絶対にレイプが起こる。男の人は死ぬ間際になると自分のDNAを後世にそこしたがるからだ。」私自身、女だからかもしれないが、この言葉を聞いたとき衝撃的だった。戦時中の一生残るキズを軍人だけではなく、一般人民までもが背負い、残りの人生も苦しみながら生きている人がいるということ覚えておかなければいけないと思う。アカ狩り、生き抜くための敵陣への参戦。韓国から帰国して、間もなく見たせいか、リアルなシーン描写が一層涙を溢れさせていた。

朝鮮戦争だけでなくとも、戦争はただ歴史に刻まれるだけでなく、消えることのない傷跡を残す。たとえば、第2次世界大戦。日本と韓国においては、日本の植民地していた時代の事柄はいつ白紙になるのか？白紙になどなる日は来ないだろう。まして、そんな日は来てはいけないのだ。日本が韓国にしてきた事実は事実として残さなければならない。しかし、現代を生きる、そしてこれから産まれてくる人たちには、この日本と韓国の歴史を学び、この壁を越えてさらなる親交を深めてほしいと思う。韓国には、おいしい食べ物がたくさんあり、綺麗な海や山、自然があり、伝統文化、そして心優しくユーモアな人々がいる。日本と韓国、政治の問題や歴史における戦争問題など2国間での問題は様々だが、私たちはそれを背景としつつも、心と心での交流ができたと思う。戦争がその時代

だけでなく、後世に生きる人々にまでも強く影響を与えるのだということ、そしてその関係を修復することが困難で複雑であること、まずは私たちがこのことを忘れずに語り継ぐべき事実だといえるだろう。それを、どういった形残していくのかが今後の課題とも言える。

日韓セミナーを終えて

田端はるな (0810142)

今回のセミナーを通して、私が最も考えさせられたことが、「異文化理解」というものでした。日本人／文化と韓国人／文化の交流において、異文化を理解するということの難しさ、大変さ、そしてその重要性を改めて実感させられました。そして、それはこのセミナーの中で私が最も大きな収穫だと考えています。

今回、私が強く印象に残った出来事があります。それは、次のようなものでした。私たちは、日本人だけにいる時に韓国側に対する理解できない点を話したことがありました。そうした、意見は韓国学生に直接話せば良かったのですが、最後までそれは実行されず、とてももやもやしていました。何日間か一緒に過ごす中で、ある日本人学生が韓国人に対する意見でこう言いました。「もっと気付いてほしい。」この一言に私ははっとさせられました。日本人学生たちはなぜ文句を言うのか、そしてそれを伝えようとしめないのか、その理由に気付いたからです。というのは、これは、日本文化の中で美とされる、「察する」というものではないかと考えました。そこから、私たちは、自分の文化である、日本の価値観で、韓国人の言動を捉えているのだと気付いたからです。相手は、同じアジア人で見ても似ているし、言葉も日本語を使ってもらっていたから忘れかけていたけども、異なる文化の上で生活している、あくまでも私たちとは異文化を持つ者です。もちろん、同じ人間ですから、異質な者として扱うのは間違っていると思います。しかし、自分の中にある「普通」に出したサインで「普通」に期待したサインが返ってくるという期待は間違っているのだと気付きました。それゆえ、価値観のズレや日本人同士での「普通」を彼女たちに求めていたのだと知った時に、はっとさせられたのです。大学の授業でさんざん「異文化理解」や「異文化接触の葛藤」について学んできたはずなのに、いざこうして実際に目の当たりにしてみるとなかなか難しいことに気付きます。

個人的な話になりますが、私は、中国に3年間住んでいたことがあります。今回のセミナーでは、その経験を振りかえる良いチャンスにもなりました。というのは、私は学校こそ外国人の友人ができ、異文化理解のチャンスに富むものだったと思います。しかし、基本的な生活場所、行動範囲は、日本文化に守られたものでした。例えば、家族で滞在していたので食べ物は日本食でしたし、日本人が集まる、日本人のために作られたエリアでしか過ごしていませんでした。一方、現地の中国人との触れ合いは本当に少ないものでした。そうしたものを考えると、年長的に仕方ない部分もありますが、もっと異文化に接触して、受容力を高めたり、理解する努力ができたのではないかと反省しました。

セミナーを通して、「異文化理解」ということの意味の深さを、難しさ、を痛感しました。もっと生活の中でダイレクトに異文化に接触する機会があればとも考えました。そういった意味でも今後の自分の方向性を考え、深めるための良い経験になりました。

授業を通して得られたこと、考えられたこと

崔恩智 (0810290)

今年の前期は、3年生になって授業は少し減ってきたが、ゼミやまた専門中心の授業を取りながら、考えを深める時間となった。特に、その中で多文化交流実習の授業では8月の韓国訪問実習を中心として事前準備授業を通して訪問実習を準備し韓国に訪問する授業として行われたが、私も留学生でありながら参加することができた。私は韓国の留学生であるため、韓国に行く実習までは参加できなかったが、皆の実習を手伝う役割で授業に参加することができた。実際に授業でアシストした経験が全然なかったため、自ら積極的にできなかったところもたくさんあるが、先生の助けを受けながらアシストしていく上でいくつかを考えられることができた。私が主に行ったアシストの内容としては、韓国語の勉強の手伝いであった。皆に韓国語の発音や簡単な挨拶や言葉を教える時間が与えられ、何回かの授業に分けて教えるようになった。

韓国語は母国語であるが、公の場所で誰かに韓国語を教えた経験は無く、今回がはじめてであった。外国人として日本語を学んだ経験があり、初めて外国語を接する気持ちはよく分かっていたが、自分の母国語を他の人に教えることは経験が無く母国語に対する知識もあまりないままであった。自然と韓国語を話しているため、当たり前とと思っていたことを法則として説明することが難しく、市販の韓国語の本を参考したり、ネットで調べたりして説明することができた。自分が始めて日本語を接したときを思い出したら、ひらがなとカタカナの発音から初め、基本的な文法の法則を習うことから始まった。そのような文法が当たり前だと思っていて、たまに日本人の友達に質問したとき、日本人の友達は意外と文法としては説明できないときがあったことを思いだし、私も同じように自分の母国語だとしてすぐ教えられるものではなく、教えるための文法や教え方をまた勉強していかなければいけないということを新たに悟ることができたと思う。日本にいる韓国の留学生としてこれからもたくさんの人に出会い、韓国語に対する質問をされるときもあると思う。そのようなときに正しい韓国語を教えることができるように準備しなければならないと思うようになった。

また、自分からより積極的に行わなければならないということを深く感じた。今回の授業では韓国語を教えることと、また韓国との事前学習のやり取りの中で助けられることがあったら助ける役割をしていた。韓国語の場合は時間が決

まっであり、自分なりに準備して教えることができたが、やり取りを助けるときには、まずどのグループが今困っているのかを見て助けるべきだったが、消極的になってしまっって自ら助けることができなっったようなところは反省すべきだと思っった。もちろん韓国側とコミュニケーションをとるため、皆そのコミュニケーションの中で考え方が変わっったり深まっったりしたと思っうが、また、日本にいる留学生として感っじた韓国と日本の違っいや価値観などを積極的に話したら、皆が発表プロジェクトを準備するときより役に立っったのではないかと思っい、今度またこのような機会が与えられたら、より積極的に関自分ができることをすることが大事であると改めて考えるようになった。

また、もう一つ感っじられたのは授業のやりがいであっった。授業が進んでいくうちに、前に立っって韓国語を教えたり、グループを回りながら助けていくうちに自然に皆に顔を覚えてもらっうことができ、授業以外の場所でも挨拶をするなり、短っい会話をすることができるようになり、このようなことが小っさな交流の始めなのではないかと思っって、やりがっいを感じることができた。自分が留学生として日本にいる以上、学校でもまた学校以外の場所でも先にコミュニケーションを始め積極的に行っっていけば、より多くの人と良っいものを分かち合えることができるというこっとも改めて感っじることができた。

短っいといえぱ短っいとも言える4ヵ月あまりの授業を通して、外国の人に自分も母国語を教えるときの難っしさや、またコミュニケーションの中での積極性の大事さをもう一度悟るようになった。この経験をおれからも生かして、より積極的に行っい、助けられることができるようにしていこうと思っうようになった。

日韓セミナー個人レポート

ソルジョン (0812403)

日韓交流の授業で夏韓国に行くみんなに自分の母国語の韓国語を教えていくうちに、自分の知らなかった「한글 (ハングル)」のつくりを知りました。子音が口の中から出る音をたどって成り立っていることや、母音が口の形を元に作られていることが驚きでした。また、本を見ていたら、普段何気なく使用していた単語らの成り立ちなど、母国語にもかかわらず知らないものが多すぎてビックリもさせられました。

以前、英語のTAをしていたので、今回、韓国語を教えるのも要領よく教えられると思っていたが、言語を一から教える難しさを逆に教えられた気がします。ある程度韓国語を知っている人がいたり、全然知らない人がいたりして、レベルの差が大きいのでみんなをひとつにまとめて教えるのが難しかったです。韓国語を教えることは初めてで、時間にも余裕がなく、短時間という時間の中でどれほどやれるか心配でした。

言語を学ぶ上で一番大切なことは、繰り返す復習です。ただ、一方的に教えるのではなく、会話と練習の積み重ねで言語は習得されます。授業のなかだけでは、韓国語だけではなく、他の情報集めやグループワークなども行わなければならなかったもので、初めて教える韓国語は難しいものでした。練習する時間が少なかったのが何よりの心配でした。韓国に行く前に覚えてほしいことが多かったのですが、教えるテクニックもなく順序もわからなかったので手探りで必死でした。

次回また韓国語を教える機会があるなら、もっと丁寧に教えていきたいです。ハングルの書き方や自分の名前の書き方、自己紹介などをただ意味を知らず覚えるだけではなく、理解してスローペースで歌やドラマなどのポップ・カルチャーなどを利用し教えたいと思います。

第7回日韓大学生国際交流セミナーの 意義と今後の方向性 —参加者のアンケートを通して—

西岡麻衣子（同徳女子大学非常勤講師）

1. はじめに

本年度で第7回目を迎える日韓大学生国際交流セミナー(以下セミナー)は、2010年4月に行われた全体遠隔会議に始まり、8月17日から24日まで韓国において開催された8日間の直接交流プログラムを経て、9月のグループ別研究報告書の完成を持って終了した。第7回セミナーの特徴は、以下のような点をあげることができる。

1. 日韓混合グループによる遠隔事前交流および事後交流が積極的に推進された点¹。
2. 全体合同合宿が3泊4日に延長され、共同生活による異文化理解やお互いの関係性を深めるための時間、そして研究討論・発表準備の時間が十分に設定された点。
3. 統一展望台への見学や、「従軍慰安婦」を研究テーマとするグループがあるなど全体として歴史的問題を考える機会が与えられた点。

この他にも、料理体験プログラムが初の試みとして行われたり、韓国側開催としては初めて、プログラムごとに準備や司会をする学生担当が割り当てられるなど、参加者がより積極的かつ主体的に取り組める様々な改善や工夫が見られるものとなっていた。では、そのようなセミナーに両国の学生はどのような思いを抱きながら参加したのであろうか。本稿では、セミナー後に回収した感想文(アンケート)の分析を行い、参加者の気づきや変化を探ることで、セミナーの意義と今後の課題について考えてみたいと思う。

2. アンケートの分析

本稿では、アンケートの項目の中から、「各プログラムの感想」(グループ研究事前準備、ホームステイ、討論・発表、全体合宿、料理体験、全体観光)、「相手文化と自文化に対する気づき」、「セミナー総評」の3つに焦点を当て、分析を行うこととする²。分析にあたっては、感想の多かったものを中心に抽出し分類することで、参加者の気づきや様相を探っていく。また、「セミナー総評」に関しては5段階評価による質問項目³を追加し、各項目

1 MSN メッセンジャー、グーグルメーリングリスト(以下グループML)、スカイプ、フェイスブック等を利用。参考までに、2010年10月現在のグループMLの利用状況は、利用数の多い順から①「IT・都市グループ」メッセージ160件/ファイル103件、②「歴史・平和グループ」メッセージ68件/ファイル23件、③「若者文化グループ」メッセージ57件/ファイル26件、④「女性グループ」メッセージ39件/ファイル13件、⑤「教育グループ」メッセージ12件/ファイル0件となっている。

2 日本側はアンケートを提出した22名、韓国側は18名を対象とする。

3 質問項目は、前年度の報告書の課題を参考に4項目作成された。(①プログラムが参加者の関係性を深めるのに十分なものであったか②担当教師およびTAのサポートは適切であったか③両国の参加者が対等な関係をできるよう配慮されていたか④実習や体験から得られた気づきを振り返る時間が十分に与

の平均値を算出することで、感想文による質的調査の解釈の補助とした。

2.1 セミナーの各プログラムに関して

2.1.1 グループ研究事前準備（遠隔交流）

参加者は4月の全体遠隔会議以降、週1回を基本として、メッセージャーやスカイプなどを通してグループごとに交流し、事前準備に取り組んだ。感想としては、日韓とも「意見調整の難しさ」や「コミュニケーションの難しさ」を述べたものが多く、

- ・意見の調整が大変だった。(日韓)
- ・思い違いやうまく伝わらないことがあって難しかった。(日)
- ・顔の見えないチャットが大変だった。コミュニケーションの問題がありました。(韓)

など、全体会議等の動画で顔合わせは行っていたものの、直接会ったことのない状態で意見を交わし、研究を進めていくことに苦労した様子が窺えた。また、それに並行して、

- ・メンバー同士の時間調整が難しく、進行の共通認識にズレが生じてしまった。(日)
- ・事前準備に積極的ではないメンバーがいて困った。(韓)

など、「協働学習ならではの難しさ」を吐露する声もあがった。その一方で、

- ・事前に交流が深められたため、初めて会ったときすぐに打ち解けられた。(日)
- ・多様な意見を交換して、調査の枠組みや方向性を形作ることができ有意義だった。(韓)

などに代表されるように、その後の直接交流やテーマ研究を円滑に進めるための「遠隔事前交流の意義」を積極的に支持する意見も、両国側で多数見受けられた。他にも、

- ・韓国側はPCに慣れていて、そのITリテラシーと日本語能力に感心した。(日)
- ・日本人とチャットをするのは新鮮でとにかく楽しかった。日本語を活用できて嬉しかった。(韓)
- ・正規の授業でも、こういった遠隔交流を積極的に取り入れてほしい。(韓)

など、日本側からは、PCを利用した遠隔交流ならではの気づきや、韓国側からは遠隔交流が日本語学習の成果を披露する場として機能し、強い動機付けになっていることがわかった。

2.1.2 ホームステイ

訪問側である日本側の主な感想は、「受け入れ家族への感謝」、「生活習慣に関する気づき」、「韓国語学習不足の反省」、「非言語の認識」の4つに大きく分類できた。まず、「受け入れ家族への感謝」では、

- ・初めは不安だったが、外国人である私を温かく迎えてくれて、とても嬉しかった。(日)
- ・本当に自分の娘のようにみてくれて有難かった。最後別れるとき思わず泣けた。(日)

など、ホストファミリーへの感謝の気持ちを述べた感想が多く見受けられた。

2つ目の「生活習慣に関する気づき」では、

- ・生活全体に触れることができたが、日本と似ているなーと感じる面が多かった。(日)
- ・お風呂の文化が違って、使い方がわからず少し戸惑った(日)

など、文化の異同に目が向けられていた。この点に関しては、2.2「相手文化に対する気

えられていたか) 5段階評定は「全くそう思わない:1」「あまりそう思わない:2」「どちらとも言えない:3」「少しそう思う:4」「強くそう思う:5」である。

づき」においてより詳しく見ていくこととする。

また、「韓国語学習不足の反省」と「非言語の認識」では、

- ・挨拶もままならず、もっと韓国語を勉強すればよかったととても後悔した。(日)
- ・ジェスチャーが思った以上に通じて驚いた。(日)

などの感想があり、ホストファミリーと理解し合いたいという思いから言語・非言語操作の重要性に気づき、再認識したようであった。

一方、受け入れ側の韓国側の感想は、下記のように「偏見の除去」、「親しみや友情を感じた」というものが最も多く、

- ・日本人は他人に心を開かないという固定観念を持っていたけど、ホームステイを通して急激に親しくなり、それがなくなったように思います。冷たいというイメージだったけど、情も厚く、同じ年頃の学生として、見習うべき点がたくさんある尊敬すべき友達だと思いました。(韓)

など、国を超えた個人の付き合いができたことが、ステレオタイプや偏見を崩すきっかけとなり、友人関係を構築できた様子が窺えた。また、

- ・パートナーが挨拶や日常会話を覚えようと一生懸命メモしていて、私の家族に話しかけるのを見て感動した。(ホストの) 私が彼女にいろいろしてあげなければならないと思っていたが、むしろを私の心が温かくなった。(韓)

と、日本側の積極的な姿勢に胸を打たれたとの感想も見られ、良好な関係を築くためには、相互の関心度が拮抗していることが重要であり、お互いが思いやりの気持ちで臨むことで、ホームステイを成功に導いたことが推察されるものとなっていた。

2.1.3 討論・発表

日本側は、遠隔事前交流の感想と同様、「意見調整の難しさ」が最も多くあげられた。

- ・なかなかまとまらないし、方向性もバラバラでどこに焦点を置くかも決まらず本当に大変でした。この時が一番文化の違いを感じた気がします。(日)
- ・韓国側が日本語を理解しているときに日本側がバンバン意見をだし、討論を進めてしまった結果、日本側の意見が表に出て、韓国側の意見を共有できなかった。(日)

など、言語の問題や作業の進め方に対する文化差の問題などに直面し、苦労した様子が窺えるものとなっていた。自文化のやりかたが通じないもどかしさや、それを強行してしまったことからくる反省などが伝わってくる。ぜひ、この経験をバネに柔軟性と忍耐力、また多様性を楽しめる複眼的視点を育ててほしいと思う。

一方、上述のように難しさを抱えてながらも「団結力の向上」を述べたものも見られ、

- ・夜まで討論を重ね発表準備に取り組み、団結してグループ内に良い関係を築けた。(日)
- ・団結することで関係が近くなり、より相互の国の文化を理解しようすることができた。(日)

など、共通の目標に向かって、協力して作業を進めたことで絆が深まり、さらにお互いの国の文化理解に真摯に取り組もうと努力した様子が見受けられものとなっていた。

韓国側は「日本語能力の必要性」「意見主張の重要性」「傾聴の重要性」「多様性の認識」「団結力の向上」など多岐に渡る感想が見られた。以下は、その一部である。

- ・日本語で思ったように表現できず、もどかしい思いをした。やはり日本語の勉強が重要！（韓）
- ・文化も言語も違う人との話し合いで、大変だったけど、自分の意見を話し、相手の意見をよく聞く、そのやり取りの過程がとても大切で記憶に残り、忘れられない経験となった。（韓）
- ・これまで日本人は、自分の意見を遠回しに言うという話をよく聞いていたけど、グループのメンバーは、討論でもそれ以外でも、自分の話や意見をはっきり言うほうだったので、私が知っているのとは違う面もあるんだと感じた。（韓）
- ・大変だったけど、皆で一緒にする中で、韓日の友情が深まったのは確かです！（韓）

また、日韓ともに「グループ討論の時間不足」の感想が多数寄せられており、

- ・討論の時間が絶対的に足りなかった。（日）
- ・時間がギリギリで、事前準備の詰めがあらわになり、無理やり結論づけてしまった。（日）
- ・とにかく時間がなかった。チャットであまり進められなかったので、会ってから話すことが多く、グループ討論の時間があと一日でもあったらよかったと思った。そのため、調査した多くの内容を分かち合うことができなくて本当に残念だった。（韓）

など、発表前の討論時間の必要性を訴えるものが多かった。この点に関しては、今後も検討を重ねるべきではあるが、セミナーを追うごとに、合宿の期間を延長するなど、討論や振り返りの時間設定に改善がなされていることを考慮すると、合宿の初日または、事前準備の段階から各グループごとに進行スケジュールを作成させるなどして、時間管理の重要性を説いていく必要もあるのではないかと思う。

2.1.4 全体合宿

全体合宿においては、日韓とも「親しみや友情を感じた」という感想が最も多く、

- ・グループの出し物のためにたくさん笑って練習して楽しかった。夜一緒にお菓子を食べながら話したり、海に行ったりして本当に仲良くなった。文化なんて関係なく思えた。（日）
- ・全体合宿は全てのメンバーと親しくなれる本当に貴重な時間だった。合宿前までは、お互いのことがまだあまりわからなくて少しぎこちなかったけど、合宿を通してコミュニケーションも上手くとれるようになり、関係が近くなったと心から感じる事ができた。（韓）

など、共同生活や共同研究を通して、苦楽を共にすることでお互いの関係性が深まり、友人関係の構築に成功している様子が窺えるものとなっていた。その他、

- ・韓国の子たちがとても気を使ってくれた。（日）
- ・日本人の学生にとっては、同じ布団で寝たりするのは、慣れなくて大変だったけど、そんな素振りも見せないで一緒に行動する姿をみて見習わなければならないと思った。（韓）

など、お互いが思いやりと尊重の姿勢で合宿に臨んでいた様子をよく表している感想も見られた。

2.1.5 料理体験

冒頭で述べたように、料理体験は初の試みとして行われた新プログラムであったが、日韓ともに好評で「楽しかった」「達成感を感じた」という感想が多く寄せられた。

- ・始めは一緒に作るなんて、人数が多いからサボる人もいるだろうし、ダラダラかなと思ったけど

皆で協力して作ることができて、自主的に動いて楽しくおいしいご飯ができてよかった。(日)

- ・私たちのグループはキンパップだったが、ご飯がうまく炊けなかったり、上手く巻けなかったりという失敗があった。でも、そのおかげでより韓日が協力して、笑いの絶えない真の共同作業となるいい体験だった。(韓)

- ・一緒に作ったという達成感があった。(日韓)

今後、調理器具の整備や、ごみの処理や片づけの指示の明確化などの改善を重ねながら、プログラムとして定着することが期待されるものとなった。

2.1.6 全体観光

日韓ともに雪嶽山とナクサン寺の観光では、「景色の素晴らしさ」が多数あげられ、統一展望台では「戦争について考えた」との感想がほとんどを占めていた。

- ・雪嶽山の景色が最高だった。(日)
- ・ナクサン寺から見た海がとても綺麗で写真を撮をたくさん撮りました。(韓)
- ・統一展望台や博物館はやっぱり衝撃的で、朝鮮戦争と冷戦の関係は知っていたが、さらにそこに日本が深くかかわってくることは知らなかった。言われてみれば、なんで気づかなかったんだろうというくらい当たり前のことで、自分にびっくりした。(日)
- ・統一展望台の朝鮮戦争博物館では、私たち韓国側の皆にもそして日本の皆にも、大きな気づきを与えたように感じた。(韓)

特に、日本側にとって、統一展望台は日本と朝鮮戦争の関係、戦争責任について考える貴重な機会となったようである。一方、韓国側は、「日本人と共に訪れる」ことに大きな意味を見出していたことが筆者の観察からも見られ、各々の場所で、韓国への理解を深めてもらおうと懸命に説明している姿がとても印象的であった。

2.2 相手文化と自文化に対する気づきに関して

日韓ともに、合宿やホームステイでの共同生活通して生活面や(住居様式や食事の作法、時間の捉え方)、コミュニケーションの面において様々な気づきを得たようである。中には、「同じ面が多かった」との声もあげられ、文化の異同の両面に目が向けられていた。

表1 相手文化と自文化に対する主な気づき (生活およびコミュニケーション面)

日本側	相手文化	<ul style="list-style-type: none">・日本ではお風呂の入る習慣が普通だが、韓国ではシャワーが主流なことに驚いた。・お風呂がトイレとしきりがなく、ユニット形式。・高層マンションが多い。・韓国の人はあまり時間を気にしないんだな一と思った。・一つの皿からみんなで食べる、食器を置いて食べるなど日本と違う点が多数あった。・女の人はお酒をつがない。・家族を大切にする。・生活は、さほど違いはなかった。それはそれで意外だった。・若者は皆同じだね。・人と人の距離の近さを実感した。・とにかく積極的。・やさしい！あったかい！・裏表がないところがすごく好感が持てた。
-----	------	--

日本側		<ul style="list-style-type: none"> ・日本語を覚えようという意識がとても強いことに感心した。 ・物はすべてシェアして当然という文化を感じた。 ・日本とは違い、自分の主張が自由にでき、相手との距離が近く、みんないわばファミリーのような感じなのかなと思った。 ・出し物に関しても、日常のジョークにしても、韓国の人の方が笑いを取ることに一生懸命だった気がします。おかげでいっぱい笑わせてもらいました！
	自文化	<ul style="list-style-type: none"> ・日本人は清潔すぎる。 ・お風呂大好き。 ・時間に正確な文化だと思う。 ・日本の接客業はすごいんだなあと改めて実感した。 ・自分から積極的に話すことが少ない。 ・日本人は初対面だと構えてしまう傾向があり、あたりさわりのない話から始める。 ・日本人はやっぱり控えめ。 ・日本人はスキンシップが少ない。 ・「空気を読む」っていうことが、日本社会にいかに重要で中心となっているかわかった。そして、それってどうなの？と客観視できた。
韓国側	相手文化	<ul style="list-style-type: none"> ・浴槽を使うために毎晩近所のチンチルバンに行く日本人の友達の姿に驚いた。 ・朝起きたらすぐ顔を洗って準備していて、日本人は勤勉だと思った。 ・韓国人比べものを借りたりしないし、迷惑をしないようにすると感じた。 ・日本人に対する偏見があり、一緒に生活したら、いろいろ違う点も多く大変だろうと思っていたが、そうではなかった。ただ、少し礼儀を重んじ、自身の空間を大切にすることというを理解するだけでよかった。親しくなったあとは、韓国人も日本人も同じだと感じるようになった。 ・日本人は「かわいい〜」「おいし〜」「ありがと〜」「ごめん〜」とよく言う。 ・褒める文化のためでしょうか？韓国の友達とは照れくさくてほとんど使わない褒め言葉を、日本人の友達と一緒にいるときはたくさん使った。 ・話すときによく相槌を打ち、討論をするときも相手の気分を害さないように適度に同意し、遠回りに話すなど、コミュニケーションが上手いと感じた。 ・やはり韓国にくらべ、より個人的であるという印象を少なからず受けた。 ・座り方や、お風呂の文化そしてスキンシップの違いなどがある
	自文化	<ul style="list-style-type: none"> ・韓国人（特に私）は、時間概念が足りないと思った。性質は、せっかちなのに時間概念がなく、それで人々がコリアンタイムというんだなと気づいた。 ・韓国人はお互いの領域を侵すことをなんとも思わずむしろ当然だと思うようだ。 ・休憩所に行ったとき、韓国の子たちは、皆で食べることを考えて買うけど、日本人は各自が食べるものだけを買うようだった。やはり韓国の方が情があるというか・・・ ・地下鉄に乗ったり、道を歩いているとき、喧嘩したりわめいている人が多くて、恥ずかしかった。韓国人は他の人のために配慮する生活習慣が必要だと感じた。 ・物の貸し借りが当たり前。自己中心として考える傾向があるのではないかと思った。 ・日本人がごめん（謝罪）やありがとう（感謝）をよく表現するのは反対に、韓国人は理由を話さなくても、お互い謝罪の気持ち、感謝の気持ちがわかり、無理に話さない。「情」の概念と関係があるんじゃないかと思った。 ・韓国人のストレートに話すコミュニケーションを今回より実感した。速く明快な韓国人のコミュニケーションもいいけど、もう一度よく考えて慎重に話す日本人のコミュニケーションの仕方も必要ではないかと思った。

以上のように、自他文化に対して多くの気づきや発見を得ていることがわかったが、その一方で、「物はすべてシェアして当然という文化を感じた。(日)」、「(韓国は)物の貸し借りが当たり前。自己中心に考える傾向があるのではないかと思った。(韓)」、などに見ら

れるよう、せつかくの気づきを深められなかったり、短絡的に結論付けてしまっているような様子も窺え、若干の危惧を抱いた。物の貸し借りなどに関しては、日本の内と外の概念、韓国のウリとナムの概念などの理解が求められるため、なぜそのようなスタイルがお互いの国で発達しているのかの背景を探り、文化を解釈していくための振り返りの時間やサポートの必要性を感じた。

2.3 セミナー総評

先述のように、4つの質問項目（①プログラムが参加者の関係性を深めるのに十分なものであったか②担当教師およびTAのサポートは適切であったか③両国の参加者が対等な関係をできるよう配慮されていたか④実習や体験から得られた気づきを振り返る時間が十分に与えられていたか）に対し5段階評定によって平均値を算出した結果、①日本 4.18 韓国 4.25、②日本 4.36 韓国 4.37、③日本 4.05 韓国 4.24、④日本 3.00 韓国 3.12、となり全体的に韓国の方が若干高く、日韓とも④の評価が低かったことが分かった。

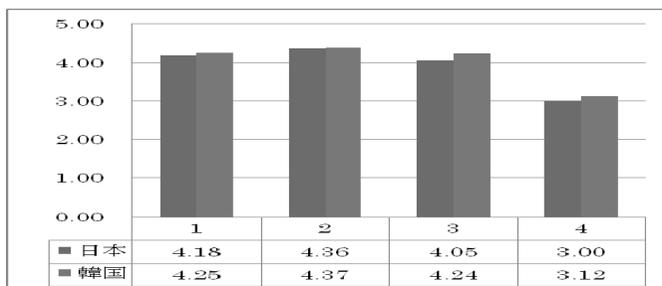


図1 4質問項目のセミナー評価平均値

①については、

- ・ホームステイやソウルでの野外調査、全体合宿、自由時間、出し物の練習等で深められた。(日)
- ・プログラムが1週間一緒に行動するものとなっていて、関係が深まった。(韓)
- ・グループ内はすごく仲良くなれたが、他のグループの韓国の学生とあまり話す機会が作れず少し残念だった。(日)

など、関係性を深めるプログラム内容に概ね満足しているようであったが、グループの枠を超えた交流を望む声もあげられていた。

②については、

- ・チームが混乱しているとき、先生方がいろいろ助言してくださってとてもありがたかった。(韓)
 - ・討論で困ったときや、道案内など常に学生が困っていることを察して動いてくださった。(日)
- など、満足なサポートを得られたとの声が多かった。しかし、少数ではあったが、
- ・合宿では時間が本当に限られているので、話し合いに対するアドバイスは最小限にしてほしかった。話し合いに介入されて中断するのがやりにくかった。(日)

- ・時間の指示などがあいまいだった。(日)

となど、TAとしての筆者自身の今後の課題となる感想も見られた。

また、③については

- ・日本人がお客様になることもなく、特に合宿では両国が協力できてよかったです。(日)
- ・お互い学生で年も近い友達と感じ、対等でないと感じたことは少しもなかった。(韓)

と、積極性のバランスに言及した意見や、より共通点に着目した意見があった一方で、

- ・全体的に日本人の韓国に対する文化や言語理解力が乏しかったと思った。(日)
- ・ディベートが日本語なので、仕方がないことだが日本主導になっていた。(日)
- ・日本側は成績が関係してくるので、討論や発表準備で日本側にあわせ譲る部分があった。(韓)
- ・まず日本語で進行するので対等でありえるのかと・・・次に参加する日本人の皆は、韓国語をもう少し勉強して参加したらいいと思った。(韓)

などやはり言語や文化理解の面、また一方のみが授業の一環であるという非対等性を指摘する声があがった。この点に関しては、両校のカリキュラムにも関係してくるため是正するのがなかなか難しい。そのため、これまででもできる限り日本側は事前学習として韓国語や韓国文化を学ぶ時間を設けたり、討論やチャット際には両国の教員やスタッフが言語や文化理解に関しサポートを行うよう努めてきたが、今後もそのような取り組みを継続し、より強化していく必要があるだろう。

最後の④については、

- ・もう少し時間が欲しかった。(日)
- ・合宿や実習で考えたことを分かち合い消化する時間が足りず、振り返る時間がほしかった。(韓)

など、各グループでの話し合いの時間や全体討論の時間の拡大を望むものが多く、気づきや発見をより深めたいと切望している様子が窺えた。しかし、その一方で、

- ・合宿前に実習日があったので、十分に討論できた。(日)
- ・気づいたことなどは十分に話せたと思う。(韓)

などの声もあったため、時間の拡大は検討を重ねるべきではあるが、先に述べたようにテーマ研究に関して、合宿の初日または、事前準備の段階から各グループごとにタイムスケジュールを作成させるなどして、時間管理の重要性を説いていく必要があるのではないかと思った。

以上は、研究テーマに関する討論に関する振り返りに関するものであるが、次のような

- ・全体的に自分のことを振り返る時間が少ないと感じた。(日)
- ・毎日忙しいスケジュールだったので、バスの移動等では個人的に作りました。(日)

などの感想は、相手文化および自文化の生活やコミュニケーションに関する気づきを含めた振り返りの時間を意味していたと思われる。先述のような、文化解釈の早急な結論付けを避けるためにも、気づきや発見を深めていく作業を個人・グループ・全体で考える時間を設けることも今後望まれるであろう。

3. 考察

以上のアンケートの分析から、日本側は、異文化に戸惑いながらも積極的に韓国の文化に飛び込んでいき、その温かさに触れ、個としての親密な交友関係を築くことで、韓国に大きな関心を抱きつつ様々な気づきを得ていることがわかった。そして、それと同時に、歴史的な問題も含め、日本という国を、またその文化に属する自分自身を客観的に見つめることのできた貴重な経験を得たようであった。今後も、同じアジアの国である韓国に対し関心を持ち続けながらセミナーで得た気づきを発展させ、そして多文化社会で求められる柔軟性や積極性、また複眼的視点を養ってってもらいたいと思う。

一方、韓国側は、日本語に苦勞しながらも、日頃の日本語・日本文化学習の成果を確かめることのできる絶好の場であるとし、自主的かつ積極的に交流に臨み、日本人とのコミュニケーションに自信を抱きつつ、新たに得られた気づきや発見により自分なりに文化理解に努めていたことがわかった。日本文化に対する既存の知識を再確認したり、その知識との異なりを感じ、再び理論の再構築を目指したりしながら、文化理解を深めていたようである。しかし、先述のように、文化を体系的に解釈するまでには至らなかった様子も窺えたため、特定文化として日本文化を専門に学んでいる韓国側の学生には特に、文化の深層を掘り下げていく研究に今後、果敢に取り組んでほしいと思う。

セミナーの今後の方向付けを行うための具体的な提案としては、先に述べたとおり、グループ研究における時間管理の促進や、生活面やコミュニケーションに関する気づきに対する振り返りの時間の設定などがあげられよう。そして最後に、日韓文化理解の学習（文化特定タイプの学習）と並行して、異文化間教育という文化一般タイプの学習を行うことが必要なのではないかと強く思った。文化とは何か、自分は文化を固定的なものとして捉えているのか、動的なものとして捉えているのか、また文化の共通点に目を向けているのか、差異点に目を向けているのか、文化の多様性を理解しているのか、ステレオタイプを認知に関係したカテゴリー化と理解しているのか、等々といった学習がより深い文化理解を促し、交流に悩んだ際の一助になるのではないかと思う。

4. おわりに

今回を含め、過去3回のセミナーにTAとして参加の機会をいただき筆者としては、第7回セミナーはより進化を遂げた有意義なセミナーであったと思う。そして、そのような素晴らしいセミナーを作り上げたのは、他なら参加者たちのお互いを尊重し思いやる気持ちであったと感じた。今後も発展を続ける交流セミナーに大きな期待を寄せるとともに、今回、参加の機会をいただいたことに心から感謝を申し上げたい。

第7回日韓大学生交際交流セミナーを振り返って

鄭在喜（お茶の水女子大学大学院生）

お茶の水女子大学と同徳女子大学校の日韓大学生交流セミナーは、今年で7回目を迎え、8月17日から8月24日にわたって韓国のソウルで行われた。本セミナーに日本側のアシスタントとして参加した立場から、今回のセミナーの意義を含め、いろいろと感じたことを振り返ってみたいと思う。

まず、今回のセミナーも例年と同様、合宿を通してたくさんの交流ができたことが最も大きい実りであると思われる。今年は昨年より1泊増え、3泊4日を日韓の大学生が共に過ごすことになり、お互いの言語や文化をより深く理解し、交流できる場になっただろう。

今回のセミナーは、ソウルで本セミナーの開会式やオリエンテーションなどの行事、そしてグループ別野外実習を終え、江原道にある合宿所で各グループが調査した内容をまとめて発表する形で行われた。発表準備のための話し合い時間では、すでに事前準備の段階で十分意見交換がなされたためか、まとめに向かった活発な話し合いができていた。また、お互いに用意した発表資料を見せ合いながら、互いの資料について意見を言い合うなど、無駄な時間のない中身のある討論が行われた。中には時間内に意見がまとまらず、部屋に戻って議論を続けたグループもあった。そして、発表の際には調査報告を含め、お互いをより深く理解するため、さらにより良い国際交流のために今の私たちがどうすべきなのかという今後の方向まで提案し合った非常に有益なセミナーであったと思われる。

以上の点を踏まえ、今回のセミナーの意義を考えると、以下の2点が挙げられよう。

まず、今回は両国の現大学生の視点からみた議論ができた点である。その一例として文化グループでは若者の文化に焦点を当て、内と外からみた両国の若者文化に注目していたが、これは今まで日韓の文化について対照されてきた既存の伝統的なものではなく、自分たちが経験しているからこそ比較でき、議論できるテーマを選んだことで、正しく現時代を注視してお互いをより身近く感じ、理解が深まる契機になったと思われる。

次は、今まで簡単には口にできなかった歴史問題についても議論できた点である。これは日本側の学生だけではなく、韓国側の学生にも多くのことを考えさせられた時間であっただろう。戦争とはあまりにも程遠い世代であるため、その重さをよく分かっていないように見えた部分も多少あったが、その重さのためお互い避け続けていたテーマについて議論できたことはそれだけで十分意義あることだと思われる。この機会を通して初めて知ったという学生も少なくないだろう。日韓の歴史問題は非常に難しいところではあるが、これからを背負っていく若者としてお互いの歴史をきちんと知ることは大事であると思うし、今回のセミナーが歴史問題へもう一步踏み出すきっかけになったことを願う。

最後に、今回のセミナーに参加して感じたことを少し述べたい。日韓交流セミナーは昨年続き、2回目だったが、お互い真剣に向き合おうとしている両国の学生たちを見て交流というものの重要性について再度考えさせられた。また、例年お互いに対する関心が高まる学生たちにアシスタントとしても有益なアドバイスができるよう、もっと勉強が必要だと思った。今後もこの日韓大学生交流セミナーがお互いの文化や習慣を理解し合う場であり続けることを願う。

【総評】

第7回日韓大学生国際交流セミナーを振り返って

金 榮敏（同徳女子大学）

日韓大学生国際交流セミナーは、今年で第7回目を迎えました。2010年8月17日～24日までの8日間、韓国同徳女子大学および同大学ソラク研修院で、両校の52人の学生・教員の参加で行われました。真夏の強烈な暑さが続く中で、今回の交流セミナーでも、文化体験・野外実習・発表会などすべてのプログラムが計画通りに行われ、期待した成果を挙げることができました。事前準備の期間を含めてほぼ5ヵ月間、交流セミナーのためにがんばってくれたお茶の水女子大学・同徳女子大学の皆さんのお陰です。大変お疲れ様でした。以下、今回のセミナーについていくつか振り返ってみたいと思います。

今回の交流セミナーで注目すべきところは、今まで触れることのなかった歴史問題を取り上げたことでしょう。「歴史・平和」グループで「従軍慰安婦」問題をテーマにし、日帝強占期という不幸な韓国の歴史を振り返ってみました。また、全員で韓国の江原道高城郡にある統一展望台に見学に行き、南北の分断の現実を目の当たりにしてきました。帰りのバスの中で「南北の分断に日本の植民地だったことが深くかかわっており、日本にもその責任がある」と言っていた森山先生の発言は今だに心の中に鮮明に残っています。日韓の交流の場では敢えて過去の歴史問題を触れまいとすることがよくあります。「過去の問題を正しく認識することも大事だが、これからの関係がより重要である、だから難しい問題はできるものなら避けたい」という暗黙の共感があるからでしょう。確かに、両国間の歴史問題は扱いにくい問題です。両国の視点や価値観の違い、教わってきた歴史教育もかなり異なるからです。また、両国の政治的・外交的な立場も深くかかわっているからです。しかし、いつまでも避けて通ることはできません。歴史問題を議論する場を一つ一つ積み重ねていくことが必要なのです。そういう積み重ねがあってこそ、素直に過去の問題を見つめることができるようになると思います。そういう意味で、今回の交流セミナーでの「歴史・平和」に対する議論は、かなり意義ある試みだったと思います。

また、今回の交流セミナーでは多様な交流プログラムがありました。料理体験の時間やテュオンド試演、サムルノリ（伝統農楽）公演といった文化体験のプログラムが設けられました。さらに、合宿の期間を3泊4日に増やし、参加学生間の交流の活性化を試みました。前回の参加者から、他グループのメンバーとの親睦を求める声があり、それを反映してのことでした。今回同徳の参加者は2年生が中心だったので、日本語でのコミュニケーションには多少の苦労が見られました。しかし、合宿を通して共有する時間が増えたことにより、同じ時代を生きる若者としての共感が生まれ、言語の壁を乗り越えることができたのだと思われます。

最後に、反省点として2点ほど挙げたいと思います。

1点目はテーマ設定のことです。グループのテーマを決めるのに多くの時間を費やしてしまったように思われます。その分、事前調査の時間が縮まってしまう、実習先の確定が遅れたり、事前調査が十分に行われなかったりもしました。また、グループのテーマの範囲が全体的に広すぎて、焦点を絞り込みにくかったことも挙げられます。次回はグループのテーマの範囲をより限定し、グループ活動をより効果的にする必要があるのでないかと思います。

2点目は準備期間中のグループ間のコミュニケーションが十分に行われなかったということです。第6回の交流セミナーに続き、今回も映像チャット・文字チャット・メーリングリストを活用して、参加者間の活発なコミュニケーションを図って見たのですが、技術的な問題・個人の時間的な問題などが重なり、期待した成果があげられなかったのです。グループ間のコミュニケーションをより活発化させるための工夫が求められます。

毎年このセミナーに参加して、胸があつくなる瞬間があります。それは最終日の見送りの瞬間です。別れを惜しむ両校の学生の姿を見て、私自身も胸があつくなったりするのです。別れ惜しむその心こそが、まさに交流セミナーの成果なのでしょう。韓日大学生国際交流セミナーの目標の一つは、セミナーという場を借りて両国の大学生の交流を活発にし、隣国に対する理解を深め、より未来志向的な関係を築いていくことにあると思います。別れ際の風景は、隣国への理解と、これからのよりよい関係構築への積極的な姿勢が、すでに両校の皆さんに芽生えていることを物語っているのだと思います。次回以降もこの日韓大学生国際交流セミナーが両国の架け橋としての役目を立派に果たしていくことを期待しています。

【総評】

グローバルな人材育成のための実践の場として

森山新（お茶の水女子大学）

第7回を迎えた今回の日韓大学生国際交流セミナーは今までにない大きな成果を上げたと言ってよい。最終日、日本へと旅立つ我々に対し、韓国側の学生全員が見送りに訪れ、別れを惜しみ止め処なく涙を流しながら抱き合う両国の学生を引き裂くのに30分を要した。お互いにプレゼントを交換し、再会を誓う。韓国の学生に比べれば日頃引っ込み思案がちで感情を表に表すことの少ない日本の学生も、この時はあふれる感情を抑えることができないようだった。帰国後には、すぐさまスカイプやチャット、メーリングリストで思い出を語り合っていた。これらの姿には、本セミナーが今までのいつにもまして交流が深まったことを物語っていた。

今回は韓国側の参加者の半分が未だ日本語学習歴1年余りの2年生であったり、日本語が専攻でない学生が多数参加したりというハードルもあった。にも関わらず、学生たちは事前の遠隔交流で、セミナーで、見事にそれを乗り越えてくれた。

成功の第一の要因は、学生の主体的な参加であろう。遠隔での事前交流は、授業外に行われたこともあって、自分たちで考えてスケジュールを組み、進めていかなければならず、双方の学生の主体的な姿勢が求められた。セミナーの細かな企画も前回あたりから学生にゆだねられる部分が増えた。例えば今回は、歓迎会、文化体験教室、送別会、韓国料理体験、韓国史跡探訪のそれぞれを韓国側のグループが準備し、担当した。そこには教員が企画するのはまた異なった、ユニークなアイデアに満ちており、自らセミナーを成功させようと言った高い動機づけも感じられ、それらは今回のセミナーが盛り上がった何よりもこの要因であった。

第二に合宿を3泊4日に増やしたことで、その分討論やコミュニケーションが深まった。学生たちは言語と文化、受けてきた教育の壁などを乗り越えながら幾晩も話し合い、共通のゴールを模索した。合宿でグループ別の発表会が終わり、打ち上げを兼ねた送別会が行われた時にも、学生たちの目からは涙があふれていた。

韓国の学生たちが思いの限りを尽くして自らを迎えるその姿に、日本の学生たちは大きく感動し、自らも変わっていった。とかく距離を置いてしまう日本の学生だが、このセミナーではそんな姿は見られず、一日でも一時間でもいっしょにいたい、いっしょにしようとする日本の学生の姿があった。スキンシップに慣れていない日本の学生も後半には平気で韓国の学生と手をつなぎ、抱き合っていた。

このセミナーがめざすのは、グローバルな人材育成である。従軍慰安婦といった日韓の歴史的なタブーをあえて語ったり、女性の社会進出、教育、都市の問題といった日韓共通

の課題を考えあったり、若者同士、お互いのよい点を学びあったりしながら、国境と歴史、言語と文化の壁を越えて行く。そこに求められるのは国という枠を越えたグローバルな心であり、様々な違いを克服しながら理解しあおうとする、言語的、文化的なスキルである。韓国の学生は日本語で討論し、発表するための苦勞、日本の学生は韓国の文化を理解し学ぶ苦勞を越えながら一致点をめざした。

また今回、38度線近くの統一展望台や朝鮮戦争展示館を訪れ、南北分断の現実を目の当たりにした。日韓の学生が一緒になっての訪問は、異なった視点から南北分断の悲劇を見つめさせることにもなった。何故韓国が分断の悲劇を被らなければならなかったかを考える時、ドイツ同様、日本が分断されてしかるべきところを、韓国が一時日本の植民地であったがために、またしても悲劇は日本でなく韓国に訪れたということを両国の学生は感じることとなった。日本の学生たちは南北分断に対する認識を新たにしていた。

日韓両国の間には未解決な問題が未だ多く残されている。こういった問題はお互いが自国優先の心を持っていくら話し合いを重ねても解決できるはずはない。今回、両国の学生たちが相手を理解しあおうというグローバルな心を持ちながら、真摯に話し合う姿勢を持ったことで、未解決の問題を解決するために何が必要なのかを感じさせてくれた。

セミナーは事前学習と4日間の合宿を加えたことで深まりを増したが、思いもかけなかったことに、今回は事後にも交流が続いている。授業を越え、セミナーを越えて交流する学生たちの姿にグローバル時代の明るい未来を託したい。

最後に、今回のセミナーを大成功に導いて下さった金榮敏先生をはじめとした同徳のスタッフの皆様、日本の学生を暖かく迎えて下さった学生のみなさん、ホームステイを受け入れて下さったご家族の皆様から心から感謝いたします。また安全面などでご協力いただいた本学国際本部、国際交流チーム、グローバル教育センター、グローバル文化学環の皆様にも心から感謝いたします。

日韓の過去・現在を見つめ未来を考える

～2010年第7回 日韓大学生国際交流セミナー報告書～

発行年月日 2011年1月31日

発行 お茶の水女子大学グローバル教育センター・グローバル文化学環

住所 〒112-8610 東京都文京区大塚 2-1-1

電話&FAX 03-5978-5965

<http://isl.li.ocha.ac.jp/index.html>

発行協力 同徳女子大学外国語学部日本語学科

住所 〒134-714 ソウル特別市城北区月谷洞 23-1

電話 02-940-4370 FAX 02-940-4191

編集 森山新 ・ 水口里香（お茶の水女子大学）

印刷 よしみ工産



第7回日韓大学生国際交流セミナー